

日本におけるオーギュスト・コント

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

56

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

408

(終了ページ / End Page)

284

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021086>

【特別寄稿】

日本におけるオーギュスト・コント

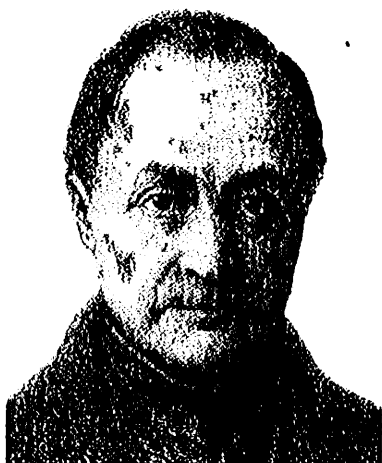
宮 永 孝

- 一 フランスにおけるA・コントの遺跡
- 二 A・コントの発見者 西周^{あまな}
- 三 わが国の文章資料に現われたA・コント
- 四 本稿で取りあげた文献資料名一覧表
- 五 月刊雑誌『社会学徒』とA・コント
- 六 歴史的概観―日本におけるA・コントの運命
- 七 英文レジュメ

一 フランスにおけるA・コントの遺跡

社会学^{ソシヨロジ}の名づけ親であるオーギュスト・コント（一七九八―一八五七）の遺跡をめぐることとは、こんにち必ずしもむずかしいことではない。南仏モンペリエのメルシー街のサント・ユーラリ教会の真むかいに生家があるし、モンペリエ大学の構内には胸像^{ビュースト}がある。

パリにおいては、第六区にあるルクサンブル公園の一方の側にその名を呈した“オーギュスト・コント街”がある。さらにソルボンヌ広場には記念像（胸像）が、またそこから五分ほど歩いたところのムスイユー・ル・フランス街十番地には、一八四一年七月十五日から、息を引きとる一八五七年九月五日まで暮らした“コントの家”（五階建のアパルトマンの三階、一九二八年「昭和三年」）十二月、フランス政府により歴史的建造物に指定された）がある。かれの墓は、ペール・ラシェーズ墓地の第六区第十七号地にある。



オーギュスト・コント



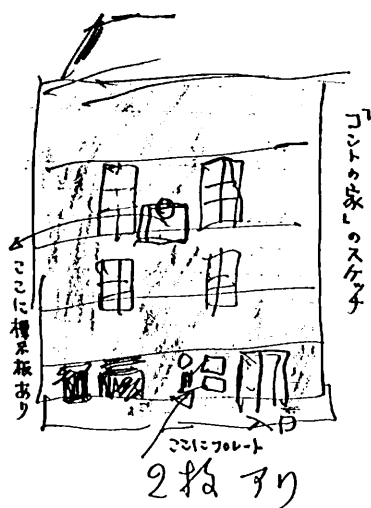
René Hubert 著 *Auguste Comte*, Vald. Rasmussen, 1927 より。モンペリエのメルシー街にあるコントの生家。



モンペリエ大学構内にあるコントの胸像。

コントにゆかりの深い遺跡をすべて訪ねた邦人は多いとはいえないであろうが、中にはどれか一つぐらいは、じっさい見学に訪れた者もいるかもしれない。仏教会学者・浅野研真（一八九八―一九三九）は、昭和三年（一九二八）日本大学社会学研究室助手のとき、文部省よりフランス留学を命じられ、パリに滞在ちゅうコント研究とコント文献の蒐集につとめたし、社会学者・銅直勇（一八九九―一九七九、京都帝国大学卒業、のち熊本師範学校校長、横浜国立大学、日本大学教授を歴任）は、昭和八年（一九三三）六月三十日の午後、ムスイユー・ル・フランス街のコント臨終の家を訪れている。社会学者・評論家の清水幾太郎（一九〇七―八八）も、昭和二十九年（一九五四）パリ滞在ちゅうにコントの家を訪問している。

わたしが友人であるリセの教授――ポール・ラヴァイユ氏（中国研究家）とコント終えんの地を訪れたのは、平成十七年（二〇〇五）の秋のころであった。コント

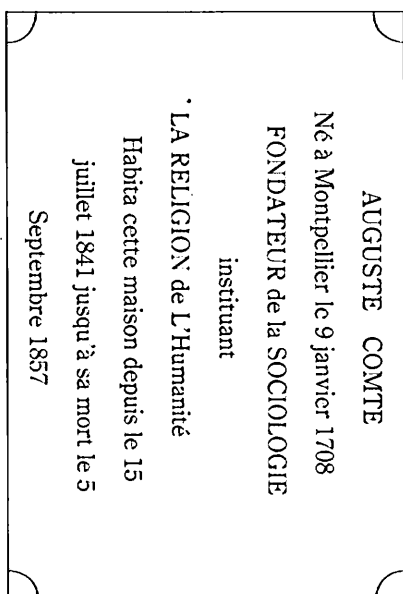


「コントの家」のスケッチ



ムスイユー・ル・プランス街にある「コントの家」(パリ)
〔筆者撮影〕

の家を見学するには、あらかじめ予約が必要である。コントの家がある三階の通りに面した壁に、つぎのような表示板がはめ込まれている。



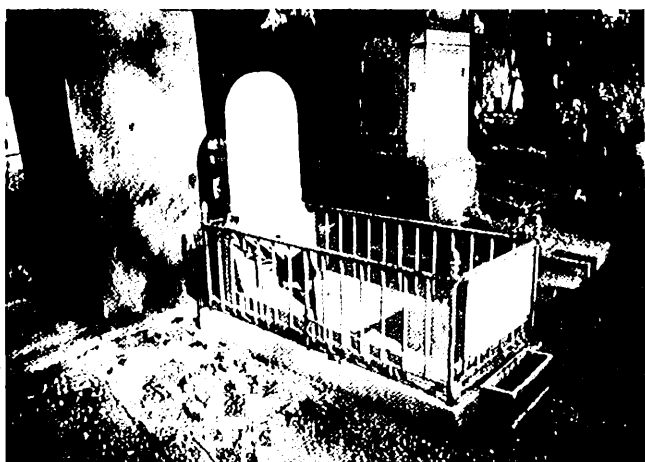
〔訳〕

一七〇八年一月九日にモンペリエで生まれたオーギュスト・コントは、社会学と人道教の創設者であるが、一八四一年七月十五日から死を迎える一八五七年九月五日まで、この家で暮らした。

コントがその生涯のさいごの十八年間をすごしたアパルトマン（日本流に言えば賃貸マンション）は、かなり広い。間数はぜんぶでいくつあったか、いまははっきり想い出せないが、



コントの居室（パリ）。〔筆者撮影〕



ペール・ラシェーズ墓地にあるコントの墓（パリ）。〔筆者撮影〕

六、七部屋あったようにおもう。浅野研真は、『「コムトの家」の事ども』（『社会学徒』一月号所収、昭和五年一月）のなかで、「玄関や小部屋を加へれば、全部で十部屋もある」と語っている。

ともあれよく整頓されたコントの家の部屋は、すべて各部屋にドアはあるものの一続きになっている。玄関を入れて左が台所。わたしの取材ノートによると、ムスィユー・ル・プランス街に面して——最初の部屋がコント手沢の蔵書がある「居室」、つづいて「客室」「講義室」「食堂」「寝室」などがつづく。いちばん奥の部屋である寢室の片すみに、ベッドが寄せられている。そこで一八五七年九月四日午後六時半——コントは胃ガ
ンにより、六十年の生涯をとした。

コントの家の屋内の見取図（略図）は、左記のとおりである。

調度といえは、すこしばかりの机といすていどしかなく、それは簡素なうす暗い部屋によく合っていた。管理人のマダムは、いろいろな説明してくれたが、わたしのフランス語の力では、よく聞きとれなかった。コントが用いた円筒形の黒い帽子をどこからか引っ張り出してきて見せてくれた。



(ムスイユー・ル・フランス街)

*

二 A・コントの発見者 西周

さて本稿のテーマは「日本におけるオーギュスト・コント」である。コントの人と学説はいつごろわが国に伝えられ、どのように日本人から親しまれ、また研究の対象とされてきたのか。またかれは日本の社会学史上どのような位置を占め、どのような感化なり影響を学界にあたえたのか。要するに発動者としてのコントの学説と名声の日本における伝播と浸透度を、おもに明治・大正・昭和期の新聞・雑誌に現われた記事や著訳書から分析したり、評価することによって、日本におけるコントの『受容環境』を知ろうとするのが、この研究の目的である。



西 周

コントは社会学の命名者であったところから、“社会学の始祖”としての榮譽になったのであるが、日本においてコントの名をはじめて人に伝えたのは西周あまねであった。西は津田真一郎とともに文久三年（一八六三）四月から慶応三年（一八六五）十月まで、幕生としてオランダの学都レイデンに滞在し、フィッセルング教授の私宅で週二回個人教授をうけたのであるが、この間のある時期にコントの学説を知るのである。

西はオランダ時代の良質のノートに、西洋哲学史のようなものを難解な漢文で書いている（「開題門」）。それを書き下し文にすると、つぎのようになる。

最近になって ポズティヴィスム
学正氏非主義

（“実証哲学”）のことを知ったが、道理がはっきりしているから、これからじぶんにとって大いに役立つことであろう。これ

はわがアジアにおいてまだ見たことのないものである。そしてその提唱者は、オーストリア 奥悟文・ドイツ 坤度である。

当時、西はまだ ポズィティヴィスム（仏・“実証哲学”の意）の話を訳すことができなかったから、原語をそのまま用いている。西は何によって、コン

トとその哲学を知ったものか明らかにしていないが、おそらく後述の蘭書によったものか。

幕末期、西はまだコントのくわしい学説について人に語っていないし、訳してもいない。が、明治三年（一八七〇）十月明治政府の兵部省に出仕し、学制取調掛となり、浅草鳥越三筋町に居をかまえると、自宅からすこし離れた所にある長屋を借りて、私塾「育英舎」をひらき、十数名の塾生を相手に洋学を講じた。この年の冬、西はイギリスの哲学者・批評家ジョージ・ヘンリー・ルイス（George Henry Lewes（一八一七～七八）が著わした『列伝哲学史』（*Biographical History of the Philosophy*, 1875）中の「オーギュスト・コント」（第二章 六四三～六五六頁）に依拠して、コントとその三段階説、実証哲学について言及した。いまそれを現代語風にやさしく言い換えると、つぎのようになる。

ちかごろフランスのオーゴスト・コントという人が発明したことに、すべて何事もはじめからよく遂げられるものではないというものがある。あることをして終局に達するには *stages* すなわち舞台、あるいは場ばとでも訳せるが、その場所は三つある。はじめの一つより、しだいに二つを経て、第三に至

るものである。その第一の場所とは、Theological Stageすなわち神学家、第二はMetaphysical Stageすなわち空理家、第三はPositive Stageすなわち実理家である。ここまで来て、はじめて止るといえる。

明治三年庚午冬十一月 西先生口述「百学連環」第一 総論 稿 永見の饒香

注・永見はもと福井藩士。

西はさらにコントの実証哲学にふれた。

Positive Philosophy この学問のおもとは、フランス人のオーグスト・コントであり、他に Whewell⁺¹⁷⁹⁵⁻¹⁸⁶⁶と John Stuart Mill がいる。ミルという人は存命中である。

西先生口授第二編第二号 百学連環 第二稿中ながみの饒香

「百学連環覚書」(第一冊)の中にコントの名が出てくるし、この中で Cours de philosophie positive を「実理上哲学」と呼んでいる。

西は「五原新範」(明治四、五年「二八七一、七二二」ごろに講義用に書いたもの)において、コントの有名な「科学分類法」(天文学・物理学・化学・生物学・社会学の五科)のことを、「原学」「五原」「五科」などと呼んでいる。

哲学の性質や西洋哲学小史、コント伝、その実験上の理論、三段階説、生命論、社会学(人間学)などについて論じたものに「生性発蘊」(明治四年前後の起稿と考えられている)がある。

コントの伝記については、つぎのように記している。西の原文をやさしく言い換えると、つぎのようになる。

名は奥胡斯^{オグースト}という。姓名は坤度^{コンド}(一七九五―一八五七)という。ヨーロッパのモンペリエの人である。一八一四年歳十九でパリにある百術学校^{エコールポリテクニク}に入學し、のちその学校の復習教師^{レベコ}に補され、ついで入学試験の官僚(試験官)に任じられた。一八四四年歳四十九で同僚と意見あわめため官をしりぞいた。新学を唱えるコミュニストの巨魁^{キョウキ}サン＝シモンのことを耳にはさみ、喜んでその門をたたき、すぐれた弟子となった。一八二五年サン＝シモンは亡くな

った。

コントは歳三十で自説を立て、新たに学問を創設しようとした。著述としては「クウル・ド・フィロソフィー・ポンチーウ」がある。これを訳すと「実理哲学史」となる。一八三九年より翌年にかけて、「カテシズム・ボンチキスト」を著わした。これは「実理問答」（一八五〇年）とでも訳せる。一八五一年から五四年にかけて著わしたものに「ボリチック・ボシチキスト」（「実理政学」といったものがある）。

その晩年、宗教のことに及ばなかったことを悔い、「ラ・オレリジョン・ド・リュマニテイ」（「ラ・ルリジョン・ドゥ・リュマニテ」のこと——引用者）すなわち人道教の書を著わした。これは新興宗教を建てんとする考えから出たことである。このさいこの計画については、世間がそのあやまちを大いにとがめている。コントはじぶんの学問のことを「ボシチキズム」（実証主義哲学の意——引用者）と呼んでいる。それは観念論の諸流派とは異なるもので、条理の意であるから、ここでは実理学と訳しておく。

西は「尚白簡記」（明治十五年「一八八二」三月ごろ、塾で講義用に起稿したものと考えられている）の中で、コントの「科学の分類法」について記している。

埃居斯多・坤度はむかし（科学の）五つの型——すなわち天文学、物理学、化学、生物、社会学を世に示した。これはもっとも単純なものからもっとも特別に組織せられた現象まで、科学の方則の基準を定めたものであるから、近世の名士もまたこれを踏襲している。

西は明治四年（一八七二）ごろ、英語のsociologyを「人間学」と訳していたが、同十五年（一八八二）ごろになると、こんにちわれわれが用いるような「社会学」という訳語を用いている。

西がコントについて得た知識の出所は、蘭書では津田真一郎が所蔵していたComte A: *Algemeene gronds lagender stellige Wysbegeerte*. S. Gravenhage, 1846（『実証哲学の一般的基礎』ほどの意。ハーグ、一八四六年刊）のようなものであろう。英書では、ジョージ・ヘンリー・リュース George Henry Lewes, 一八一七—七八、イギリスの哲学者、批評家）が著わしたつぎの二書に依拠したことはたしかなようだ。

(1) *The Biographical History of Philosophy, from its origin in Greece down to present day*, 1857

これは一八四五年に初版が出て以来、日本でもよくよまれた書物である。さいくにコントの哲学にふれている。わたしが早大中央図書館で見たものは表紙がなく、毛筆で *Biographical History of the Philosophy* と書かれ、「長谷川氏蔵 第六号」といった蔵書票のようなものが張っており、「此図書館外不許帶出」となっていた。同書の第十二章——六四三頁から六五六頁までが *Auguste Comte* である。

(二) *Comte's Philosophy of the Sciences: being an Exposition of the Principles of the Cours de Philosophie Positive of Auguste Comte*, 1853.

初版は一八五三年に公刊されている。わたしが早大中央図書館で見たものは一八七五年版である。版元はロンドンの *George Bell and Sons* である。第四章にはコントの科学分類法が、また同書の巻頭に七頁ほど「伝記的序文」(*Biographical introduction*) が付いている。「生性発達」にみられるコント小伝は、この「伝記的序文」に依ったものであろう。

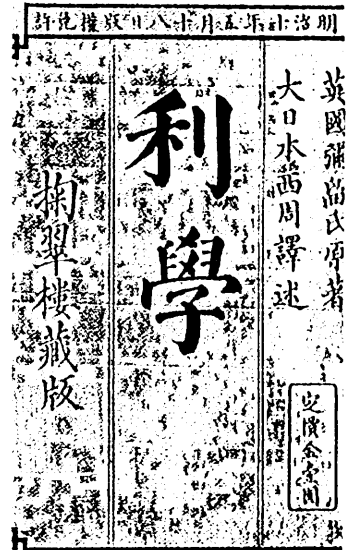
西は幕末期京都にいたころ、十五代將軍慶喜にフランス語の手ほどきをしたことがあったが、じゅうぶんに原書を読みこなすほどの学力はなかったであろう。かれはジョージ・ヘンリー・ルイスやジョン・スチュアート・ミル(一八〇三—七六、イギリスの哲学者・経済学者)の著述から、コントの学説の概要を学ぶことはあっても、直接フランス文献から学ぶことはなかった。

西は明治という社会の変革期における百学啓蒙家であり、哲学的啓蒙活動を盛んにおこなった。かれのコント研究は、塾生にコント哲学の概要を伝えるのが目的であったから、体系的なものではなく、多くは断片的、こまぎれである。ともあれ明治初年から十年代にかけて、西によってコント哲学の片りんが、塾でまなぶ生徒に伝えられたことはたしかであるから、かれはコントの移植者第一号であったといえる。

*

三 わが国の文章資料に現われた A・コント

西は「明六社」(明治六年「一八七三」創設の思想団体の一つ)の会員としてさかんに啓蒙活動をしたひとりだが、同社の機関誌『明六雑誌』(第三十八号、明治八年六月)の「人世三宝説 一」のなかで、コントの名とその実証主義、コントを尊崇していたオランダの哲学者オプゾマー



「利學」著者ミル・J・S
西畑英述

に言及している。

歐洲哲學上 道德ノ論ハ、古昔ヨリ種々ノ變化ヲ歴テ今日ニ至リ、終始同一徹ニ歸スルヲ莫シ、中ニモ曩時ノ説「王山ノ哲學派、韓國ノ絶妙純然靈知ノ説、非布埜、洒兒林、俾歇兒ノ觀念學等ナリ」。猶盛シニ行ハル、ト見エタリ。然レドモ、カノ実理學「仏ノ奧及斯多坤度」起リテヨリ、頗ル世間ノ耳目ヲ一新シタリト見エ、諸大家ノ説モ漸ク実理ニ基ツキタルヲ多キカ。(中略)

〔余十年前、和蘭ニ遊ヒシ時、和蘭ニテ其頃有名ノ哲家(哲學者ト引用者)阿伯曾米爾氏ナリ。此人ナトモ坤度不為校、彌爾等ヲ推尊セラレタリト見ユ〕

注・ルビの一部、区説点は引用者による。

これはおそらく本邦においてはじめて活字となったコントに関する記事であろう。そうだとすれば、コントの誌上紹介は、明治八年(一八七五)六月ということになる。

二番目にコントの名が紙上に現われるのは、西が訳したジョン・スチュアート・ミル著『利學』(掬翠樓藏版、上下二巻、明治十年五月十八日)である。西は原本について、「本論、原名烏地利他尼垂里斯吾」といっているから、Utilitarianism(功利主義)を反訳したものである。コントの名と実証哲学についてのくだりは、上巻につきのようにある。

至リ近日ニ奧及斯多坤度出而唱ヲ実理哲學ヲ、欲ス貫ニ有形無形之両學ヲ、以テ一実理ニ依レ著ス五學模範、……
(きんじつにいたり、オーギュスト・コントいでて、実理の哲学をとなう。有形無形の両学をかんするに、いち実理をもってせんと欲す。五学の模範をあらわす……)

三番目にコントの名が見られるのは、明治十年（一八七七）である。「東京大学法理文学部 図書館英書目録」(Catalogue of the English Books in the library of the departments of law, science, and literature; Tokio Daigaku) 一千五百三十七年（明治十年）九月調査 本部図書館印行 Published by the Library) の「哲学」(Philosophy) の部門のところに

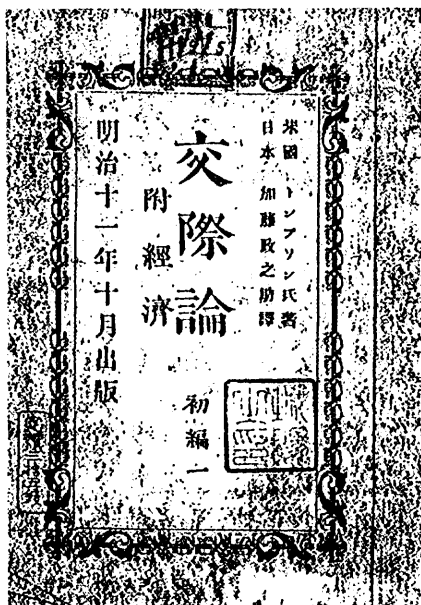
COMTE, A. Philosophy of the Sciences. Tr. by G.H

とある。これはジョージ・ヘンリー・ルイスが訳したコント著『科学についての哲学』の意である。が、何年に刊行された版本か、また出版社名も明らかでない。

つぎにコントの名が出てくるのは、米国 トンプソン氏著
日本 加藤政之助訳『交際論 初編一 附 経済 明治十一年十月』においてである。

コントノ曰ク、学問ノ真味ハ、前言ノ力ニアルト、故ニ其前言ス可ラザル者ハ、之ヲ学問ト云フ可ラス……

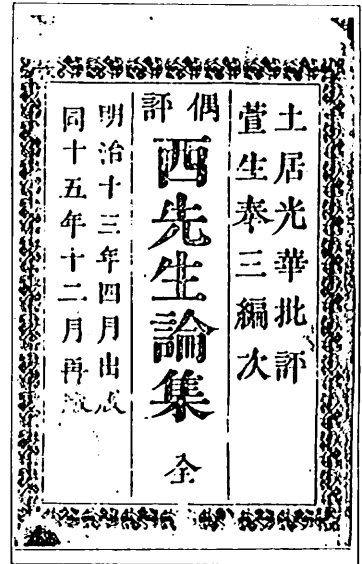
注・区読点は引用者による。



トンプソン氏著 加藤政之助訳 『交際論 初編一』。

つぎにコントが自然科学の一つの体系を包括的に説いたものや、社会学（訳者は「交際学」とか「生活学」といった風に訳している）に関する記事がみられるのは、つぎの訳本である。チャンパー原著
塚本周造訳『論理学 全』（文部省印行、明治十一年十一月）。

オーグスト、コント氏始テ学術ニコノ二大區別ヲ建テ 而シテ所謂拔類学科ヲ 分画シタルコト至テ敵明ナリキ 其説ニ由レハ 則算学、星学、理学、化学、生活学、交際学（社会学のこと）ハ拔類学科ニシテ 六種ノ根元（事のおおもと）タル 性質及ヒ功用ニ適合ス



土居光華批評 萱生奉三編次 『偶評西先生論集 全』
〔筆者蔵〕

其レ算數ハ數、量、度ヲ説キ 星學ハ中心ニ偏向スルコトヲ論シ 物理学ハ凝聚シテ（あつまる）形ヲ成セル物体ヲ論シ 化学ハ同シカラサル物質ノ親和（よく化合する）ヲ論シ 生活學ハ動植物ノ生活スル所以ヲ論シ 交際學ハ人生交際ノ設立ヲ論スル者ト定メタリ

○斯ク学科ノ次序ヲ立テタルモ 同氏ノ説ニ依レハ是ヲ自然至當ノ次序トナシ 是等ノ學術始テ發明セラレシ順序モ 亦此ノ如シトナシ 此數者ヲ學フニモ 亦此ノ序ニ從テ漸々ニ進メハ 則チ其理ヲ了解シ得ルコト至テ易シトイフ（同書、九十二頁）

交際學ハ人間社會ノ理（道理、すじ道）ヲ講ズルノ學ニシテ 其論スル所ノ發象多端ニシテ 前二位スル五大學科ノ理悉ク存セザル無ケレハ 則之ヲ末位ニ置ケリ 夫レ人世交際ノ情態ハ 無機體有機體ノ性質ト万物ノ靈タル人心ノ性質トニ基キテ成ル

而シテ人及ビ社會ノ生命 皆是ノ學科ニ論スル所ノ理ヲ離ル、能ハズ 是ノ利ヲ益々能ク証明シ得ルトキニ 生命モ亦益々完好（すべて備わつてりつぱなこと）ナルヲ得ベシ

人間ノ交際（交際ノやり方）ハ 人心天然ノ性質ニ依頼スルコト更ニ近密（きわめて親しい）ナルカ故ニ 他ノ諸學ノ尚未タ明ナラサリシ時代ヨリ世人既ニ人心ノ理法（人の心の筋道）ト共ニ 交際ヲ其淺短ノ思想ニ由リテ講究セリ
然レドモコント氏曰ク 他ノ諸學開明ニ進メハ 交際學モ亦然ラサルナキコトノ証左史冊（史書）上ニ歴々（あきらか）タリト、交際學ハ平和進歩ノ兩語アリテ 各其意ヲ異ニスルコト 猶器械學ニ動靜ニ別アリ

生活學ニ生活成長ノ兩力アリテ 之ヲ論別スルガコトシ平和トハ 交際ノ 情態（ありさま）變易スルコトナク 依然トシテ 平和ナルヲ謂ヒ 進歩トハ 交際ノ情態變易シテ 更ニ善ニ進ミ 例ハ奴隸ヨリ自由ニ進ムガ如キヲ謂フナリ 蓋此ノ二者ヲ判然論別スルヲ得ハ 交際ヲ知り歴史觀ルニ大ナル裨益アルベシ（後略）

（一一四—一一六頁）

土居光華批評 萱生奉三編次 『偶評西先生論集 全』（明治十三年四月）は、西の小論をあつめて刊行した書物の印象をあたえるが、卷の三にかつて『明六雜誌』（第

三十八号、明治八年六月）に発表した「人世三宝説 一」が再録されている。

蒲生仙訳『支那文明論』（発兌人 山中市兵衛、孝之助、喜太郎、明治十四年十一月）は、コントの門人ピエルヒット氏が著わした「ジウイリザシオン、ドラシーヌ」（支那文明）を反訳したものである。訳者は鹿児島の一と。明治九年（一八七六）司法省法律学校に入り、経済法律の二科を修めた。

同書の「凡例」に、コントの名とその実証哲学（訳者は「実験学」と訳している）のことが出てくる。

此書ノ奥義ヲ探リ其要領ヲ得ント欲セバ 宜シク実験学ノ精神ヲ了ス可シ……実験学ハ原語ニ、ヒロソヒーポジチイウ、ト云ヒ 欧人之ガ義解ヲ為シテ、ヒロソヒイド、ランピリズム、ト云ヘリ 蓋経験論理ノ義ナリ 故ニ暫ク之ヲ実験学ト訳シ 敢テ大方ノ垂教（おしえ）ヲ俟ツ。
実験学、軌近ノ創為ニシテ 実二一八五七年ニ物故セシ有名ノ数学者ワウギュストコント氏ノ發明ナリ 此学ハ吾人ノ觀察ニ触レ 実験シテ事情ニ調レリトスル所ノ哲学ナリ……

注・三橋猛雄編『明治前期思想史文獻』（明治堂書店、昭和五十一年七月、四九一頁）より。

奥竹孝太郎訳述
外山正一問

『社会学之原理 甲乙』（経済雑誌社、明治十五年四月）の第一巻の「原序」に、コントと社会学のことが出てくる。

文藝士井上哲次郎著

倫理新説

明治十六年三月刊行

井上哲次郎著『倫理新説』。

社会ヲ論スルノ学問ヲ称シテ「ソシヨロジー」（社会学）ト云ヘル名ヲ下タセシハ カムト氏濫觴セリ 一ハ此語ノ既ニ行ハレタルト 又一ハ外ニ広濶ナル意義ヲ含ム所ノ文字ナキトノ故ヲ以テ 余モ此語ヲ用ヒタリ……

井上哲次郎著『倫理新説』（明治十六年三月）は、著者が明治十四年（一八八一）のはじめ、東京大学で講義したものが母胎となっている。講義内容は、「倫理ノ大体」と題して『学芸志林』に載せたことがあったが、今回書肆の需にに応じて印刷に付するにあたって手を

加えたという〔緒言〕。

この中にコントの名が出てくる。

古来非常ノ才学ヲ以テ世ニ顕レ、余輩（じぶん）ト同ジク宇宙ノ奥義ヲ探リシ者、果シテ其幾万人ナルヲ知ラズ。今其最モ著明ナル者（いちじるしく明らか）ヲ啓グレバ（中略）

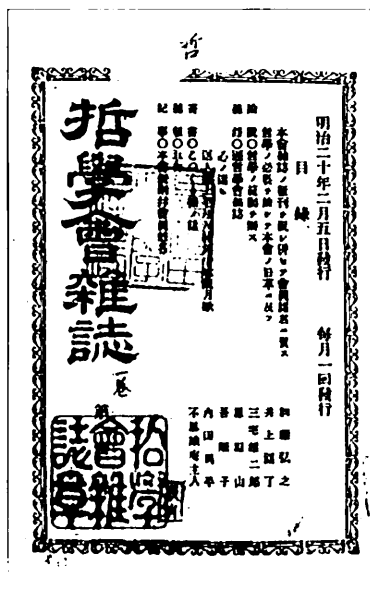
仏蘭西ニ於テハデカルト、パスカル、コントノ諸氏アリ。

井上哲次郎講述『西洋哲学講義』（明治十六年四月）は、シュヴェーグラー（一八一九―五七、ヘーゲル学派のドイツの哲学者）、ルイス（一八一七―七八、イギリスの哲学者）、ユーベルヴェーグ（一八二六―七一、ドイツの哲学者、ヘーゲルの思弁的唯心論に反対した）などが著わした哲学史を参考とし、西洋哲学の概略をのべたものである。「巻の一 第一回 総論」のなかで、世にまなとない哲学者のひとりとしてコントの名を引いている。

希臘ノソクラチース プラトー アリストートル諸氏ノ如キ、仏ノデカルト コント諸氏ノ如キ、英ノベーコン ニュートン ロック ヒューム
ミ
ル スペンセル諸氏ノ如キ、獨逸ノカント フヒヒテ セリング ヘーゲル諸氏ノ如キ、皆曠世ノ人物ナリ、……

『東京学士会院雑誌 第五編 自明治十六年十一月』（明治十六年十一月）に、西村茂樹（一八二八―一九〇二、明治期の啓蒙的官僚学者、明六社の会員、のち華族女学校長）が寄稿した「心学畧伝」（キリスト教やヨーロッパ哲学に言及したもの）がのっており、この中にコントの名が出てくる。

欧州ノフヒロソフヒイハ、希臘ニ起リ、羅馬ニ伝ハリ、西羅馬ノ滅亡ト共ニ消滅シ、夫ヨリ文学晦昧ノ世トナリシガ、耶穌生後一千五百年頃ヨリ此
学再興シ、以テ今日ニ至リテ益々其精微ヲ極メタリ（中略）



加藤弘之の「発刊の辞」がのった『哲学会雑誌』（創刊号）。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

文学ノ新紀元以來ニハ、倍根、徳加爾多、士畢諾撒、駱克、休模、萊伯尼ッ、胡結黎、富爾佛、坎德、些爾林、夏保爾、坤篤、士低瓦多、黎德等の諸名家アリ

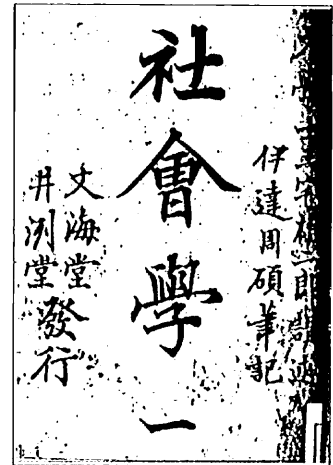
英國 スペンセル氏著 日本 東哲考太郎訳 『社会学之原理』（明治十八年四月）の第一巻の原序に、コントと社会学のことが出てくるが、明治十五年四月に刊行されたものの再刊であるため、訳述はまったく同じである。

同公会編纂『中央學術雑誌』（第四十一号、明治十九年十一月）所載の記事——「哲学ノ定義 ハルバート、スペンサー原著 英学科傳業生 佐竹時之助訳」のなかに、コントの名とその実証哲学についての記述がみられる。

今英國ニ所謂自然哲学ナルモノト コントノ実界哲学ナルモノトヲ比較セハ 此觀念大ニ明了ナルニ至ル可シ コント氏ノ知ル如ク 此二個ノ哲学ハ全ク同種ノ知識ヨリ成ルト雖トモ 此知識ニ哲学的ナル語ヲ冠セシニハ 一層之ヲ親接密着セシメサル可カラズ 此レ実ニコントノ為セル所ナリ

『哲学会雑誌』（創刊号、明治二十年二月五日發行、明治二十五年六月『哲学雑誌』と改称）は、三年前に発足した「哲学会」の会員の論説や、欧米の哲学者の新説を紹介するための機関誌として誕生したのだが、加藤弘之は「発刊の辞」を寄せ、その中でコントにふれている。

凡ソ欧米ニアリテハ 哲学ノ如キモ 他諸般ノ學術ト等シク 学会ヲ設立シ 雑誌ヲ發行スルノ頗ル盛ニシテ 各派概シテ各個ノ学会アリ 各個ノ雑誌アリテ各其主義ヲ拡張シ 以テ學理ノ進歩ニ就テ相競争ス 例ヘハ デカート ベーコン カント ヘーゲル コント ベンサム ショッペンハウエル スペンセル ハルトマン等ノ論派カ 互ニ自己ノ主義ヲ拡張スル所ノ雑誌ヲ發行シテ 以テ相競争スルノ類ニ是レナリ



三宅雄二郎著述 伊達周碩筆記『社会学 一』。

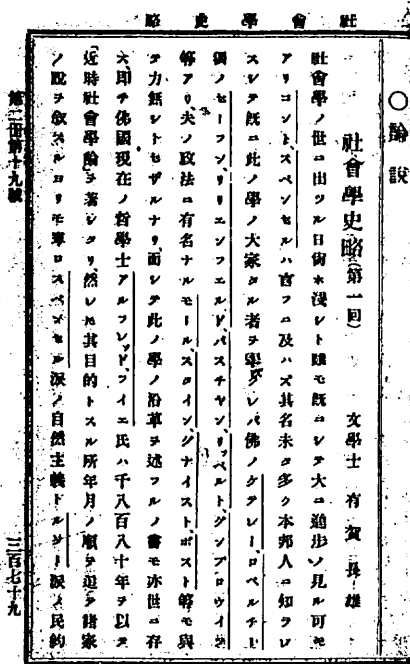
「哲学定義集」(『哲学会雑誌』第二号所収、明治二十年三月五日)は、清沢「徳永」満之(一八六三〜一九〇三、明治期の僧、真宗大「現・大谷大」初代学監)が、読書の際に出会った哲学の定義を筆記しておいたものであり、それが三十余りになったので今回発表することにした。この中にはコントが哲学について描いていた要義が引用してある。

第二十四 コント氏 哲学ハ諸科学全関ノ理論ナリ 即チ科学ノ普通方法 普通関係及特殊差異ヲ判定スルモノナリ

三宅雄二郎著述 伊達周碩筆記『社会学 一』(文海堂、井沢堂發行、明治二十二年三月)は、アメリカの社会学者であるレスター・フランク・ウォード(一八四一〜一九二三)のDynamic Sociology, 1883を抄訳したものである。「社会学第一卷」の「緒論」のなかに、コントとその実証哲学のことが出てくる。

社会学とはオーギュスト、コントの言ひ始めし事にして 氏が千八百三十八年に著しい実験哲学論綱第三版第四卷の百八十五頁に其語を用いたを見るなり 然れども社会学を立つべき考案は 其以前に存在せしことにて 氏自ら之をモンテスキュとコンドルセとに帰せり 統計学に従事する者 若くは世上の事件に注目せる者は 往々真相を看破し(みぬく)社会の諸現象甚だ不規則なる如く見ゆるも 深く考察すれば其理法整然として貫通し居るを発見するならんと謂ひたりしを コント尚ほ其学を推窮して之を一種の科学とし 諸科学の類聚(書物)中に列して星学物理と並び称せらるゝを至らしめんと勉めしなり

『哲学会雑誌』(第十九号、明治二十一年八月五日)に、有賀長雄(一八六〇〜一九二二、当時枢密院書記官)の論説「社会学史略(第一回)」が掲載された。が、これは未完におわっている。この中に社会学の創始者コントとその学説についての言及がみられる。



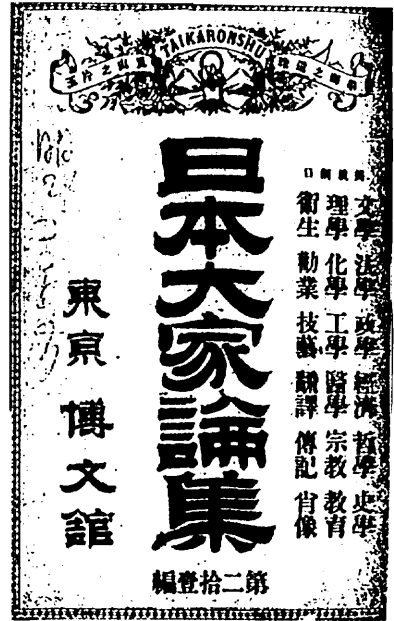
コントの名が出てくる有賀論文『哲学会雑誌』第19号、明治21・8。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

有賀は「社会学史略（第二回）」（『哲学会雑誌』第二十一号所収、明治二十一年十月五日）において、発芽期にあるコント社会学とその学燈をうけ、ついで一家をなした学徒についてのべている。

社会学ノ世ニ出ツル日尚ホ浅シト雖モ 既ニシテ大ニ進歩ノ見ル可キアリ コント、スペインセルハ 言フニ及ハズ 其名未ダ多ク本邦人ニ知ラレスシテ既ニ此ノ学ノ大家タル者ヲ挙クレバ（後略）
故ニ未タ以テ社会学ノ始祖ト為スニ足ラズ、其功ハ只タオウグスト、コントヲ励シテ 後ニ此ノ学ヲ創設スルニ至ラシムルノ動機ト成リタルニ在リ、密ニ社会学ノ立ツ可キヲ先見シタルノミナラズ、又其本義ト性質トヲ發明シタルノ功ハ オウグスト、コントニ歸ス可キ事争フ可カラサル所タリ
即チ其「実験哲学」中ニ於テ 此ノ学ノ何タル當キヲ明瞭正確ニ論シテ曰ク「凡ソ学者カ試ミルノ權利ヲ十分ニ有スル所ノ者ハ 諸々ノ実験理法ノ法ニ習ヒテ 社会ノ理學ヲ概念シ 及ヒ講究シ 其哲理上ノ性質ヲ摘示シテ 之カ基本ヲ立ルノ成否ヲ定ムルニ在リト（後略）」
コントハ又此ノ学ニ於テスキ事業ヲ左ノ如ク約言セリ、曰ク「社会学ハ世人ガ發展（進化）ノ事實ノ何ニ在ルヤヲダモ知ラサルノ間ハ 到底存立スルコトヲ得ズ、社会学ハ即チ發展ノ理法ヲ講究スル者ナリ」ト（後略）
斯ノ如クナルヲ以テ コントノ社会学タル其言論ハ 則チ活発ナル者多シト雖モ 之ヲ真ノ理學上ノ目ヨリ見テハ未タ貴價アリト為ス能ハズ

前陳ノ如ク コントノ社会学其レ自ラハ未タ該学ノ体ヲ為スニ至ラザリシト雖モ 此其ノ道ニ大功アル所以ノ者ハ 一ニ社会学ヲ立テ、一科ノ実験理學トスベキ所以テ証シ、二ニ社会学ノ依テ立ツ所ノ原則ヲ示シ、以テ此ノ原則ニ依リ 此ノ学ヲ建設セントスル学者ヲ出タスノ動機トナ成リタルニ在リ、今日此ノ学ノ講究ニ従事スル者多シト雖モ 皆其源論ノ種々ノ要点ニ基キ 種々ノ社会学討究ノ起リタル所以ヲ陳述セハ 則チ明瞭ナラン

『専修学校 経済学講義筆記 第三年級 第五号』（明治二十一年十月二十九日）に、講師・辰巳小次郎の「社会学」が掲載されているが、



雑誌『日本大家論集』の表紙。

この中に社会学の始祖コントの紹介記事がみられる。

社会学ノ元祖ハ仏国ノ碩学アウグスト、コント氏ナリ 氏ハ千七百九十八年即チ同国大革命以後十年目ニ生レ 千八百五十七年ニ死セリ 氏ノ以前ニ社会学ノ原理定則トモ云フヘキ事柄ヲ思按セシ者有リト雖モ 皆能ク一派ノ学問ヲ組立ツルヲ得サリキ

の談話筆記「政事を以て任する者は社会学を修めざる可からざる」がのっている。社会学の始祖としてコントの名をひいている。

人間社会は活世界であると云ふことを唱ひる学者があるけれど、之れは道理に基いて云つたので無く、本統に分つた学者と云ふものは、誠に少ない。然るに近頃に至つてダン／＼社会学が進んで来て、此の社会学によつて社会は真成の有機物で、動植物のやふなもので、一種の有機物であると云ふ道理が分つて来た。

社会学と云ふものは、諸君も御承知の通り、仏人の唱ひた新しい学問で、オーグスト、ホントと云ふ人が先づ社会学を唱ひた元祖で、此人は三十年前に死にましたが、此人の社会学を唱ひた時に誠に不充分でありました。

注・区読点は引用者による。

大曾都 廣津実金著 『日本宗教未来記』（船井弘文堂、明治二十二年三月）に、コントの名とかれの有名なる知識発達の三階段についての記述がある。

今は日本仏教変革の時期なれば 容興すへからす釈迦の法経は古今を異にすと雖も常に素糸（白い糸）なり 各宗各派隨時の緯は昔の錦は 今の金網に变革せざるべからざるなり

之に就て法蘭西の碩学奥古士都坤篤氏は世界の進化を分つて三時期となう 第一は神跡の時代 第二は形而上の時代 第三は實在の時代是なり 神跡の時代は専ら神怪奇異の事跡を説て人を信服せしむ 形而上の時代は 空想を用ひて広漠無辺の理を考へ 其事の實証如何を問はず 實在の時代は空想の説を棄て 専ら帰納法を用ひ事実に依拠して真理を求め 其説初めて堅固確實となりたる者なりと云々……

『哲学会雑誌』（第二十七号、明治二十二年五月五日）に、會員・ヂ、ウィリヤム、ノックスが執筆した論文「倫理上日本ノ要スルモノ」の反諷がのっている。この中にコントの名が出てくる。

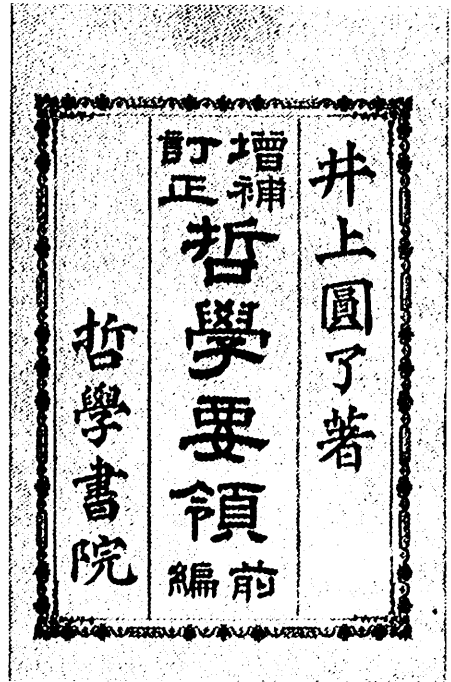
有形学研究ノ概念及原則ノ大ナル者ニツキ 異論百出ノ現状ハ言ヲ待タズシテ明ナラント抑モ コントノ哲学ヲ棄却シテ之ヲ攻撃スルノ烈シテ スペンサー氏及ビ氏ノ学ヲ奉ズル者ニ過ギタルハ莫カラシ

『大日本大家論集』（第二十五編・博文館、明治二十二年六月五日）に、菊池熊太郎の「理學宗ノ説明」と題する論説がのっているが、この中にコントの名が出てくる。

今日學者社會ニ行ハル、社會進化ノ説ハ 消滅セザルヲ得ズ、コント、スペンサー又始メ、今日ノ社會學者ハ生物學ト稱スル一理學ノ法則ニヨリテ大ニ社會學ヲ研究シタルニアラズヤ、……

同誌に「井上毅氏の席話」と題する小話があり、パリ留學時代に西園寺公望や中江篤介（兆民）が師事した急進的政治思想家エミール・アコラス（一八二六―一八九一）というフランス人が登場する。このひとはコントの追隨者であつたようである。

仏蘭西にアコラスト云ふ先生がある、これは近くは西園寺公望、中江篤介、光妙寺三郎などの先生である、此の人の説はオーゴスト、コントの説を敷衍した者である、然るに、オーゴスト、コントやアコラスは世人がソシャリストして擯斥する（しりぞける）位でありて、其の説の中には、之を取捨し



井上円了『増補 哲學要領 前編』。
〔筆者蔵〕

なければ、一概に採ることの出来ないと言ふ位な人である、……。

三宅雄二郎著『哲学涓滴』(発行者 吉川半七、明治二十二年十一月)は、自家の意見をなるべく加えず、シュヴェグラーやクノー・フィッシャー(一八二四―一九〇七、ドイツの哲学史家、イエナおよびハイデルベルク大学教授)らの著述を参考にして哲学の歴史を描いた書である。第一部の結論において、西洋哲学の変遷を通覧したものの中に、コントの名が散見する。

仏国の文華ぶんか(世の中が開け、はなやかなさま)に依りてコントの実験哲学を宣言するあり、又た英国近代の理学の進歩に集してスペンセルの総合哲学しんごうしりやうを倡道するあり

井上円了著『増補 哲學要領 前編』(哲学書院、明治二十四年十一月)は、著者が東大の学生の時分に、『令知会雑誌』に毎回投稿したものをそのまま集めて、一部の小冊子としたものという(「序言」)。

同書は、哲学者年表・諸論・東洋哲学・支那哲学・印度哲学・西洋哲学などから構成されており、哲学概論のような印象をうける。「第十一段 近世哲学第三 第六十一節 コント氏」は、コント哲学の特徴を簡潔にまとめたものである。

当時又仏国ニコント名クル一大家アリ 氏ノ学、実験学(実証哲学のこと——引用者)并社会学ノ二種ヨリ成ル 其基礎トスル所ハ 共二理学ノ実験説ニアリ 氏ハ人智発達ノ時代ヲ三段ニ分チ 神学ノ時代、形而上学ノ時代、実験学ノ時代トナシ 今日ハ実験学ノ時代ナレハ 形而上ノ空理ハ一切之ヲ排去シ 哲学ハ全ク実験以内ニ於テ考究シ 宇宙ノ本源事物ノ実体等ハ 我実験ノ及ハサルモノナレハ 宜ク之ヲ哲学ノ問題外ニ置キ 独り理学ノ実験二本キテ 哲学ヲ組織スヘキ所以ヲ論セリ 是レ世間氏ヲ推シテ実験哲学ノ祖トナス所以ナリ(一一四―一一五頁)。



澁江保著『社会学 全』。
〔日本大学文理学部図書館蔵〕

『中央学術雑誌』（第五号、明治二十五年九月十五日）の論説に載った「欧州史を講ず」は、アメリカ留学中のもと早稲田の学生（淡木宗之）が起稿し、高田早苗のもとに送致したものであるが、本人が亡くなったので遺稿として掲載したものである。本稿はもとよりヨーロッパ史の全貌をのべたものでなく、史学の原則の一斑を伝えたものにすぎない。

この中にコントの著書『科学の哲学』*Philosophy of Science* のことが出てくる。

（参考書）

コムト氏フヒロソフヒー、オフ、サイエンス、

澁江保の小著『社会学 全』（博文館、明治二十七年一月）は、本邦初の社会学についての単行本である。社会学とはどういうものか、一般むきに平易に書きあらわしたのが本書である。本書の「第一巻 第二編 社会学の定義」のなかに、社会学の創設者コントのことが出てくる。

然るに西暦十九世紀（即ち当世紀）に初、仏国にコムトなるもの出でて、始めて人事社交の原理定則を発見し、社会学を立て、之も一派専門の学と為すことに努めたりき。コムト名はアウグスト。西暦一千七百九十八年生れ、同一千八百五十七年死す。仏国の哲学者なり。（中略）

コムト出たるは恰も此の時に在りき。コムトは社会組織改良論の仏国に喧しかりし時に生まれたれば、深く感ずる所ありて、遂に社会学を創設し、社会学の鼻祖と仰かれたり。

垣田純朗の小著『哲学変遷史』（民友社、明治二十七年三月）は、平民叢書中の

第九卷にあたる。同書の附録「近世哲学の大勢」の第九章に、コントとその実証哲学のことが出てくる。

英仏派はコムト (Auguste Comte 1708-1857) 及びスペンサー (Herbert Spencer 1820-) 等によりて代表せらる、

コムトは有名なる実験哲学を主張せるものにして、曰く吾人の知り得る所は現象のみなり、其現象も其真実体、妙機等は知ることを能はず、其継統と共存とを知ることを得るのみ、此現象に通ずる規律を知る、これ哲学の任なり、

これ即ち実験哲学なるものなるが、哲学は神学的を経、純理的を経、此実験的に至りて始めて完全に達したる者と謂うべしと

『六合雑誌』(第一八五号、明治二十九年五月十五日)に、コントが二度登場する。片山潜は「米国に於ける社会学の進歩」において、コントの名を引きあいに出し、高柳松一郎は「コントの所謂人類教」を寄稿しているが、これなどは明治期の雑誌にのったコントに関する記事としてはもっともくわしいものである。

片山潜の記事において、コントはつぎのように描かれている。

社会学の起原は極めて遼遠にして往昔の哲学者にして、鋭意社会の解釈を試みた者少からず(中略)近世に及ではカント、ヘーゲル等の諸大家は世界を以て考究の拠点とし、前者は道德の上より社会を論じ、後者は歴史の方面より之を論じて、共に一時欧州を振盪せり(ふりうごかす)(中略)

社会共和党の牛耳を執る独のフェルディナンド、ラセールの如きは間接にヘーゲルの教化を蒙りし者少からず、其他オーゴスト、コムテの如きは近世社会学の父を以て目せられ、英にスペンサーあり、独にロドバータス、マークスあり

高柳の記事は、近世哲学の発達小史にはじまり、コントの人と思想、ことにかれの宗教思想の要を記述したものである。科学的哲学の建設者は、コントとスペンサーがその代表格という。コントの小伝については、

コントの生涯は実に轢軻不遇(失意のさま)憐むべきもの多かりき 彼は一千七百九十八年一月仏国モンペリエーに生れぬ、当時彼の父は其地の収税

吏なりしとぞ、長ずるに及んで小学校に入り最も数学に熟達し、又職員に抵抗するを以て現はれたり、十七歳の時パリ諸芸学校に入学せしも、教師の風習を攻撃せしため追放せらるゝに至り、其後数年は数学教授を以て生活せり

当時既に彼が心理には従来の社会上宗教上の思想を退却して大變革を試みんとするの熱心燃え上れり、超えて一千八百十八年サン・シモンと相識るに至り、其交情益々暖かに其關係愈々親密となれり、然れども六ヶ年の彼我意見の衝突は遂に此二人をして全く分離せしむるに至りぬ、

一千八百二十五年彼は結婚せしも、不幸にして夫婦の間よろしからず、久しき粉議の後全く離婚するに至れり、翌年彼は其哲学の講演を始めたりしに幾多の哲学者科学者は集り来りて之を傍聴せしとぞ、此間貧苦と過勞とは彼を痛め遂に彼をして一時発狂するに至らしめぬ、

全快の後再び哲学の講究に従事し、一千八百三十年より同十二年の間に六卷の「フィロソフィーポジチヴ」を發刊せり、著者の傍ら彼は諸芸学校に於ける助教授又試験委員として其日を送りぬ、然るに彼れが性癖として其意見は又もや他教授と衝突するに至り、遂に其職を失へり、

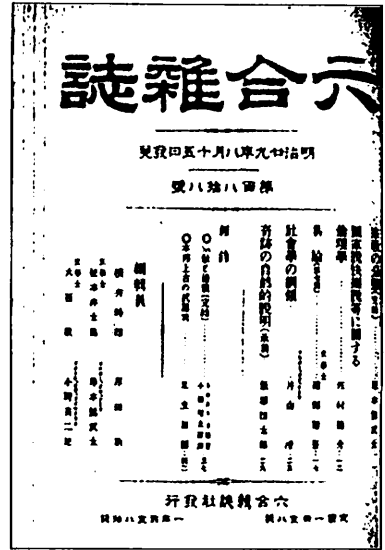
斯かりしかば已むを得ず数学を教へ辛うじて其口を糊せしも、後年に至りては其友よりの補助金を以て生活せざるを得ざりき、千八百四十五年彼はクロチルド夫人と相識るに至り、大に彼女を愛せしも、不幸にして一年の後彼女を失ひぬ、彼が著作思想の大に彼女の感化に依る所多かりしは其自白する所なり、越えて千八百五十七年九月彼は六十歳を以て世を去れり

とある。コントの研究目的はどこにあったのか。それは十八世紀における破壊的批評および社会的改革または政治上の争乱から生じた知識上、社会上の粉乱きわまりない無政府状態を停止させるにあった。

それまでの思想は、人心をつなぎとめる力がないことを知った。コントは、人間や社会の状態現象をひろく研究し、そこから生じるわれわれの知識を綜合し、一つの哲学をつくり、それを社会におけるじっさいの生活に應用する方法をしめそうとした。

コントは神の存在を断定することも否定することもしなかった。かれは神は、われわれの知りうるところではないと考えた。神の觀念に代わって人心に訴え、その感情を満足させ、敬愛するところとなるものはないのか。コントによると、それはあるという。人類がそれだという。コントが説く「人類教」とは、人間を崇拜する教えなのである。換言すれば、過去・現在・未来の男女が、その生涯を公共の福祉・人類發達のために捧げたものから成る統一の全体——大存在物を崇拜するのがそれだという。

人類教の目ざすところは、利己心をおさえ、社会的同情心をやしない、人類を愛するようにしむけることであった。



『六合雑誌』の表紙。

おなじく『六合雑誌』(第一八八号、明治二十九年八月十五日)に、片山潜の論説「社会学の綱領」がのっており、コントの名が出てくる。

近世社会学の父と称せられたるオーギュスト・コント曰く 社会なる観念を究めて其主義を決するは 真正に社会を理むるの礎柱(いしずえ)なりと……

『六合雑誌』(第一九三号、明治三十年一月十五日)の雑誌「初期の仏国社会主義 第

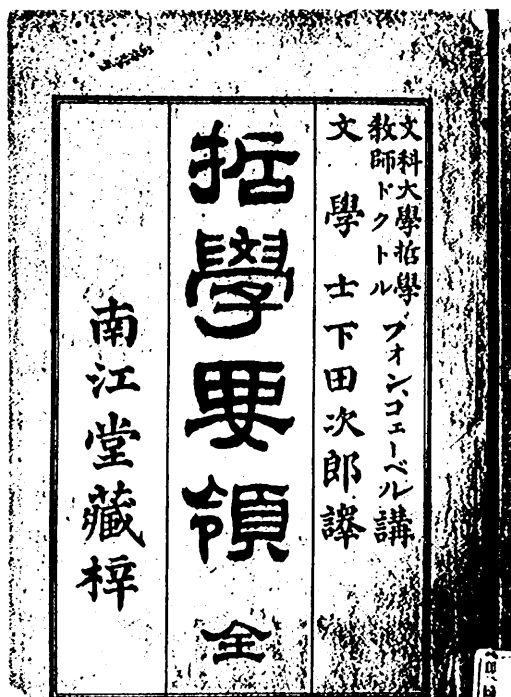
一サン、シモン」のなかに、コントの名が出てくる。

彼(サン・シモン)の門人中 後に大名を博せしはオーギュスト、コントあり

文科大学哲学 教席ドクトル フォン、ケーベル講 『哲学要領 全』(南江堂書店、明治三十年六月)は、ケーベル(一八四八〜一九二三、ロシアの哲学者)が、明治二十六年(一八九三)秋冬——東京大学文学部において哲学入門(哲学概論、哲学史より成る)として講義したものの前半を、その原稿から反訳したものである。

ケーベルは、緒言においてドイツ語を学ぶことの必要性を説いたのち、哲学の総念・哲学の分類・哲学の方法・哲学の系統などについて語るのだが、ヨーロッパ各国の代表的な実証哲学者や実証哲学とはどのようなものかについて言及している。

余は今積極的教(Positiveism)、積極的哲学なる語を発言せり。積極的教に二種あり 一は仏国に於てオーギュスト・コント(Auguste Comte)及びリットレ(Littré)、英国に於てミル及びスペンサー、独国に於てラアス(Laas)、ピール(Bein)等によって代表せらる。此等の思想家は唯積極的、事実の上に、経験の上から、建てられたる哲学を承知し、而してあらゆる思弁、純正哲学を人間の理性の制限の為に出来能はずとして、純然たる空想として反拒す。



フォン・ケーベル講『哲学要領 全』



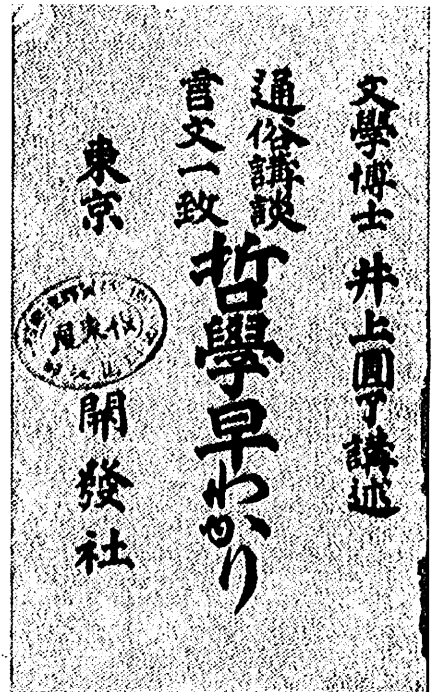
ラファエル・ケーベル

建部遯吾著『哲学大観』（近港堂書籍株式会社、明治三十一年四月）の「叙述 第三 近世哲学」に、コントとその思想の特徴が記されている。

今世紀の初めに当りて経験主義の本鐸（指導者）は、世に出でたり、オオギュストコムト即ち是れなり。彼は痛く宗教の独断に反対し、知識は凡べて経験によれる個物の知識を基本として、概括により漸漸広博（おいおい見識をふかめる）を期せざる可からずとなせり。彼に在りては現象世界即ち是れ実体世界にして、現象の外に実体あるを認めざるなり（中略）

オオギュストコムトの名や將に永く世界学問進運の史上に耀く者あらむとするなり。是より其後社会学の研究は漸く最も進みたる学者の尽瘁（苦勞）を惹き、殊に輓近第十九世紀の末葉に至りて、這般の研究（このような研究）は、社会の知行（知ること、行ふこと）諸般の方面より逼迫を受け、第二十世紀の新学期亦実に此方途（方法）より闡明せらる（明らかにされる）者あらむとするを到せり。

オオギュストコムトの鋭利にして明晰なる思弁は、四表（四方）に向うて其光明を輻射したりと雖も、最も多く其影響を被れるは本来経験的なり英国なりとす。而して其結晶は即ちハルバルトスベンサルに於いて世に出でたり。



井上圓了博士講述『通俗講談 哲学早わかり』。
〔筆者蔵〕

「社会学研究会」の機関誌『社会』（第一号、明治三十二年一月十八日出版）に、コントの肖像がのり、また論説（加藤弘之「社会学研究会の発会式に於て」）や雑録（岡百世「オーギュスト、コント」）のなかには、コントの名や人と学説などについての記事がみられる。加藤弘之は、「社会学研究会」の発会にさいしてコントに言及している。

アウグスト、コント博士以来今日に至る迄数十年の間に於て 社会学を研究する学者既に少からずと雖も 未だ以て確定の一科学とするに至らざるは 人の皆知る所にして 余輩の甚だ遺憾とせざるを得ざるものとす

岡百世の「オーギュスト、コント」同誌（四四―五四頁）所収は、本格的なコント論であり、よくまとまっている。

吾人苟も社会学といふ 誰れかオーギュスト、コムトの名を想起せざるものあらん 実に彼が社会研究に一新生面を開き、社会も亦た他の事物の如く科学的に研究せらるべきことを唱道し、社会学をして一科学の地位に列せしめたるもの此れ豈に社会学史上特筆大書するの価値なしとせんや 嗚呼彼の名は其の初めて使用せるソシオロジーなる字と共に永く歴史に其跡を絶たざるべし 回顧するに、彼が其大著実験哲学を公にせしより今に殆んど六十有余年、社会学は次第に其盛運を来し、研究益す其歩を進むるに至り、今や世は有益なる一科学として斯学を歓迎するに至りぬ 吾人は是に於て先づオーギュスト、コムトを追想せずんばあらざるなり。

井上円了講述『通俗講談 哲学早わかり』（開發社、明治三十二年二月）は、著者が日本各地を巡回した折、一夕の茶話として、哲学とはいかなるものかを語ったときの談話筆記をまとめて一書としたものである。「第九回 哲学諸家の学説」のなかに、コントとその実証哲学についての言及

がみられる。

後に「コント」氏の実験学出て、共に哲学上に一大影響を与へ、就中「コント」の学は近年に於ける哲学上の一大革命にして、其実験主義より大に哲学の形勢を一変し、爾來哲学を理学風に講究する有様となりました、依て余は「カント」及「コント」は近世哲学史上の二大豪傑と考へます、此「コント」の実験主義が英国に入り、「スベンセル」等の学に大なる影響を与へしは疑ありません。

『社会』（第二卷第一号、明治三十三年二月二十日）の「雜録」に、布川静淵の「通社会学漫録」がのっており、このなかにコントとその社会学分類についての言及がある。

コント其他の所謂静学的にして存在する情態 即ち人間の社会生活現象の秩序より 此社会組織を維持する社会力の共存する部面の研究之に容る
コント其他の所謂社会動学 即ち継続する所の運動 換言すれば社会の定律を決定して 標準原理を究むると同時に其応用の次第を論ず（『第四 社会学の六種三部』）。

フエーアバンクス原著
十時弥 訳述
『社会学』（博文館、明治三十三年六月）の「社会学序」（訳者による跋）に、近世における社会学の創設者として、コントの名をひいている。

社会学は寔に未だ発展せざるの学也。しかも文運の進歩は漸く是が確立を促かし、識見ある学者をして翕然として（あつめ）之に歸嚮する（むかう）その所あらしめんとす。蓋し斯学や、もと新創の学也。其起源は遠くプラトン、アリストテレースに於て之を觀るを得べく、近世に至りては、ホッブス、スピノザ……（中略）。

全体として明確な存立をなすに至りしは、実にオーギュスト、コムトの偉勲に歸せざるべからず。

そして同書の「緒論」に、コントの名がみられる。

又斯学またの名称ソシオロヂーの語を創案せる名誉を有するコムトは、是こゝを以て人間社会の整理に適用せらるゝ、一切の科学の極致なり

『六合雜誌』（第二三四号、明治三十三年六月十五日）は、村井勇太郎の「コムトの人類教を論ず」を掲載した。これはコント哲学の基礎をなす、人類思想の発達に関する、かれの思想を明らかにしようとしたものという。著者は、まず哲学史上におけるコントの位地について語ったのち、その哲学の出発点や人類思想の発達の階級について語る。

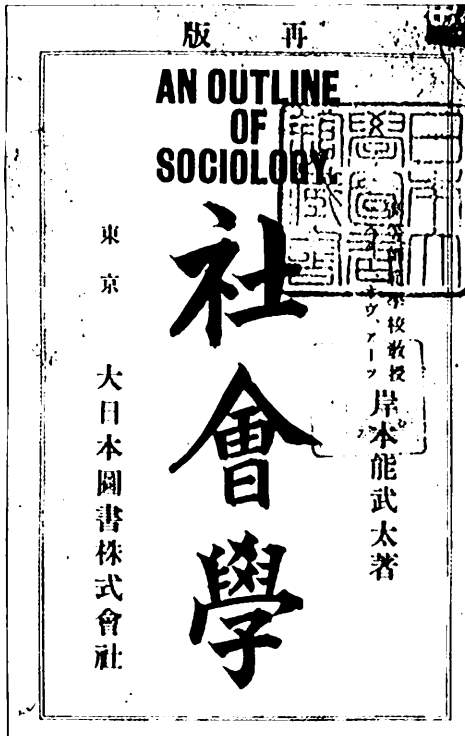
青年時代にサン・シモンに師事したコントは、やがてその門を出て、一つの社会学組織を企てようとした。コントの目的は、独立自由なる、個人の有機的一致にあった。社会主義と個人主義とを調和するにあったという。

而して彼は一方には、智識の批判的動作により、他方には、社会的動機に依よつて、其哲学の出発点となせり、故に彼が哲学の源泉に二大思想を有せり。一つは人類思想の三階級なり。二は科学をして人類の社会的幸福に従属せしめんとする事にして、コムトを之を説明して、智は情の爲めに、従属すべきものなりと云へり。

思想発達の段階については、――

人類思想の発達に関して、コムトは人の智識は、階段を追ふて、漸次に発達せるものにして、其繼起けいき（あとを受けついで盛んにする）を分ちて、第一神学的階段、第二形而上学的階段、第三実験的階段の三種とし、各其階段に従つて、宇宙を解釈するものとせり。

同雑誌の二三五号は、前号のつづきである。著者はコントの思想の発達史につづいて、かれの社会学について略述し、宗教に入る前段としてい



岸本能武太著『社会学』。
〔日本大学文理学部図書館蔵〕

コムトは社会学の祖にして、スペンセルの社会学の如きは、彼に負う処のもの甚だ多し。コムトの実証哲学の、重なる目的は、社会現象の研究を、実験的になさんとするにあり。コムトの考ふる処によれば、社会の現象も又一定の法則を備へて、原因結果の法則によりて、支配せらるべきものなれば、他の科学と同一の、観察と論証法によりて、其法則を発見する事を得べし。

コムトの宗教は、神なく、未来なく、靈魂不滅なく、其主義は愛情にして、其基盤は秩序、其目的は進歩なり。コムトの目的は宗教によりて、人類を結合し、個人をして、社会に一致せしめんとするにあり。

岸本能武太著『AN OUTLINE OF SOCIOLOGY』

社会学』（大日本圖書株式会社、明治三十三年十一月）の「總論」の「第二節 社会学は新しき学問なり」に、社会学

の名称の創案者であり、かつ社会学の組織者としてのコントが登場する。

社会学なる名称を始めて用ゐたる学者は、仏国のオーグスト、コント（Auguste Comte）なり。彼は其の有名なる大著述『実験哲学』（Cours de Philosophie Positive）第三版の第四卷第百八十五頁に於て、始めて「ソシオロジイ」なる文字を用ゐたり。而して此の第三版は千八百三十八年の出版なれば、『社会学』なる名称は、始めて世に現はれ出て、より、今日に至る迄僅かに六十年を経過したるに過ぎずと知るべし。

社会学なる名称が新らしきが如く、社会学なる科学もまた甚だ新らしき学問なり。即ち社会学なる名称の創始者がオーグスト、コントなるが如く、社会学なる科学の創立者も亦コント其人に外ならざるなり。

『社会』（第二卷第二号、明治三十三年十二月二十日）の「雑録」に、岡百世訳「社会学史（其一）」が掲載されている。これはオーストリアの社会学者ルドヴィヒ・グンプロヴィチ（一八三八—一九〇九）の著書『社会学原理』を反訳したものである。この中にコントの名が出てくる。

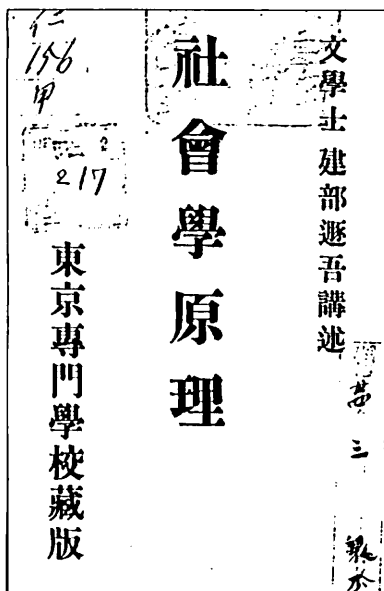
社会改良家サン、シモンに就いても、吾人は社会に関する客観的科学を求むべきなし、唯だ氏がオ・ギュスト、コントを誘導鼓舞したるの功は実に顕著なる事に属す。

オ・ギュスト、コント抑も社会学其物に就き、単に之を称道したるのみならず、進んで其の概念及び本質を初めて認識したるはオ・ギュスト、コントの争ふべからざる功績と謂はざる可からず。

久松義典著『社会研究新論』（文学同志会、明治三十四年二月）は、現実の社会に通じるため、現世の実験的知見を開くために著わされた書物のようであるが、第二編の第七章にコントの名が出てくる。

近世学芸界の兩泰斗、コムト。スペンセルの著書を始めとし、その他数百種の新刊書は、内外の出版界に於て、愈々社会家の注目を惹けり、（中略）
斯道（この道）の開祖たるコムトの「ボスチーヴ、フィロソフィー」は、近代学界に一時限を画したる程の一大經典、「眞個（ほんとの）哲学的觀察、遠大又提醒的（迷いがはれる）概念、広濶又深遠の観念力、皆前代未聞なり」と迄と、スペンセルの評せしは妥当なるべし

井上哲次郎著『異軒論文二集』（富山房、明治三十四年四月）の「第四 認識と実在との関係 第四章 客観的実在は如何にして証明すべきか」に、コントの名が出てくる。著者によると、特殊な現象を解釈するとき、理法（道理にかなった法則）があるという。どんな現象にも理法があるのがふつうである。



建部遯吾講述『社会学原理』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕



中島力三造著『現今の哲学問題 全』。
〔日本大学文理学部図書館〕

理法は幾多の現象に普遍にして全く不変化的なるを以て、或は之れを以て唯一の實在とするものあり、例へばコント氏の如き、是なり、……
コント氏彼れ自身も晩年人道を以て大實在となし、之れを崇拝せり、……
思ふにデカルト、コント二氏は、何づれも世界の一方を考察して、全く相反せる立脚点より哲学を建設せり、……

中島力造著『現今の哲学問題 全』（普及舎、明治三十四年四月）は、哲学の入門書である。哲学はどのような問題を攻究すべきか、科学と哲学との関係はどうか、これに対してどのような解釈をあたえられるかをやさしく説いたものという。「第一回 哲学とは何ぞや」において、著者は科学の結果によって哲学を建設せねばならぬと考へたコントと、その実証哲学にふれて

いる。
仏国の大哲学者コントは、哲学が科学に依らねばならぬ事を人に主張したる学者である、哲学は超実験的實在の研究にあらざることを主唱したる学者である、故に其の哲学系統を実験哲学と称した。

建部遯吾著『社会学原理』（東京専門学校蔵版、明治三十四年七月）は、早稲田において講述したものを一書としたものであるが、「第一編 社会学の要素——第一章 社会学の觀念」に、コントのことが出てくる。

社会なる語は始めて「ヨークスト、コムト」氏に由て用ひらる。氏は其著『社会学原理』に於て、此名辭を以て概括的社会科学と命ぜり、蓋し社会科学

浮田和民講述
帝國教育會編纂



社會學講義

東京 開發社

浮田和民講述『社会学講義』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

を以て氏の積極哲学の一部に附属せり。

コムトは社会は不可分有機的のものなりと立論し、社会的現象を同列的統一体として一括し、以て其科学を建設せんと試みたり。

社会学はコムトの推量せし如く、恰も社会の物理学なりと云ふべく何んとなれば社会学の本務は社会の性質、原因、法則を発見し以て

『六合雜誌』（第二五〇号、明治三十四年十月十五日）に、村井知至（二八六一—一九四四、明治期のキリスト教社会主義者）の「コムトの人類教を評して我が信仰の立場を明かにす」がのっている。

人類教の長所として先づ吾人の認むべきことは、コムトが超越的神の観念を否定したことである。

コムトは人格を有する超越的神を宗教の中心とせず、之に代ふるに「人類」てふ観念を以てした。

コムトは人類を以て宗教の本尊となし、人類の外に神なく、人類を神として礼拝するの旨義を主張す。是比喩的言葉でない、文字的に人類を神として崇め、之に礼拝するはコムト教と信ずる「ポジチビスト」の信仰である。

浮田和民著『社会学講義』（開發社、明治三十四年十一月）は、講述を編んで一書としたものである。同書の「第一章 社会学の概念 第一節 社会学の起原」において、著者は、社会学の命名者コントのこと、かれが説く学問（知識）の三つの発達階段、コントの出現以前の先蹤（アリストテレス、モンテスキュー）などについてのべている。

第一に私の題目として掲げましたのは、社会学の概念、則ち社会学と云ふは至って漠然たる言葉でありますからして、先づ最初大凡（おおおよそ）社会

学の定義及範圍を定め、且つ社会に関する他の諸学科との關係如何と云ふことを御話するつもりであります。通常社会学と云ふ言葉は、英語では二通りに言ひ現します。

英語ばかりでなく、他の欧羅巴大陸の言葉でも、今日二通りに言ひ現すやうになって居ります。一つの言葉は単にソーシャル、サイエンス、それからもう一つの言葉は、ソシヨロヂーと申すのであります。此ソシヨロヂーと云ふ言葉は、至って近頃出来た所の言葉で、一千八百三十八年、即ち日本の年代で云へば、天保九年に社会学の創立者と称せらる、仏蘭西のラーゴスト、コントと云ふ人が、始めて用ひたる言葉であります（中略）。

コントも始めは所謂社会学のことを社会物理即ちソーシャルフィジクスと名づけました（中略）。兎に角此ラーゴストコントと云ふ人から社会学の概念が明白になって来たと思ひます。

波多野精一著『西洋哲学史要』（大日本圖書株式会社、明治三十四年十一月）は、初学者のために西洋哲学の発達の大勢を叙述したものである。同書の「近世哲学史 第二編 カント及びカント以後の哲学」の第八章「十九世紀の英仏の哲学」に、コントの実証論や知識発達の三階段、科学の分類についての小記事がみられる。曰く――

コント

Auguste Comte 一八五九―一八五九

は実証論（Positivism）又は実証哲学の設立者なり。以為く。吾等の知識は三つの階段を経て開展す。第一は神学的階段なり。（中略）第二は形而上学的階段なり。（中略）第三は実証的階段なり。

コントは実証的時期に到達せし歴史的順序に従て科学の分類を試みたり。

一 数学 二 星学 三 物理学 四 化学 五 生物学 六 社会学（コントは心理学を生物学及社会学の一部分に於て論じたり）。是の順序は同時に現象の単純より複雑に進む過渡を示す者なり。

『社会学雑誌』（第四卷第二号、明治三十五年二月十五日）に、高木正義の

文學博士波多野精一著

西洋哲学史要

東京

大日本圖書株式會社

波多野精一著『西洋哲学史要』。

『社会概念論』に、社会学の命名者コントのことが出てくる。

仏国の哲学者オーグスト・コントが其の著『実験哲学』の第六章に、社会学なる一題目を設けたるは、之れ社会学といふ名号（よび名）の世界に現はれたるの始めにして、此の書は千八百三十六年より四十年に至るの間に成りたるものなれば、社会学の世に出でしは、実に近々六十年以来の事なりとす、氏はモンテスキュー・ヘルダー氏等に次ぎて、十九世紀の前半に於ける社会学上、社会の概念及び社会の進化に関して貢献する所尠なからず

『学燈』（第六二号、明治三十五年七月一日）に、樋口秀雄の「社会学上の書籍について」がのっている。これは社会学書のいわば解題でもあるが、当然ながらこの中にコントのことが出てくる。著者によると、いま社会学を口にする人で、コントの名を知らぬ者はいないという。社会学——すなわち、科学的社會研究はコントからはじめ、その著書をよむ必要があるという。

コムト、詳らかに云はゞ、イシドル、オーギュスト、マリ、フランソア、ザキエー、コムト（一七九八—一八五七）が著書の中、最も有名なるは即ち実験哲学（Cours de Philosophie positive）であつて、第一巻は千八百三十年に出て、最後の巻は千八百四十二年に現はれ、十二年を経て完成せられた大著述で、全巻六巻より成つて居る。社会学は実に此書中にそのうぶ声を発したのである。

著者によると、コントやスペンサーといった大家の学説は、専門家以外にも大概知られているという。しかし、コントの社会学に関する説をうかがうには、実験（証）哲学のほか、つぎのような著作を参照する必要があるという。

Discours sur l'ensemble du Positivisme, 1848

Système de la Politique Positive, 1851—54

『東洋哲学』（第九編第一一号、明治三十五年十一月五日）に、中島徳蔵の「実業的文化と文芸的修養」と題する論説がのっており、へき頭にコントの名がでてくる。

疑もなく近代の文化は、コムトやスペンサーの唱へたるが如く、実業的である、科学に基ける実業を中心として成り立っている。日本文化も世界の
大勢に従って、後ればせながら、一般潮流の方向を追うて道を急ぎつ、あるやうで、邦家（国家）の爲め真に喜ばしい現象と云はねばならぬ。

久松義典（別称・狷堂先生）著『社会学と哲学』（文学同志会蔵版、明治三十六年一月）の第七章に、コムトが登場するが、内容的には『社会
研究新論』（文学同志会、明治三十四年二月）に発表したものと同じである。

『東洋哲学』（第一〇編第五号、明治三十六年五月五日）の「論説」に、元良勇次郎が四月八日に哲学館（現・東洋大学）における积尊（迦）降
誕会のさいにおこなった講演筆記がのっている。この中にコントの人類教のことが出てくる。

本日积迦降誕の日に於いて、爰に私が諸君の前に立つて积迦に就いてお話をすると云ふことは少しく奇異に思はれる（中略）。コントの所謂人類教の
立場から見たる积迦を茲に少しくお話して幾分の御参考に供したいと云ふ私の考である。

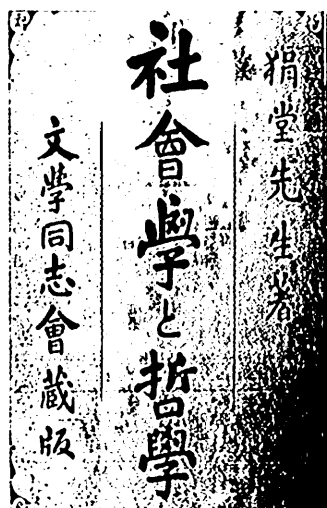
爰にコントの人類教に就いて大切な者がある。一体世の中には今日吾々が社会精神と云ふやうなものに 一つ広き時間的連続を加へた一首の精神的
継統ともいふべきものがある。之をコントは大精神即ち「ヒューマニチー」と呼んだ。

而してこの大精神は社会と共に段々発達するもので、過去の社会から今日の社会、又今日の社会から将来のそれと云ふ様に、社会にその大精神が漸々
に表はれつゝ、発展してゆくものであると云はれて居る。

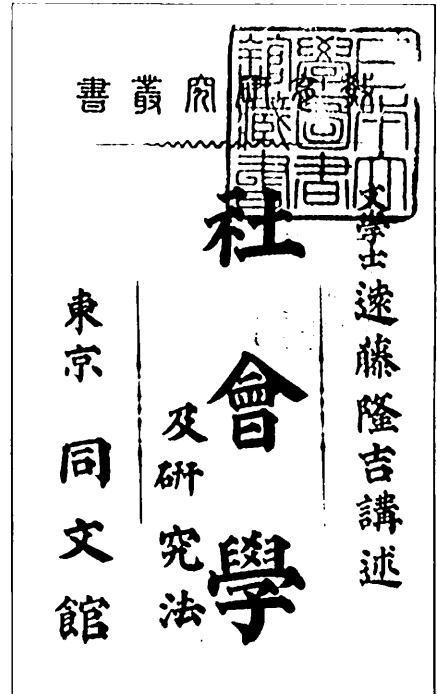
さてこの大精神とは固より吾々の人格を離れた「ゴット」ではない、「ゴット」の考は到底科学の知識と調和しない（中略）。然らば所謂大精神とは仏
教の「パンセイズム」是なり云はゞ、十分説明がつくではないかとの問が起るであらう。

遠藤隆吉著『社会学及研究法』（同文館、明治三十六年十月）の「第三章 社会学の歴
史」に、社会学の命名者としてのコントの名が出てくる。

社会学なる語は始めてコムト（Auguste Comte）に由りて用ひられたる者なり、コムトは仏
蘭西の人にして 今を距ること七十余年前に始めて此の語を創作せり。語は新らたなれども其



狷堂先生著『社会学と哲学』。



遠藤隆吉講述『社会学及研究法』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

の実質はきわめて古代より存在せり。

コムトは社会学に於ける心理学的観点の必要なるを認めたり。コムトは一切の社会的進化を心理学的法則の上に置かんとせり。

社会はいかにあるかの問題——すなわち社会の現象を究明する社会学の一大部門のことを、建部遯吾は“社会静学”とか“社会現象論”と呼んでいる。同人が著わした『普通社会学 第三卷 社会静学』（金港堂書籍株式会社、明治三十七年一月）の「第一篇 社会発生論 第一章 自然社会の発生」のなかに、“社会静学”の名づけ親としてのコントのことが出てく

る。

社会静学の名目（呼び方）はコムトに始まる、其内容は固より多少の相違を免れざれど、大体の性質は全く如上（上記のごとく）の意義に於ける者とす。社会をそがある如く考察するもの即ち静学的研究にして、社会を変遷進道の方面より考察するもの即ち動学的研究なり

建部遯吾著『社会学序説』（金港堂書籍株式会社、明治三十七年一月）の「第一卷 社会学序説 第一篇 総論 第一章 社会」に、コントの名が散見する。著者によると、現時において社会学者はみな、社会学における“序説”の必要性をみとめているという。著者は、社会学序説を分けて二篇とした。理論的方法をのべたものを総論とし、歴史的方法を講じたものを史論とした。

コムトは其実理哲学体系の第一巻を以て全く学問の総論に充て、スペンサル亦其第一原理を以て之に充つ

近時に至り、オオギュスト・コムト出づるに及びて、社会学は始めて充全なる学問的態度を取るに至れるが、氏は有機体と社会との比較を甚だ重視せず 唯社会を以て動物と対比せることありしのみ……

『哲学雑誌』（第一九卷第二〇六号、明治三十七年四月十日）は、「スペンサー特集号」である。この中に遠藤隆吉は「スペンサー氏の社会学系統」と題する小論を寄せているが、コントの名が散見する。

スペンサーはコムトの創始せる社会学なる名辞を襲用せり（中略）。氏が第一原理を著したる精神も亦コムトと同じく一切の科学に付て統一する所を発見せんとするに在り。コムトは智識的に統一のなきは各種の科学に付て 或る者は神学的時代に達し、或る物は形而上学的時代に達し、或る者は実験的時代に達し、其の方法に於て一致せざるを以てなりとなせり。

スペンサーは実際コムトの社会静学あるを知らずして、此の名を冠せるなりと云ふ。

建部遯吾著『理論社会学綱領』（金港堂書籍株式会社、明治三十七年九月）の「二 社会学の発生」に、コントの学界における地位、かれの学問の精神についての特徴が記されている。

斯人文開展の齊一に（ひとしく）要求する所に随ひ 其肩託の根基を與へ、其発展の中根を供ふる者早晚必ず出でざるを得ず、人文開展の勢、未だ見今（いま）の如く顕著ならざるに際して、夙く既に這大勢を洞察し此使命を全うせる者は、オオギュスト・コムトの社会学即ち是なり。

コムトの学界における地位は孔子、プラトオン等と同じく、有史以来其當時に至る人間知識の造詣を體要（要点をとる）して 以て人生の究竟（つまるところ）問題を解釈し、直に眼下の社会の救済其事に充てむと企図せる者に外ならず。知識界を体系的に總攬して、更に一進展を成し、社会といふ新なる対象を添加せるは、即ちコムトが當時に至る学問知識開展の大勢上看破せる（見破る）不可避の必要なりしなり。

コムトの学問の精神は左の四項に約すべし、一を学問の渾一（一つにまとめる）と為し、二を学問の禮統と為し、三を実理的学問と為し、四を人道的学問と為す、而して是れ実に社会学の面目（すがた）なり。

朝永三十郎編『哲学辞典 全』（宝文館、明治三十八年一月）に、コントの項目がある（二二四頁）。

近世社會學

遠藤隆吉著

東京 成美堂發行

遠藤隆吉著『近世社會學』。
〔日本大学文理学部附属図書館蔵〕

コント、オーギュスト。Comte, Auguste.

有名なる仏国の哲学者にして数理学者、実証論 (Positivism, 積極論又は実験論とも訳す) 又は実証哲学の始祖、人道教 (或は人類教) の設立者なり。(二七九八—一八五七)

小林照朗著『日本之社会』(金港堂書籍株式会社、明治四十年一月)の「第二章 社会学の概念」に、「社会学」の語の創始者コントのことが出てくる。

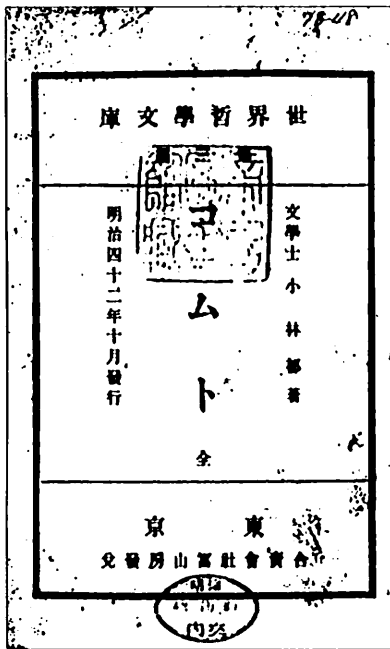
社会学なる語は、オウギュスト、コムトが名著『実理哲学体系』に於て初めて用ひし処にして、実に西紀一千八百三十年代(我が天保年間)の事なり。その語源は羅典語の『社会』と希臘語の『学』とよりなり、『社会の学』たるを意味す。コムト一度この語を創始するや、その拉典、希臘二語の混成の故を以て、野卑なりとして批難する学者ありしも、その實際の便益と斯学(しがく)に於けるコムトの偉大なる勢力とには遂に抗すべくもあらず。社会現象を總括し、社会全体に自然法の存在を認識し、茲に社会学を組織せしは、即ちコムトの一大發明なりとす。

遠藤隆吉著『近世社會學』(成美堂書店、明治四十年三月)に、コントの名が散見する。

序

天才の創意は往々にして人心を攪亂し迷惑せしめ、以て文明を促進せしむることあり。コムトに由りて作られたる社会学も 其名稱の嶄新なるがために靡然として(なびき従う)学者の注意を惹起せり。

抑も社会有機体説は コムト氏以来俄かに盛んなり。



小林郁著『コムト 全』。

スペンサー氏が進化論より社会を説明し、コムトが社会学の法則を以て生物学の法則に従属せる者となせるは 皆生物的性質を認めたる者にして……

小林郁著『社会心理学』（博文館、明治四十二年八月）の「第二章 社会学の成立」に、“社会学”の命名者コントの名が出てくる。

社会学は社会を対象とし 其生存発達を攻究する学なり（中略）。抑も斯学が初めて唱へられしは、アウギュスト・コムト（二七九八一—一八五七）に由り為されしものにして、原名 *Sociologie* なる語は 其大著実証哲学体系第四巻中に初めて用ゐられしものなり

此語は羅典語 *Socius* と希臘語の *Logos* より成り、此くも二国語を合成するの事は野蛮として、余り学者の間に採用せられざりしが 後スペンサー起りて此語を以て其書名に冠すに及び 大勢既に定まりぬ、

同じ著者による『コムト 全』（富山房、明治四十二年十月）は、「世界哲学文庫」ちゅうの第三編にあたる。本書は本邦初のコントに関する単行本である。全三三八頁から成り、英仏の諸書（マルチノー夫人の『オーギュスト・コントの実証哲学』『一八五三』やレヴィリブリエールの『オーギュスト・コントの哲学』など）を参考にして著わしたものである。

当時、わが国のコント文献のきわめて少なかったことを考えると、同書はわが国のコント研究史の頁をかざるものとして見過せないものである（馬場明男）。目次を摘記すると、つぎようになる。

第一篇	総説
第一章	コムトの時代
第二章	コムトの学説
第三章	コムトの実証哲学
第一節	認識論

第二節 科学の体統

第三節 諸科学の実証的性質（社会物理学を除く）

第四節 社会物理学

第五節 人道教

第六節 結論

第二篇 本論

実証哲学

第一章と第二章まで

社会物理学

第一章から第十五章まで

著者は本書の「序」において、つぎのように述べている。

オーギュスト、コムトは碩学^{しやくがく}の士なり。学問を以て人類中心の説を唱へ、由りて分離せる学に克く統一を附し、皆其処を得しむ、偉ならずや。然かも尚ほ学問の爲めに学問を攻究するの必要を説く事、其書の之に反響^{はんきやう}之を幾度かす。所思^{しし}学にして唯徒らに術の爲めとならば、学の進境は之を見る能はず、之に倚立する（もたれる）術亦進歩を見る能はずと。然かも共に人類の爲めとの大義を失はざるなり、唯直接と間接との別あるのみ。

コムトは実に仏国大革命の後に生れたり、此空前にして想ふに又絶後なる可き時期に際し、当時の人心を均しく支配せし大問題は「此社会は如何になり行く可き乎」にあり、旧組織は全く破壊せられて新組織未だ起らず、智愚賢不肖の論無く、挙げて此問題の解に苦しみぬ、当時の幾多の碩学は諸々の解決を試みたりき、然かも皆直ちに之を決せんとして、未だ以て満足なるものを得ず、コムト此時に生れ亦此研究を以て己が事と爲しぬ（第一章総説）。

コントの実証哲学については、――

コムトの実証哲学の特色とする処は、社会学の創立にあり、之に由りて彼は初めて其学問に統一あるを得せしめ、学問の全体に亘りて実証的精神の流行するを見る、而して此社会現象は、極めて複雑なるものにしあれば、最後に初めて構成せられしもの、然かも逆に又之れの興起してより爾余の（そのほか）学問帰趣する処ある（ある方向におもむく）を得たり、即ち之に由りて初めて、学問の渾一（一つにまとめる）を得たり、此くして云はむとす、社会学は總ての学問の終結点にして、同時に又出発点なりと（第三章 コムトの実証哲学）。

和漢混淆文で書かれた小林のこの本は、こんにちからみると、読みずらいだけでなく、ところどころ晦渋な部分があることを否めない。が、熟読反芻すれば理解できぬしろものではない。

江部淳夫著『文明論』（金港堂書籍株式会社、明治四十二年十一月）は、明治三十八年（一九〇五）四月に帝国大学に提出した論文を多少修正したものという（凡例）。この中にコントの名が散見する。

コムト氏は思想史を別ちて神学的、形而上学的及科学的の三時代として（中略）史期を画せんとする者数ふえるに遑あらずと雖も（「自序」）

コムト氏学問を定義して曰く、学問とは人の実理的示命を攻究するものなりと、惟ふに之れ氏の一家の言にあらじ（「自序」）

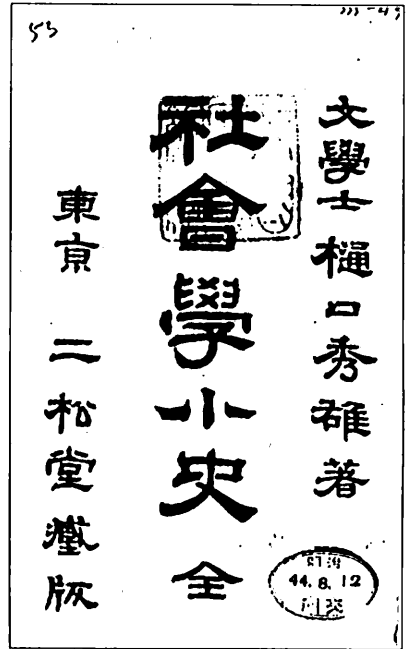
コムト氏は人道主義を以て各社会の概念を定めんとせり……

コムト氏の学案たる、人道に起りて人道に帰るの主張は、氏が組織の全体を貫通せるもの、如く

コムト氏が宇宙の進化に就て、数学的星学的並びに生物学的宇宙を説き、遂に社会学的宇宙に到達し、宇宙現象中最も人間に近接する者は社会なりとせる（実理哲学全部）は、蓋し此意なるからんや（第一章 緒論）。

河田嗣郎著『社会主義論』（宝文館、明治四十三年十月）に、コントの名が散見する。

啓蒙期の哲学に次で仏蘭西の思想界には「イデオロジスト」「トラヂシヨナリスト」起り、遂にサンシモン、オーギュストコント等の社会改革派起れり



樋口秀雄著『社会学小史 全』。

コントも亦サン、シモンと等しく、社会改革を唱道したれども、彼はサンシモン、フリーエー等の架空的議論に満足する能はず（第八編 社会主義論 第一章 社会主義の由来）。

樋口秀雄著『社会学小史 全』（二松堂書店、明治四十四年八月）は、明治期に邦人が著わした社会学史研究（古代から近世まで扱う）としては唯一のものである。本書（全一七八頁）は、八章から成るが、第五章は「オーギュスト・コムト」（四三―五四頁）である。本書のへき頭第一に、コントの名が出てくる。

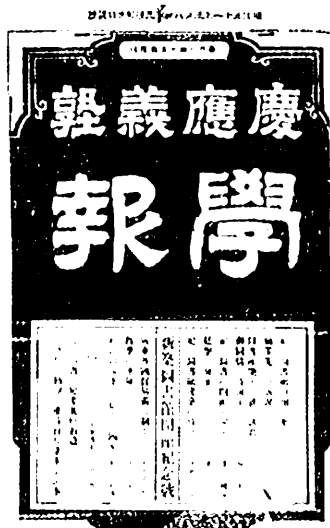
社会がコムト (Comte) の実証哲学体系 (Cours de philosophie positive) の一部として建設せられて以来未だ百年に至らぬ（序論）。

著者は第五章において、コントの哲学（実証哲学）や十余種におよぶ著書遺稿、知識発達の三段階、社会学の語源などについてのべている。コントが社会学を建設した理由については、つぎのようについて。

社会学はコムトによって建設せられたが、その哲学体系の本義から云ふと、コムトは社会学を建設するが為に社会学を説いたものでなくて、実証哲学の完成の為に、必然の結果として社会学の建設に到達したものと見るべきである（五二頁）。

同じ著者による『社会学十回講義』（二松堂書店、明治四十五年五月）の「第一講 社会学」に、社会学の命名者コントのことが出てくる。

現今行はれて居る社会学と云ふ語の原語はソシオロジー (Sociology) と云ふので、一八三八年に社会学の創立者と云はれて居る仏国の哲学者コント



『慶應義塾 學報』の表紙。

(Auguste Comte, 1798-1857) が、その大著述「実証哲学大系」(Cours de philosophie positive, 1830-42) といふ書物の第四巻の第三版に於て始めて用いた言葉である。即ち此語の学界に生れて以来 未だ一世紀の誕生日にも到らぬので、極めて新しい学語であるが、併しながら此以前に社会の研究と云ふものが少しもなかったのではない。

オーギュスト・コントの哲学は、実証哲学である。コントは単に社会学を研究せんがために社会学を建設したのではなくして、その哲学系統の当然の論結として、社会学を建設するに至ったのである。

『慶應義塾 學報』(第一七九号、明治四十五年六月十五日) に、川合貞一の講演筆記「哲学の運命」がのっている。これは図書館の開館記念講演会において語ったものを活字にしたものである。この中で講演者はコントの知識発達の三段階にふれている。

哲学の時代は既に去つたと云ふことは必ずしも俗人が言ふだけではない、有名な学者でさう言つて居るのがある。仏蘭西のオーギュスト・コントはそれだ。渠の考によると 吾々の知識と云ふものは、何れの方面に於ても三つの階段を経て行く、と言ふのは、第一が神学的階段、第二が哲学的階段、第三が実証的階段である。

他語を以て之を云ふと 人間の精神と云ふものは總て其研究に於て三つの方法を探る、第一が神学的方法、是が最初、それから第二に哲学的方法を探ることにより 第三に実証的方法に移つて行く。

『哲学雑誌』(第二七卷第三〇六号、大正元年八月十日) に、三宅雄二郎の談話筆記「現代の哲学攻究法」がのっている。これはいふなれば、哲学の研究法について語つたものであるが、何をどう攻究すればよいかといった明確な答はないのである。講演者は、こゝにち究めうるだけ究めろ、といっている。

日本では別に支那哲学とか印度哲学とか云ふ風に地方に別けて居る。或特別の地方に、

斯く／＼の哲学の学説があつた、と云つて、それを攻究することになって居る。科学の方には地方別けが一向ない。物理学 生物学があつて 何々地方と云ふものはない。其地方で又人を別けて 誰々の学説と云ふ様に攻究することになって居るのが哲学である。是れがコムトの神学的、形而上学的、実証学的と三つに別けたのに 何程か當つて居る所がある。

安倍能成訳『オールドルフ オイケン 大思想家之人生観』（東亜堂、大正元年十月）の「第三篇 近世 第三節 實在論への転向 其一 実証哲学」に、コムトについて一章さかれている（六七〇～六八二頁）。

実証哲学の主要観念は 已に十八世紀に於て、就中ヒュームに出で、居る。然しコムトに至つて始めて、之を一つの体系に纏め、そして生活全体に充分な効果を及すに至らしめた。

コムトは學問を五大別した。即ち星學、物理学、化学、生物学、社会学（新造の詞）である。

久保良英著『哲学概論』（弘道館、大正二年一月）の「第六編 倫理学及び社会学 第六章 社会学及び歴史哲学」に、社会学の名称と概念を構築したコムトのことが出てくる。

此の科学の概念と名称とは、十九世紀の中葉に至りて、初めて仏國の思想家オーギュスト、コムトによりて作られたるものなりと雖、其の対象は既に早くより哲学的に攻究せられたりき

オーギュスト・コムトは已に述べたるが如く、社会学の概念と名称とを創造したる学者なるが、氏は社会発達の法則を全く自然法則と同一の方法を以て攻究し、且つ整理せんとせり。

桑本嚴翼著『現代思潮十講』（弘道館、大正二年六月）は、大正元年（一九一二）十一月から同二年（一九一三）に至るまで、京都帝大でおこ

なった特別講演の筆記録が母胎になったものである。その講演を簡明精確に筆記したのは、後年のカント哲学者・天野貞祐（二八八四～一九八〇）である。同書の「第三講 実証主義」にコントのことが出てくる（四七～六六頁）。

今先づ其内最も普通なものを代表者として、実証主義の起源を説かうと思ふ。其れには仏国のオーギュスト・コムト (Auguste Comte 1798-1857) の思想を説くこととする。然し予め、何故にコムトを実証主義の代表に選ぶかを述べて置かねばならぬ。

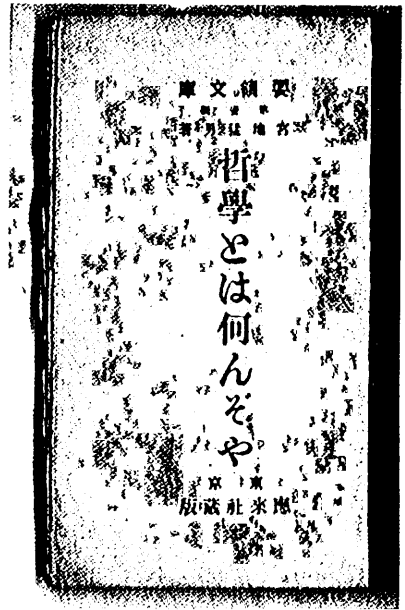
コムトは其著に於て、彼が最も根本的であると考へた学問を選んで其を概論してゐるが、特に社会原象を物理学者と同じ様な態度で論じたところは、彼が最も力を注いだものと思はれる。

桑本はコントのいう“知識発達の三段階”や“科学の分類法”にふれている。桑本は前者を“三時代の説”、後者を“学問分類の論”又は“諸学位階論”といった風に呼んでいる。

三時代の説とはどういふのかといふに、コムトの考によれば、人間精神の発達を全体として見れば、其処に原則があつて、人の精神は必ず (一) 神学的或は仮想的時代 (二) 形而上的或は抽象的時代 (三) 実証的或は科学的時代の三段を経て発達するものであるといふのである。

コムトは始め社会物理学といふ名を用ゐたが、後に社会学といふ名を作った。斯く学問の理想は実証的になる事であると考へ、其の見地から種々の学問を分類した、其れが学問分類論或は寧ろ諸学位階論である。コムトによれば、数学、星学、物理学、化学、生物学、社会学の六つが根本的学術で、猶ほ此他之れから導き出される所の実際的の学術がある。

稲田周之助著『日本憲政提要』（有斐閣、大正二年九月）は、わが国の立憲政治の歴史を叙述したものであり、幕末から大正初期に至るまでの政治発達史である。同書の「第一章 総説」に、コントの“知識発達の三段階”のことが出てくる。



宮地猛男著『哲学とは何んぞや』。
〔筆者蔵〕

仏蘭西オーギュスト・コムトハ 人間ノ精神ノ発達ノ次第ヲ述テ、第一期ハ、神学的若クハ仮想的時代、第二期ハ、形而上的若クハ抽象的時代、第三期ハ、実証的時代若クハ科学時代ト為シタリ。此レ個人ノ精神状態ヲ基礎トシテ、其言ヲ立ルモノタルヤ論ナシ。

寛克彦著『法理学 第二卷 西洋哲理 上』（清水書店、大正二年十二月）の附録に、コントのことが出てくる。なお本書は、大正九年（一九二〇）八月再刊された。

ノミヲ有効トシ、原因結果ノミノ独リ用セラレ得ベキコトヲ独断シ、此ノ方法ヲ用テ精神及ビ社会原象ヲ説明セムトセシ者ハ、第十八世紀ノ終リニ急ニ民衆本位トナリタル仏国ノ「オーギュスト・コムト」Auguste Comte¹⁸⁰⁸⁻¹⁸⁵⁹ナリ。数学、星学、物理学、化学、生物学、及び社会学ノ六科以外ニハ、哲学モ亦存セザルモノトスルハ彼ノ意見ナリ。此ノ説ハ仏英独共ニ其ノ信仰者ヲ有ス。

ロジャーズ原著
藤井健治郎 合訳
北吟吉

『西洋哲学史』（富山房、大正三年二月）は、ロジャーズ教授のStudent's History of Philosophyを反訳したものである。同書の「第四十章 コント及び実証論」に、初期の哲学——コントの実証論、有名なる知識発達の三段階の法則、科学の分類——などが出てくる。さいごにすこし、「人道教」と後継者を生んだイギリスにふれている。

後年彼は其の初年の見解の建全の大部分を失ひ、以て其の哲学を人道教に変ぜんと企てたり。
コントの生国以外に於てコントの著作が無上の同情と好意との遇ひたるは英国なりき。

宮地猛男著『哲学とは何ぞや』（應来社、大正三年十二月）は、もっとも平易な言文一致で書いた哲学の入門書である。従来の哲学は、単に形

而上学にかぎられていたが、本書においては、心理・論理・倫理・美学・社会学など、精神科学のいっさいを加え、さらに哲学史の概要をも記している。

この中に「社会学」のこゝとばを創ったコントの名が出てくる。

社会学といへる言葉は、オーガスチン、コントに依つて作られたもので、語源は遠く拉丁語のサシアスと希臘語のロゴスとの相連結したものだ。

フランク、シルリー氏原著
若守義孝訳述

『古代より
現代まで』

『西洋哲学史』（日黒書店、大正五年九月）は、コーネル大学哲学教授フランク・シルリー Frank Thilly の『哲学史』

(A History of Philosophy) を反訳したものである。本書の「第九章 仏国及び英国の哲学 第一節 実証主義及び其の反対」に、コントの理想とするもの、知識の進化、科学（学問）の分類のことが出てくる。

コントの理想も、亦サン・シモンサン・シモンの如く、社会の改革にあり。此の目的は社会の法則、即ち社会学を知るにあらずんば、達すること能はず、而して社会学は、又其他の科学及び哲学の知識を予想す。

コントの理想とする実証知識は、歴史的進化の結果たり。人心は三段階を経、即ち三種の研究法を経たる者なり。神学、形而上学、及び実証学実証学は、

コントは実証学に至るまでの順序に依り、学問を分類して、数学（算数学、幾何学、機械学）、天文学、物理学、化学、生物学、及び社会学とせり

安部能成著『哲学叢書 第十編 西洋近世哲学史』（岩波書店、大正六年四月）の「第五章 第十九世紀の哲学 第一節 仏蘭西哲学 二 社会主義及びコントの哲学」は、実証哲学の建設者としてのコント、知識発達知識発達の三段階などにふれている。

彼（コント）は学問の三階段を説いた。学問は人間一切の世界観及び生活と同じく、三つの階段を通過する。即ち第一の神学的階段は超感覚的な諸ちうかくの力を通じて、第二の形而上学的階段は普遍的概念によって、第三の実証的階段は専事実せんじじつの確定によって、各その認識問題を解決せんとする。

現代學部六編

ヘフディング著
北 吟 吉 譯

下 卷

近世哲學史

早稲田大學出版部藏版

ヘフディング著 北吟吉訳 『近世哲学史 下巻』

ヘフディング著 『近世哲学史 下巻』（早稲田大學出版部、大正七年四月）
北吟吉訳
の「第九編 実証論 第二章 オーギュスト・コント」は、コント伝、
三段階の法則、科学の分類、社会学及び倫理学、認識論、神秘家として
のコントなどについて論じている（三九三〜四三八頁）。コントの思想
は安息をもとめ、かれは人道教に没入しようとした。かれが入信した人
道教とは、左記のようなものであった。

或は小なる或は大なる範圍に於て、自由に努力し來った過去現在及びに將來の人々の總括として、人類を礼拝することである。人道教は一の理想的概念である。

如何となれば、人道の爲めに献身し努力した人々のみが、人類の記憶に於て永久に生命を有するからである。コント自からは、人類の發達に重要であつた人々の名を 月日の名とした実証主義者の曆を作つて、公の礼拝の初階梯とした。

田島錦治著『近世社會主義論』（法曹閣書院、大正八年五月）の「第二編 仏蘭西社會主義 第四章 サン、シモンの社會主義」に、すこしコントのことが出てくる。

Auguste Comte が哲學思想の如きは 實に St-Simon に涵養せられたる者にして 其の著 Cours de Philosophie Positive = 積極的哲學論 = 是れ唯 St-Simon の思想を演繹せるに過ぎざるなり

『三田評論』(大正九年三月号 通号第二七二号)に、川合貞一の小論「恩の思想」がのっている。これは人間の根本的性質などについて論じたものだが、コントの利他主義、知識発達の三段階にふれている。

それから仏蘭西のオーギュストコントなどになると、利他というものを以て 自利を征伏するのが吾々の目的である、と考へたのである。コントの説を委しく述べると云ふことは、此処では出来ないことであるが、兎に角コントは段々世の中が実証哲学的になると斯う考へたのである。初めは神学的時代から、形而上学的時代になり、それから実証哲学的時代になると、斯う考へたのである。

高島素之訳『社会主義社会学』(三田書房、大正九年六月)は、アメリカの社会主義者アーサー・ルイスの『社会学への一の手引』Arthur Lewis: *An Introduction to Sociology* を訳したものだが、「第一章 コントの人類発達説」「第二章 コントの科学分類法」などが論じられている(一二八頁)。なお、のちに同書の改訳版『社会学講話』(アテネ書院、大正十四年十月)が刊行された。

十九世紀の前半にこの新科学が生れた。それは生物学と社会学である。そして此二科学の発明の榮譽は、いづれもフランスに属してゐる。(中略)社会学はコントと共に始まった。勿論、其徴候は既に古代の哲学思想の中にも現はれてゐる。然し其れが一個の科学の姿を取ったのは、主としてコントの努力の賜物と見なければならぬ。

『人類発達説の理法』は コント哲学の全構造に対する最大の根柢を成すものであつて、社会上及び科学上の進化の諸現象に対して幾多の新見地を開発する。

コントの科学分類法は、諸科学を唯機械的に並列すると云ふ丈では無かつた。彼は寧ろ其れを、有機的系統關係に配列した。先づ最初に大元の科学を求め、次ぎに其れから生れた子科学を尋ね、それから又其子を求めると云ふ風に、其分類法には一貫した連系の秩序がある。

マッケンジー原著 納氏訳 『社会哲学原論』(日本評論社出版部、大正九年六月)は、イギリスの思想家 I. S. Mackenzie の *Outlines of Social Philosophy*, 1918 を訳したものである。「訳者より読者へ」の中に、コントの名が出てくる。

今を距る凡そ百数十年前、オーグスト・コムトが其の『実証哲学』に於て、社会学の輪郭を初めて提示して以来、世界の学者は翕然として（あつまるさま）斯学の討究に身を委ね、特に最近に於ける各方面に互る其の造詣は決して往時の比でない。

金子筑水著『思想 歐洲思想大観』（東京堂書店、大正九年十月）の「第六章 最近代思潮 二 現代思想の發生（フランス）（二）コムト」に、サン・シモンに師事したコントについての短章がある。

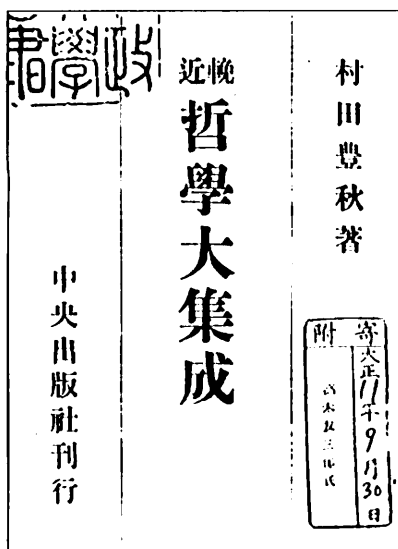
コムト さもあれサン・シモンの現実的思想を一層徹底的に一層学理的に、又組織的に然かも一層大仕出に発達させ、因って世界に於ける実証主義の根柢を学理的に固めた者は、言ふまでもなく彼のサン・シモンに師事した哲学者オーギュスト、コムトであった。コムトの実証主義的思想（現実思想）は、イギリスの実際的思想と並んで、十九世紀現実思潮の根柢であった。

帆足理一郎著『哲学概論』（洛陽堂、大正十年三月）の「第二節 社会学的研究の発達」に、コントのことが出てくる。

社会学なる名称も概念も、十九世紀の半、フランスの碩学コムト（Comte）によって創始されたものであるが、其論件は古代から哲学者達の注意を払ってゐた処である。

コムトは、恰も自然現象から自然法を研究し出すが如く、社会現象から社会進化の科学的法則を研究し形成せんと試みた。彼の説によれば、社会学は彼れの所謂実証哲学大系の頂点であると見るのである。科学の階段を先づ数学から登り初め、天文学、物理学、化学、生物学等を経て、社会学に至り、其絶頂に達すると云ふのである。

納武津著『新社会学講話』（日本評論社、大正十年十月）に、静的問題（社会体制の問題）と動的問題（社会機能の問題）からみたコントのことが出てくる。



村田豊秋著『近世哲学大集成』。

斯学の研究に一生を託しようとする予輩後進の一学徒として、オーグスト・コムト初め、爾余幾多の諸先輩、社会学者の苦心に対し満腔の尊崇を感じしむると共に、且つ衷心の歓喜を感じしめて止まない所以である（「序文」）。

社会を横合から研究した場合の云はゞ、仮りに静止した社会の問題に外ならない。此の様な理由から、オーグスト・コムトは社会学の此の方面を「社会静学」と呼んでゐるのである。

社会に於ける変化乃至発達の問題は、云ふまでもなく運動の問題であるから、オーグスト・コムトは社会学の此の方面を「社会動学」と呼んで、彼の時代では之れを運動の法則を論究する物理学の一部たらしめようとしたのであるが、……

村田豊明著『近世哲学大集成』（中央出版社、大正十年十二月）の「第十二章 コントの哲学」において、著者は知識発展上の三階段、社会静学、社会動学、人類教について平易に説いている。

デ彼れの社会学を通覧すると、夫れは社会の一定不変の制約を攻究するところの社会静学と、社会の進歩的發展の理法を攻究する社会動学の二部に分たれて居るのである。

伊達保美著『哲学概論 上巻』（泰文社、大正十一年五月）の「第一編 第二章 認識の可能性の問題 第三節 実証論」に、コントの実証主義についての短章がある。

ポジティヴィズムとは、其字義から云へば積極主義或は積極論であつて、是れを実証論と呼ぶのは寧ろ其主張の内容に約して称するのである。而して此言葉を用ゐ、又其主張を組織的に建設したのは、十九世紀仏蘭西の哲学者アウグスト・コント（Auguste Comte, 1798-1857）であるが、併し哲理的原理としての実証論は必らずしもコントの説に終始する者ではない。

彼の有名な三時代説（lois des trois états）は、人文の進程が第一に擬人的神学的時代、

金子馬治著
現代哲学概論
東京堂版

金子馬治著『現代哲学概論』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

第二に抽象的形而上学的時代を経て、第三の実証的時代に至って始めて如^{じやう}上の（前言のような）実証的科学的立場をとり、そして超自然的性格や形而上学的本体の仮定によることを捨て、積極的事実に訴へて経験観察に基^{もと}く法則を抽象するやうに成ることを説いてゐる。

遠藤隆吉著『社会学原論』（叢松堂書店、大正十一年七月）の「第一編 総論 第一章 社会学の字義」に、社会学の命名者コントや社会学の原語についての説明がみられる。

社会学なる名は一千八百三十八年仏人コムト（Comte）の創めたものである。彼は其の著、実証哲学概論に於て始めて此字を使用した。けれども同書の標題には社会学と曰^{いは}はずして社会物理学といふて居る。

社会学の原語sociologieはラテン語のsoci^{ソツキ}（仲間の意味、複数の形はsoci^{ソツキ}）と希臘語のlogos（言語又は学問の意味とより成る。即ち仲間を研究する学の意である）「中略」

社会を研究する学は仲間を研究する学、更に換言すれば社会の人々に共通なる性質を研究する学と命名せられたのである。

宮本和吉、高橋穰也編『岩波哲学辞典』（岩波書店、大正十一年十月）に、「オウギュスト・コント」についての小記事がみられる。

社会や歴史の本質が数学や物理と同様な精確科学によって説明さるるに及んで 社会の混乱は始めて救はれると考へた。而して如上の学問即ち社会学を建設するは 彼の実証哲学若しくは積極哲学の目的である（三四一頁）。

金子馬治著『現代哲学概論』（東京堂、大正十一年十二月）の「第三章 現代に於ける現実主義の哲学 第二節 実証主義の根本精神」に、実

証主義の創造者、学問（著者は「文明」ということばを使っている）の發達の三段階についての言及がある。

オーギュスト・コムト 最も大仕掛に最も科学的にシモンニズム（Simonisme）サン・シモン主義を大成し徹底したは 著名のコムト其の人であった。科学的知識を尊重して、科学的知識の時代を初めて実証的（Positive）と名づけたもまたコムト其の人であった。此の意味に於て彼れは真の実証主義の創造者又建設者とも言はれる。

コムトによれば、今日までの文明は三段階に分かれて、つぎ／＼に叙々に發達して来たものであるといふ。三段階とは

- 一 神学時代 (Theological stage)
- 一 哲学時代 (Metaphysical stage)
- 三 実証時代 (Positive stage)

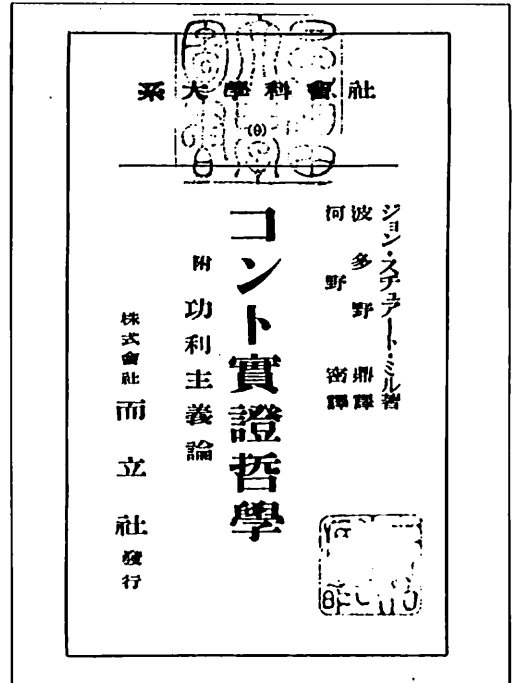
キユルペ原著 神谷元訳 『哲学概論』（南風堂書房、大正十二年一月）に、すこしコントの歴史哲学にふれた箇所がある。同書はドイツの哲学者・心理学者オズワルト・キユルペ（一八六二—一九一五）が著わした *Einführung in die Philosophie*, 1895 を反訳したものである。

コムトの歴史哲学はかくて、人間社会の現状及び過去の發展に於ける条件と形式との学説となった。即ち社会静学 *Status of society* と社会動学 *dynamics of society* とに分ち得る社会学 *sociology* 又は社会哲学 *social philosophy* となったのである。

ハーバート・スペンサー著 鈴木栄太郎訳 『個人対国家』（社会学研究会、大正十二年三月）は、「諸科学の分類」「社会有機体」「個人対国家」の三編から成っている。「諸科学の分類」は、スペンサーが、社会学の鼻祖オーギュスト・コントの實在論的学問分類論に対して、批判を試みると共に、自説をもっとも組織的に論じたものという（「訳者序文」）。

パウ・バルト著 波多野鼎訳 『社会学体系論』（大鑑閣、大正十二年三月）に、コントに関する短章がいくつかある。

「社会学」(Sociologie) の名は普く知らるゝ如くコムトに淵源する。けれどもその実体から言へば 社会学はそれよりずっと以前から存立して居たの



ジョン・スチュアート・ミル著 『コント実証哲学』。
波多野、河野訳
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

である。(第一編 社会学の成立 第一章 政治学)。

サン・シモンによって与へられた新らしき研究 新しき思考方法への刺激を最も敏感に体得して、茲に最初の社会学体系を創り出したものはオウギュスト・コムト (Auguste Comte) である。サン・シモンは新しき科学の輪廓を形造るに忙しく、それを一つの体系に迄発展させることは出来なかつたが、コムトは個々の問題をも探究して、これを一の体系に纏めた。コムトは社会学の父である(第二編 主知的社会学 第一章 コムトの社会学〔最初の社会学体系〕)。

エミール・デュルケム著 『社会学的方法の規準』(社会学研究会、大正十二年四月)に、コントの名がみられる。

彼(ミル)はコント A. Comte が既に社会学につき述べた所のものを、彼の弁証法の飾に掛けたに過ぎずして、何等彼自身の独創的研究を加へなかつた。実理哲学講義 Cours de philosophie positive の或る章に於いて、此の問題に関する殆んど唯一の、独創的にして欠く可らざる研究があるのみである。

ジョン・スチュアート・ミル著 『コント実証哲学 附 功利主義論』(而立社、大正十二年七月)は、John Stuart Mill: *Positive Philosophy of Auguste Comte*, 2 edition, 1867を独訳を参照しながら反訳したものである。これは小林郁の『コムト 全』(富山房、明治四十二年十月)について、わが国のコント文献のなかでひとときわ生彩を放っている。版元である而立社の『社会科学大系 9』にあたる。

内容は――

序言 訳者序文 第一部 コント実証哲学論(「実証哲学講義」の思想について論じたもの)

第二部 コント再論(「実証政治学体系」を中心とする思想を批判したもの)と略伝である。

『社会学雑誌』(創刊号、大正十三年五月)に、本田喜代治訳「オーギュスト・コント、其時代及其思想(一)」がのり、翌年、同誌の第二号に

掲載したものををもって完結している。これはレヴィ・ブリュール著 L. Lévy. Bruhl: *La Philosophie d'Auguste Comte* の「緒言」を反訳したものである。

川辺喜三郎著『社会学原論』（早稲田大学出版部、大正十三年六月）の「第二章 社会学の性質 第二節 社会学の発達」に、社会学の起源、コントの知識発達の三段階（著者は「学問発達の三時期」と呼ぶ）、科学の分類法（著者は「科学の階梯的分类法」と呼ぶ）などに関する記述がある。

社会学は、強ひて其の起源を探めれば、既に古代ギリシャの昔、プラトーンやアリストートルの思想中に萌芽したといひ得る。併し其れが、独立の科学的形態を取って現はれたのは、先づ仏蘭西のオーギュスト・コントと英国のハーバート・スペンサー両氏からである。

フリードッヒ・ムックル原著
高橋正男訳

『サン・シモンの生涯と其思想体系』（モナス、大正十三年九月）に、コントの名が出てくる。

此のコントが三階梯原則と云った進化説は、チュウルゴーとは異り、単なる智的原则ではなく、社会科学的原则たんとするものであって……

西宮藤朝著『現代哲学思潮大系』（新光社、大正十三年十月）の「第四章 仏蘭西哲学 第三節 コント」に、コントの実証哲学と小伝についての短い記事がみられる。

仏蘭西哲学ではデカルト以後の最も大なる人物と称されてゐるコムト (Auguste Comte 1798-1857) は、実に仏蘭西に於ける実証的傾向を最も大仕掛けに且つ最も興味ある様式に組織した人である。近代に於て、実証主義の哲学と言へば直ちにコムトの哲学を指す程に、彼の哲学は実証的傾向の代表者であった。而して彼自身が、自らの哲学に、実証哲学 (Philosophie Positive) の名を公然と冠したのである。而して彼の影響も非常なもので、少くとも十九世紀の末葉に到る迄は、何等かの形で、仏蘭西の哲学界に表現されてゐた。

ウエルネル・ゾンバルト著
景山哲雄訳

『社会学』（而立社、大正十三年十一月）に、コントが出てくる。

社会学者と言はれて居て哲学者の特相を備へてゐるのは、コントといふとシエレルとである。コントは、彼自身の信する所では、一個の『実証論者』であるが、然し、その論文——本書に輯めてあるのはその抜萃である。

村田豊秋著『近代哲学大系』（成光館出版部、大正十四年一月）の「第十六章 コントの哲学」（三五〇—三八八頁）は、コントの思想に関する長編論文である。知識発展上の三階段——社会静学——社会動学——科学の分類——社会学——倫理説——人類教などについて平易に説かれている。

仏人コントは、千七百九十三年を以て生れた、彼れの哲学は謂ふところの実証哲学であつて、実証論の見地からして、其の哲学の設立者となつたのであつた。

著者によると、『実証』の哲学上の意義であるが、それは思弁又は思弁的（頭のなかで理性「『道理を考える能力』」だけに訴えて考える）に反対しての実験的という意味だといふ。それは事実のうゑに立てた哲学に外ならないのである。

だから之れは、決してコントの哲学にばかり独用されるものでないことは勿論である。

兎に角コントは、其が謂ふところの実証論に立脚して、極めて極端なる愛他主義を唱へたのであつた、……

コントのこの愛他主義は、のちに宗教に姿をかえ、人道教となつてゆくのである。

高木八太郎著『東西思潮講話』（共益社出版部、大正十四年二月）は、東西思潮の通俗化を目的として著わしたものであるが、著者はコントの思想上の位置、かれの実証論、知識発展の三階段、社会学の建設、社会問題、倫理説、人道教などについてやさしく説いている。

とくに社会問題については——、

コムトは實際的には社会主義の建設に與らなかつたけれども、彼の本意は飽くまで社会生活の改善にあつたから、彼の思想が自然に社会問題にふれていったことはいふまでもないことである。彼もまた多数労働者の位置を進める事は当面の問題であり、急務であり、それが為にはあらゆる改善努力が必

要であると考へた。又当時の社会主義者と等しく労働者の位置を進める為には彼等にも教育が与へられなければならぬことを主張した。

ア・サー・レウキス著
高島彬之訳

『社会学講話』（アテネ書院、大正十四年四月）は、社会学への手引書であり、社会学の起源および発達についての歴史を簡略に語り、当時の社会学の位置に関して一般的概念をあたえようとしたものである。第一章はコントの人類発達説（三―一五頁）。第二章はコントの科学分類法である（一六―二七頁）。

著書の観るところ、コントの社会学における地位は、生物学におけるラマルク（一七四四―一八二九、フランスの科学者）の地位に比すべきものという。社会学の萌芽は、古代の哲学思想のなかにも現われているが、それが特殊の一科学の姿を採るようになったのは、コントの努力の賜という。

スモール著
高島彬之訳述

『社会学思想の人生的価値』（新潮社出版、大正十四年九月）に、コントに若干ふれた記述がみられる。

コントが社会学と云ふ名称を創始して以来、この術語に確然たる内容を与へんとする幾多の企画と並行して、社会学に対しての攻撃が加へられた。即ち、社会学は既に他の諸科学の領分に属して居らぬやうな問題をその主題をすることが出来ると云ふ、従来の論断を否定した一事である。

三宅茂訳『現代仏蘭西学派の哲学』（春陽堂、大正十四年十二月）は、原著者であるドミニック・パロディ（一八七〇―一九五五、フランスの哲学者）が、一九〇八年にブルユッセルの新大学で「現代フランス哲学の諸傾向」という題で講義をしたものをまとめて一書としたものである。が、原著名は不明である。この中にすこしコントへの言及がある。

現今の実証的精神は非常に局限されて居るやうに見えるのみならず先行期（十九世紀第四期即ち一八七〇―一八九〇）の余りに大胆な実証論に比して余程慎重になり余程批判的になつて居る。

或る意味に於てはオーギュスト・コントの純真な思想に立ち返つて居ると云へやう。現代の実証論者は彼等が心理学者であっても或はまた社会学者であっても一定種の諸現象を夫れらよりもっと単純だと考へられる種類の諸現象に同化することを恐れている。



野崎泰秀著『小さい社会学』。

野崎泰秀著『小さい社会学』（広文堂、大正十五年四月）の「第一章 社会学は如何なる学問であるか」に、社会学の始祖コントについての短章がみられる。

コント (1798-1857) は、竟に規模の大なる社会学的体系を成就した。

彼に従へば、学問の発達はその初め、仮定を要せざるもの、例へば、 π といふやうな自明の数学が表はれ、次ぎに此数学の知識を基礎として天文学が表はれる。又数学、天文学の知識を予想した物理学が表はれ、又以上の学問を基礎として化学が生じ、次ぎにそれ等の学問を悉く予想して

生物学が起り、そして最後に以上の諸学問を悉く予想して社会学が生れる。

故に社会学は最も複雑にして最後の学問である。言ひ換れば社会学は一切の学を綜合統緒するものであるといふのである。

斎藤要著『世界哲学史年表』（聖山閣、大正十五年十一月）に、コントについての小記事がみられる。

コント、心理研究に対して社会学を立て哲学に新生面を開いた。

実証論（実証哲学）の設計者 知識発達の三階段 1 神学的階段 2 形而上学的階段 3 実証的階段 科学の分類 1 数学 2 星学 3 物理学 4 化学 5 生物学 6 社会学 この順序は単純より複雑に進む過渡を示すもの（三八頁）。

高畠素之著『社会主義と進化論』（改造社、昭和二年一月）は、かつて『社会進化思想講話』（改造社、大正十四年六月）として刊行したものが、今回書名をかえ再公開した。同書の「第七講 哲学の科学化」に、コントの人知発達論が出てくる。

井森陸平著『形式社会学研究』（甲子社書房、昭和二年三月）に、コントについてのみじかい記事がみられる。「コント、スペンサア等の綜合社

社会学は、社会の概念を構成するに当り、社会現象^{そく}夫自体の考察からではなくして、生物学に於ける有機体の事實的比論を以てしてゐる」(八頁)という。

協定会訳『社会思想史』(協定会、昭和二年九月)は、ルドヴィヒ・シュタン(一八五九—一九三〇、ドイツの哲学者、ベルリン大学教授)が著わした「哲学の光で見た社会問題」*Die Soziale Frage im Lichte der Philosophie*、1923の第二編を反訳したものである。同書の「第二十一章 ルネサンスより現今に至る社会哲学の歴史 十二 コムト」は、コントに関する短章である。

吾人がコムトに於いて始めて社会学の真個の創建者を見出だし得ることは、何人も之を首肯^{しやう}する(同意する)であらう。

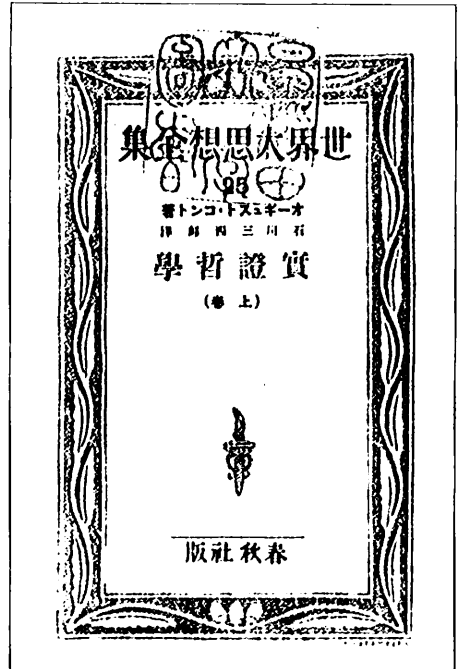
コムトによって「社会学」といふ、決して適切と称し難き名称に於いて洗礼を授けられる科学の中心問題は、彼に取って、前時代若くは同時代の法律哲学者及び国家哲学者に於けるが如き抽象的な法律、又は一層抽象的な国家ではなく、実に人間の社会そのものである。

加田哲二著『近世社会学成立史』(岩波書店、昭和三年二月)は、東西諸家の研究を補綴^{ほてい}して(つづりあわせて)つくった好書である。

著者によると、社会学はその成立の準備期間ちゅうに、一社会科学としての研究方法を成育せしめ、十九世紀のはじめから中頃までの間に独立科学としての存在権を要求したという。

この存在権の要求とともに、これに社会学といふ名称を与へたのが、オオギュスト・コントである。だから通説のやうに、彼をもって社会学の父と呼ぶことは決して当を得てゐないことではない。しかし、コントは彼に至るまでの諸学者思想家が意識的または無意識的に構成し来つた^き研究方法と研究材料とを利用し、これに体系を与へたのである。

戸田貞三著『社会学講義案 第一部』(弘文堂、昭和三年四月)に、「コントの社会学」や「コント以後の社会学」についての詳論がみられる。著者は、コント小伝・コントの学問論・サン、シモンとの関係などについて述べたのち、論旨を左記のように要約している。



オーギュスト・コント著『実証哲学（上巻）』。
石川三四郎訳
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

此主張につき注意すべきは、彼が学問の研究を功利主義の立場に置いた事、此功利主義の立場に於て 彼は一切の科学を実証哲学に綜合せんと企てた事、学問の樹立を対象の差に求め、其研究方法としては実証的方法あるのみとした事、事象の複雑性に應じて諸現象を分類し、最も複雑性に富む現象としての社会現象の存立を認め、此現象を実証的に取扱ふ科学として社会学が存立しなくてはならぬとした事等である。

フイン・ウィーゼ著『社会学（歴史及主要問題）』（刀江書院、昭和三年四月）の「第

五章 コント及びスペンサー」には、コントの諸科学発展系列に関する社

会哲学的・歴史哲学的説明、精神発展の三段階の法則などについての言及

がある。

松本潤一郎著『現代社会学説研究』（刀江書院、昭和三年五月）において、著者はアルフレッド・フィアカントについてふれた折、「社会学は其名親たるコントの『社会物理学』は云ふに及ばず、スペンサーの体系以来、徒に膨大なる領域の学問とせられて居る」とのべている。

『大思想エンサイクロペディア 13 社会学』（春秋社、昭和三年五月）に、赤坂静也の「仏蘭西社会学」が収められているが、この中にコントについての言及がある。

オーギュスト・コントは実証哲学を建設し、最後の科学に社会学と命名した。即ち数学・天文学・物理学・化学・生物学（心理学を含む）の方法に歴史的方法を加へて居る。

オーギュスト・コント著『実証哲学（上巻）』（春秋社、昭和三年十一月）は、前年配本になったオーギュスト・コントの『実証哲学講座』(Eti

Rigolage が抜粋した *Philosophie Positive* 四巻中の前部二巻の) 全訳である。この訳本は、コントがその百科全書の排列法によって、数学・天文学・

物理学・化学・生物学まで総合したものであり（全四十五章）、巻尾にオーギュスト・コント論（人物、性癖、思想に関するもの）がついている。本書はわが国の重要なコント文献の一つといえる。

木下一雄著『現代哲学要論』（培風館、昭和四年三月）の「第一 実証主義」は、フランスにおけるコントの継承者にふれている。

仏国に於てはコムトの実証主義の科学的方面から エミール・リトレーとイツボリト・テーヌとが何れもミルとその説を同じくして居る。リトレーはコムトの継承者として 実証主義の理論的方面を發展し、テーヌはコムト及びミルの影響を受け、認識の起源を以て感覚的経験にありとし、物質も精神も自然の法則に決定されると説いて居る。

銅直勇著『純正社会学概論』（玉川学園出版部、昭和四年三月）の「第一章 社会学の学的成立及び其発達」に、コント以前の社会学的研究、コントやスペンサーの社会学についての言及がみられる。

彼（コント）の実証哲学及社会学に就いて 社会史上注意すべき諸点を考へるに、先づ第一にそれが綜合を主とすることである。頗るに種々なる知識部門を一の統一ある体系に組織せんとすることは、既に彼の百科全書学者の企てた所であつて、サン・シモンも亦これを唱道した。コムトはこの思想を發展せしめ、その実証哲学の任務は個々の実証的科学と異り、現象の一般性を研究することを以てその目的とし、社会学は實にこれ等諸科学の最終最高の学として、一切の社会現象をその總体に於て、又その相互の關係において研究する學問であると考へたのである。

新明正道著『校哲学叢書 社会学』（岩波書店、昭和四年六月）の「第一章 社会学体系論 四 コント」に、コントについての短章がみられる。

社会学の体系を初めて提供し『社会学』の名称をも創成したのは、實にコントであつた。彼はその組織の完成と術語の完成によって 当然社会学の父たるべきものである。

コントの社会学は 之を包容する実証哲学 (Philosophie positive) を背景としてゐるものである。彼は、人間精神の進歩の過程において、人知の發展

に、神学的、形而上学的、及び科学的の三つの段階を区別する。

社会学の学としての陣形を完成したのは、コントとスペンサーであった。彼等の創造的な組織によって 初めて真の社会学の歴史は始まるのである。

下地寛令著『社会学概論』（良書普及会、昭和四年七月）の「第一章 総論 第二節 社会学」に、コントの社会学についての短章があり、著者は社会学の体系の樹立者としてのコント、人間精神の発展における「三段階の法則」、コントの実証哲学などにふれている。

彼の社会学は実証的——科学的（自然科学的）取扱ひをなすを以て特色とする事勿論である。社会現象をかくの如く自然現象として自然科学的に取扱った所に、彼が社会物理学と呼んだ理由がある。

コントの社会学体系は 全社会現象を総合的に取扱ひ 其静的秩序関係と動的進化過程との二大部門を有する。其故に之を歴史哲学的綜合社会学と呼ぶ。

関栄吉著『文化社会学概論』（東京堂、昭和四年十月）の「第一章 文化社会学序論」に、コントにふれた個所がある。

近世欧州の社会学は、仏のコムトに始まる。英のスペンサーもコムトに其の源をおく。

川辺喜三郎著『社会学概論』（広文堂、昭和四年十一月）の「第三章 社会学の発達 第二節 コント」は、コントの学問体系に関する短章である。

社会生活の考究を、初めて一個独立の科学として 体系的に取扱った者は 仏蘭西のオーギュスト・コントである。

コントは、学の対象を分類配列することに大いに力を用ひ、分類それ自体が彼の科学体系の重要な部分を為して居たから、彼の社会学を分類社会学と呼ぶ人もある。

フランス学会編『^{フランス}の社会科学——現代に於ける諸傾向』（刀江書院、昭和五年二月）に、田辺壽利の「フランス現代社会学」の一章が収録されているが、この中にコントの社会学についての言及がある。

新フランスは、革命前思想の代表者モンテスキューの理論の根本点に帰らざるに至った。この要求に応じて社会理論を組織的に論述した者は、オーギュスト・コントである。

事実に於いて、コントは実証的精神即ち科学的精神を社会学の領域に注入し、此点に於いてフランス現代社会学を決定的に支配させた。

貫伝松著『社会学要論』（法曹閣書院、昭和五年二月）の「第一章 本質論 第一節 序論」に、コントのことが出てくる。

十九世紀フランスに於いて 二つの新科学が相前後して出現した。其一は生物学にして他は社会学であった。社会学は創めてオーガスト・コント（Auguste Comte）に因て引用せられた言葉であった。

伊藤吉之助編輯『岩波哲学小辞典 増訂版』（岩波書店、昭和五年三月）に、「コント、イシドール・オーギュスト・マリー・フランソア・ザビエール 一七九八—一八五七。フランスの哲学者、数学者で社会学の創始者」（七九頁）とある。

赤神良讓著『社会学入門』（^{ていしやう}丁酉出版社、昭和五年三月）の「第一章 社会学とはどんな科学であるか 九 コントの社会学を手短に解説したものである。

コムトは社会学とは社会現象の裡に存する一般的理法を探究する所の抽象科学であり、そしてその理法には秩序の理法と進歩の理法とがあつて、社会改善の運動に於ける指導原理であると、考へてゐたのであります。

だから吾々は先づ社会現象とは何であるか、一般的理法とは何であるか、抽象科学とは何であるかといふことを考へることによって、社会学の概念を

掴まねばならぬのであります。

帆足理一郎著『西洋哲学史』（早稲田大学出版部、昭和五年十月）の「第十八章 ヘーゲル哲学への反動 第三節 形而上学への反逆とコムトの実証哲学」に、社会改造と学術、知識の進化、諸科学の分類、人道教などについての記述がみられる。さいこの「人道教」については、つぎのようにある。

孤独なコムトは後年、或る女性に対するダンテの如き純真な恋慕から、哲学上にも大きな影響を受け、彼の「実証政道」において、人道教を立て、その宣伝に努力した。（中略）人類こそ正当な礼拝の対象、それは宇宙を理解する鍵であり、感情の論理は思惟の論理に先立つと見、人道を崇拜する倫理的宗教を提唱した。

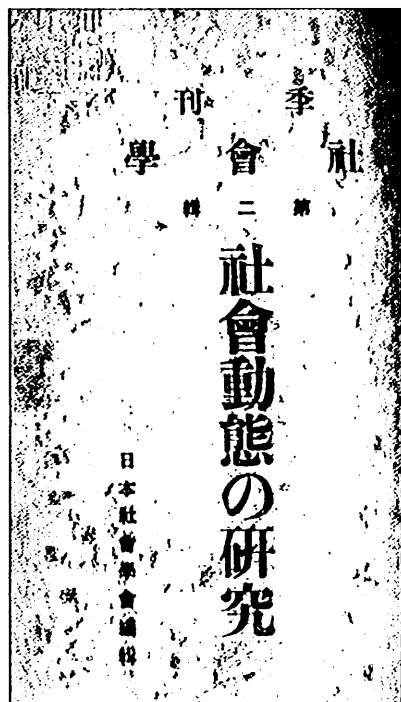
大島正徳著『現代哲学概観』（至文堂、昭和六年一月）の「フランスの現代哲学」に、コムトについての短い記事がみられる。

科学の力を過信した哲学者、オーギュスト・コムトより、ルナン、テイヌにいたるまでの哲学思想を、フランスの現代哲学の序曲と考えたい。

コムトの哲学は、実証哲学若くは実証論と呼ばれる。しかし、彼れの哲学体系の内容は、既成科学を、抽象的なものより具体的なものへと一種の等級づけをなしたものであり、新しい要素としては社会学が見出されるだけであって、実際に於ては、科学を離れて、彼の哲学はないといへる。

浅野研真訳『社会学概論』（白鳳社、昭和六年四月）は、フランスの哲学者マルセル・デアの論著（原題不詳）を反訳したものである。

一八三〇年代に、フランスの哲人オーギュスト・コムトによって創められた社会学なる一箇の学問は、満一世紀を経て、今や世界の文明諸国の何処に於ても、凡ゆる学園に於て、そのための講座をさへ確保するに至った（「訳序」）。



季刊雑誌『社会学』の表紙。

コントは彼の凡ての同時代人と同じやうに、大革命以来フランスで互に論じ合はれた所の社会的諸困難に襲はれた。その故にこそ、彼は何よりも先づ鞏固な秩序を再建設することを欲した。そして其のために、思想及び信仰の体系を再組織せんと欲した。と云ふのは、特に知識上の無政府が災禍をなしてゐたからである。

田辺壽利著『フランス社会学史研究』（刀江書院、昭和六年十月）の「第一篇 バスカルと社会学」に、「コントの三状態の法則」と「コントの転換」を、「第三篇 フランス現代社会学」には、「コントの社会学」を収めている。内容の一部は、前年にフランス学会編で刊行された『フランスの社会学——現代に於ける諸傾向』（刀江書院、昭和五年二月）とおなじである。コントにおける「実証的」という語について、著者はつぎのような説明をあたえている。

コントは常に実証的といふ語を科学的といふ語と同一視し、屢々この二語を連結して用ひてゐる。かくて我々は、コントが科学に対して、如何なる特性を賦与してゐたかを知り得る。

日本社会学会編輯『季刊社会学 第二輯 社会動態の研究』（天地書房、昭和六年十月）に、「コントの社会論理学」（新明正道）と「コントに於ける予見」（清水幾太郎）が収録されている。前者の新明論文においては、コント社会学の地位やコント社会学の諸問題について論じられている。

コントは社会学の始源と考へられている。それは社会学の出発点として本質的な何物を有していると見られている。

我等はコントが新しき問題たり得ることを認識した。我等は、今彼にお

ける社会論理学的問題を検討するとともに、之を根拠づける彼の一般的立場とその歴史性を解明しなければならぬ。

後者の清水論文においては、コントの有名な「予見せんがために見る」といった命題の、予見の手続について論じられている。

コントに於いては、合理的予見は一方歴史的方法に基いて行はれると共に、他方又人間性の理論に依って検証されねばならない。

得能文、高階順治共著『高等教育 哲学概論』（東洋図書株式会社、昭和七年二月）の「第六章 社会 第八十六節 社会学の問題」に、「社会学」の創設者としてのコント、綜合社会学説を主張したコントのことが出てくる。

社会学は一言にして社会現象たる人間の共同生活一般に関する理論であると云へるが、その内容に就いては色々の学説がある。先づ社会学を以て社会の綜合的一般科学なりとし、社会現象の渾一的全体的研究をその任務とする学説がある。コント、スペンサー、マルクス等は、この種の社会学を主張し、社会学は人種全体に就いて、その一切の社会現象、凡ての文化活動を全体的包括的に研究するものなりとする。

松本潤一郎編『社会学と^{学説}』（浅野書店、昭和七年三月）に、コントにすこしふれた文章がみられる。

又、社会がその固有の性質、転来した支配的特質を持つことに依って、直接的に攻究さる可きものであると云ふ事にも異議は無いのである。それはコント A. Comte が既に打ち立てたものであり……

田辺壽利、古野清人共編『社会学 第一号』（森山書店、昭和七年四月）に掲載された米田庄太郎の論文「現代社会学の諸方針」に、コントの名が出てくる。

社会学は大体上第十九世紀の初期に生まれたものと、認めらる可きであると思ふ。要するに吾人は、サン・シモンが社会生理学と云ふ名称に於て、又コントが始めは社会物理学と云ふ名称、後には彼が千八百三十五年から千八百三十九年に至る間に思ひ附いたと推察される新造語社会学ソシオロジーと云ふ名称に於て、新たに一の独立たる学問として建設せんと企てたものが、大体上最初の社会学と見做し得られると思ふ。

社会思想社編『改訂社会科学大辞典』(改造社、昭和七年四月)に、コントについての項目がある。かれの社会学の特徴を評して――

彼(コント)の社会学は世界的な哲学組織の一部を成すべきであつた。彼の社会学の組織の特徴は、その極端に綜合的であることであつて、彼は分科的な社会学の成立を全く否定した(新明正道)。

清水幾太郎の「コントに於ける三段階の法則」(社会学研究会編『文化社会学研究叢書 Ⅲ』所収、同文館、昭和七年六月)は、コントの社会学、かれの全実証哲学の土台もしくは枢軸をなす「三段階の法則」についての理論的研究である。コントの社会学と不可離の関係にある三段階の法則に深いメスを入れたのが本稿である(二四五―三〇二頁)。

守田貞記著『社会学ト音楽トノ交渉 全』(皇道館川崎政治学院、昭和七年十月)の「序論」に、コントのことが出てくる。

(ウキッセンシャフト)学問としての社会学が(アウグスト、コムト)に由りて発言せられて以来、なほ尚今日形こそ変れ(アウフアルレエ ウンドメーレーレエ アフタイルング)種々の形に於て 此の学問の研究は行はれて居る

大島豊著『現代哲学史』(第一書房、昭和八年四月)の「第二講 現代フランス哲学の主潮 二 社会哲学と実証論との関係」に、サン・シモンとコントとのかかわり、コントの有名な三段階の法則、諸科学の分類、人道教についての記述がみられる。

社会主義と実証論とは、其起原そのおきげんに於て密接な関係をもつてゐる。我々は既に、如何にサン・シモンが社会改革の精神に鼓吹こすいされて、人間社会を改造し

ようと欲したかを知った。此の願望をオウギュスト・コントが、サン・シモンから分け与へられた。

大島操の「実証主義と弁証法的唯物論——コントの認識論或ひは知識社会学について」(『唯物論研究』第八号所収、昭和八年六月)は、コント哲学の根本思想の概要を語ったのち、かれの知識論を弁証法的唯物論のたちばから論究したものである。

桑本厳翼著『現代哲学思潮』(改造社出版、昭和八年八月)の「第一編 科学的哲学 第一章 第二節 実証哲学」に、コントの実証哲学、三段階の法則、諸科学の分類のことが出てくる。コントは実証的精神にもとづいて実証哲学を説いたのであるが、かれの「主なる功績は此精神を以て社会現象に関する理論的研究を試みた所にある」という。体系の微細な部分に関しては、勿論錯誤^{きご}欠点が多いけれども、今日の社会科学の一般的基础を固め、社会学なるものを世に生み出した功績は永遠不滅である、という。

貫伝松著『社会学より経済学へ』(新星堂、昭和八年九月)の「第二編 観念論的社会学の発展 第一章 コントの社会学」に、社会学の鼻祖としてのコント、実証哲学の一部であったコントの社会学のこと、三段階の法則、科学の分類法、社会静学と社会動学などについて論じられている。

コントの社会学は如何なるものを以て、社会学であると考えているかと言へば、社会を研究するには、それを不分割的に、即ち、有機的に観察し、且つ、合理的見地に立つて、その錯雑せる事象を考察しようとするのである。

それがためには、社会科学の必要性を感じ、社会の自然的動因及び自然的法則を発見せんとするのである。

川辺喜三郎著『社会学序論 教材 第一篇』(敬文堂書店、昭和八年十月)の「第二章 社会学の発達 第二節 オギスト・コント」には、コント小伝、実証哲学、社会静学・動学について記されている。「実証哲学」といったことばの創始者については、

元来サン・シモンが作ったものであったが、コントは師の用語と精神とを受け継いで、更にこれを独自の立場から体系づいたのであった。

と語っている。またかれの社会学を評して、

コントの社会学観念は、まだ粗雑^{そざつ}ではあったが、其の根本精神と大体的方針に於ては精確であり、今から約百年前に初めて世に向てなされた提言としては、驚くべく進歩的なものであった。

松本潤一郎著『社会学要綱』（時潮社、昭和九年五月）の「五 余論」に、サン・シモンとコント、コントの学説についての記述がある。著者は、コントが社会学を創始した理由について、つぎのように語っている。

コントは、第十九世紀初めの混沌たる社会状態のフランスを再建することに熱意を持ち、社会再興の指導概念を得んがために、科学的社会研究としての社会学を創始したのであった。

佐久間一雄の「心理学史上に於けるコントの地位——骨相学から社会学へ」（『唯物論研究』第一九号所収、昭和九年五月）は、従来あまり知られていなかった心理学者としてのコントや、かれの学説全体の反動的・機械的な傾向が、かれの心理学説にじゅうぶん反映していることを明らかにしたものである。

小山文太郎著『社会学座談』（章華社、昭和九年六月）の「二〇 社会学といふもの」に、社会学の発生、コントの社会学などについての叙述がみられる。コントは学問をどのように見ていたのか。著者によると、コントは学問の目的は、あくまで人間の生活に役にたつことでなくてはならぬといっていたという。コントは社会改造の原理の確立に大きな関心があったのであるが、その原理は、空想的な、思弁的な樹立ではなく、社会的、歴史的現実そのものをよく観察し、その根柢にある法則と力を把握してはじめて確立されるものであった。

つまり事実をはあくして法則を引きだすことであった。

コントは学問を人間の為に役にたつやうにしなければならず、理想社会をつくる為の学問が社会学であって（中略）総合的な社会現象の見方をしてあ

るのであります。

難波紋吉著『社会学要義』（弘文堂書房、昭和九年六月）の「第二章 コントとスペンサー 第一節 コントの社会学」に、コントの社会学研究の意図、実証主義、科学体統論、社会理論などに関する記述がみられる。

彼（コント）は社会の研究に学問的体系を与へ、且つそれに「社会学」といふ学問的名称を附した最初の人である。

コントが常に学問研究の目的としてあつたところは、社会改造に於て真に依拠し得るに足る科学的根拠を求めることであつた。

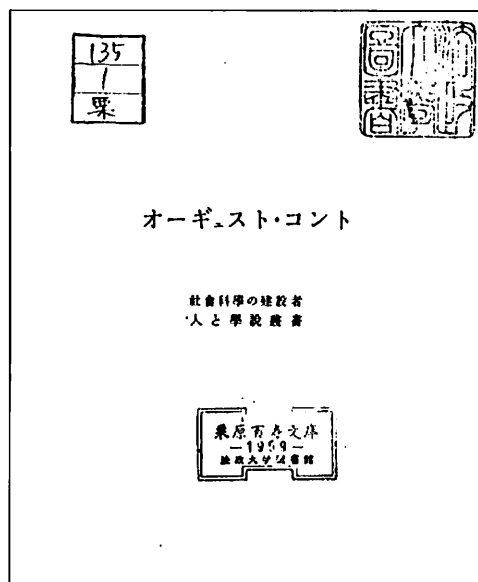
本田喜代治の「コントの『人間教』——ブウウルヂョワ宗教の一典型としての人間学」（『唯物論研究』第二二号所収、昭和九年八月）は、伏字の多い論文である。著者は本稿において何をいうつもりであつたのか、論旨は必ずしも明解ではない。コントにとっての人間学は、かれの心理学でもあつた。そして人間教は、神秘的から宗教的へ、一つの宗教から他の宗教への人間進化を教えるものであつた。

円谷弘著『集団社会学原理』（同文館、昭和九年九月）に、コントの名が散見する。

社会の変革後の学事事象としては、必然的に社会学が要求せられる。之を歴史的事象に見るに、かの仏蘭西大革命後に於て コントが社会学の創始者として出現した如く、また露西亜革命後に於てマルクスが社会学者として呼び起された如きである。

コントの学統につらなる邦人として建部遯吾をあげ、

その後を継げる建部教授はコント学説を基本として、其処に建部社会学体系の構成を見たが、其の位置はコントの像を渡来せしめたこと、日本社会学樹立への努力をはらはれたことにある。



新明正道著『オーギュスト・コント』。
〔法政大学附属図書館蔵〕

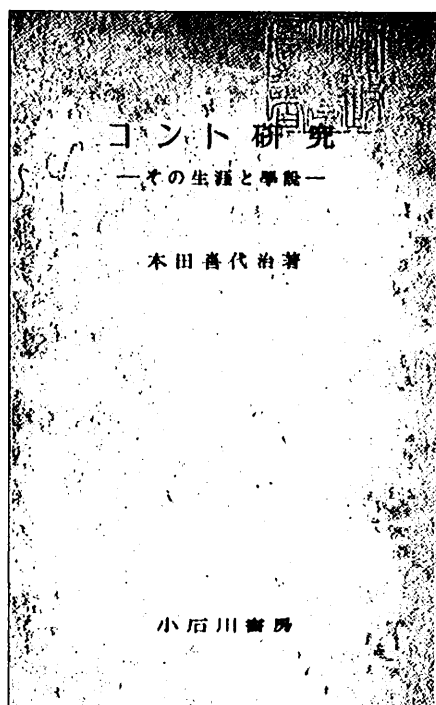
新明正道著『オーギュスト・コント』（三省堂、昭和十年五月）は、三省堂の「社会科学の建設者 人と学説叢書」のうちの一冊である。著者の見るところ、コントは単なる社会学者ではなかった。コントは道德家、宗教家、政治家でもあった。本書において、著者はコントの思想を各領域にわたって総観しようとした。内容は――、

- 序章 コントの時代
- 第一章 コントの生涯
- 第二章 コントの学説
- 第三章 コントの学説の批判

である。著者は、社会学においては、有機体説、人類の観念、社会静学と動学、実証哲学においては、三段階の法則、科学の階続、実証道德、実証宗教においては、人類教の教義と制度、実証政治においては、理想社会の企図、およそコントの思想において問題となりうるものには一応ふれたという（「緒言」）。

清水幾太郎著『社会と個人——社会学成立史「上巻」』（刀江書院、昭和十年五月）の「第一章 社会学成立に関する諸見解」に、コントの名が散見する。

コントは社会学なる名称を作り 且つ最初に体系を提出したものであると言える。若しも社会学なる言葉を文字通りに考へれば 一般に社会に関する学問といふことになる。けれどもコントに於いては 唯かかる一般的な規定が含まれてゐるのではなくして 実際は社会の自然科学的研究としての社会物理学の謂に外ならない。



本多喜代治著『コント研究 - その生涯と学説』。
〔法政大学付属図書館蔵〕

山田吉彦訳『未開社会の思惟』（小山書店、昭和十年七月）は、レヴィ・ブリュールの著述 *Les Fonctions mentales dans les Sociétés inférieures* を反訳したものである。「緒論 二 オーギュスト・コント」において、著者はつぎのように語っている。

コントは或る意味では 心的機能の実証科学の唱道者であり、このことを率先認め、そしてこれは社会的な一科学であると立証した功績は、彼に大半認むべきであらうが、しかし彼はこの科学の要求する諸々の事実研究を企てなかった。

阿閉吉男、那須宗一共訳『ハンス・フライヤア社会学』（雄風館書房、昭和十年八月）に、「第二節 英仏社会学 オーギュスト・コント」と題する短章があり、コントの実証社会学にふれている。

社会学は先づ混乱と恣意との精神を 認識の精神に依って克服し、社会構成の確固たる規範を基礎付けるであらう。

本多喜代治著『コント研究 その生涯と学説』（芝書店、昭和十年十月）は、「過去数年間に亙るわたしのコント研究の一応の総決算であって」と、「序」のなかでのべている。日本大学社会学科の機関誌『社会学徒』（第七巻第六号、昭和八年六月）から連載をはじめ、同誌第七巻十二号、昭和八年十二月）をもって完結した。が、その後、大体的に手をくわえ、面目を一新して一書としたものである。同書について馬場明男は「現在のわが国ではコントに関するもので高い水準に置かれてよいものであらう」と、その価値を高く評価している。

ちなみに哲学者の三木清は、同書を所持していた（法政大学附属図書館「三木文庫」蔵）。同書は三九三頁もある大著である。内容を大別すれば――

序

第一部 生涯と労作

第二部 学説と傾向

附録

- 一 オオギュスト・コント その時代及びその思想……レザ・ブリウル
- 二 文献

川辺喜三郎著『社会学綱要』（敬文堂書店、昭和十一年五月）の「第二節 社会学の発生」は、社会学の始祖コントの業績の要点を瞥見したものである。

コントは原来自然科学者であり、数学と天文学とが専門であったが、早くから深い社会科学的興味をもち、社会問題の研究を従来の思弁哲学的方法から離れ、自然科学的実証法に依りて正確に解釈し得べき必然法則の発見を企て、そして此の研究を最初社会物理学と名付け、後に社会学と命名した。

このあと人間知識の発達の三段階、実証哲学、社会理論にふれている。

雑誌『思想 特輯 フランス哲学』（岩波書店、昭和十一年十二月）に、田辺壽利の「フランスに於ける哲学と社会学との交渉」が収録されている。これはフランス哲学とフランス社会学との相互的交渉を、過去および現在の両方面にわたって吟味する意図をもって執筆したものである（「附言」）。

コントによつてはじめて組織化され体系づけられたフランス社会学は、畢竟するにカルテジアニズムすなわち合理主義哲学の所産である。なぜならコント社会学は、一方に於いてアンシクロペディストの科学的精神、他方に於いてモンテスキュ及びコンドルセの社会研究を仮定するものであるが……

清水幾太郎の「コントに於ける歴史的方法に就いて」（『歴史』二月号所収、白揚社、昭和十二年二月）は、コント流の社会学の有効な研究方法——事物の観察と実験と比較について語った論文のようだ。これは論点が複雑に入りまじっていて、わかりにくい論文である。

セレストン・ブーグレ著
河合正道、河合弘道共訳

『価値社会学』（三笠書房、昭和十二年六月）は、「訳者序」においてコントにふれている。

実にコントによる社会学の生誕は、フランス革命後の混沌たる思想的無秩序状態に一定の道德的秩序を与へ、人種社会の帰趨を啓示し、以って之を救済せんとした偉大なる聖業ではなかったか。

時野谷常三郎著『日本新文化史 明治時代 12』（内外書籍株式会社、昭和十七年二月）の「第八章 學術の進展 第二節 精神科学」に、コントへの言及がある。

フランソア・ピール・ギゾーは仏国の政治家であり、歴史家であり、コムトの実証主義哲学の影響を強く受けて実証主義的歴史理論を樹て、歴史の推移を具体的に個々の事実の帰納的方法に依って研究するといふ態度をとった。

宮島真一著『西洋哲学史綱要』（文進堂、昭和十七年六月）は、西洋哲学の歴史を概観したものである。同書の「第十章 第十九世紀の哲学 第一節 フランス哲学」に、社会学の創始者としてのコント、人道教（人類教ともいう）についての記事がみられる。

コムト フランスの哲学者 数学者にして社会学の創始者、モンペリエに生まる。一八一六年以後パリに在り、一八二〇年サンシモンと識り、思想的感化を受く。

人道教は最初コムトの熱心に動かされて、イギリス、フランスに多少の信者を得たが、遂にさしたる勢力を得るに至るに至らなかった。

松本潤一郎著『社会理論』（日光書院、昭和十七年十二月）の「前篇 社会学思潮 一 学祖コント」において、著者はコントの哲学思想の概

要をかなりくわしく伝えている（三三三頁）。

コントの思想はフランス革命の動乱中から生れた社会主義思想と、旧制度に根ざす反動的な法王至上主義の潮流の影響を受けて発展したと見ることが出来るであろう。（中略）コントは哲学をもって、個々の科学の研究成果を高い統一見地において綜合する精神活動であるとみなした。

河合弘道著『日本社会学原理』（昭森社、昭和十八年一月）に、コントの名が散見する。が、社会学の命名者コントについては、――

社会学の祖といはれたオーギュスト・コントは、彼の学自体の新生性のために、初めは社会物理学といふ名辭を創案したが、後にはラテン語とギリシヤ語すなわちソシュウスとロゴスを竹木式に接合して、ソシオロジーといふ新しい名稱を構造している。これが初めて日本に輸入された場合にも、それが日本に於いて未だなかったといふことのために種々なる翻譯上の工夫がなされた筈である。

たとへば、交際学、世態学などが、一度は用ひられ、遂に今日のやうに社会学といふ名辭が一般的となったのである。

と語っている。

桑本敬翼著『明治の哲学界』（中央公論社、昭和十八年三月）の「二 西周の哲学」は、西周のコント学習にふれている。

当時此国（オランダ――引用者）に於て盛名のあつたオプゾーメルを通して、仏蘭西のコントや英吉利のベンサム、ミル等の哲学説に私淑した。

コントの生理学を叙述したる『生性発達』……

一方に学の統一を図り、他方には之によつて社会をも統一せんとする所に、コントの実証哲学に於て期する所を示して居る。

佐藤慶二著『西洋近世哲学史――カントより現代まで』（実業之日本社、昭和十八年七月）の「第十一章 実証主義と新カント学派 第一節 フランスの実証主義――コント」において、著者はコントの歴史的地位、その生涯、コントの認識論（三段階）、コントの社会学、コントの哲学

批評などについて論じている。

オーギュスト・コントは形而上学に敵対する実証主義、即ち一種の根本的経験論、一面的な経験哲学、を樹立した。

コントはフランスに於いて力強い味方を発見し、然もまたスウェーデン、ブラジル、アルゼンチン、チリ等の外国に於いても実証主義協会が結成された。最近人々がフランスの旧教党内に於いてさへもコントに復帰して居るといふことは、権威及び教権制を彼が高く評価して居ることから説明される。

新明正道編『社会学辞典』（河出書房、昭和十九年八月）の「社会学」の項目に、コントがみられる。

社会学は十九世紀の前半コントやスベンサーによつてはじめて学問的体系として形成されたものであり、その最初の体系は社会に関するすべての事象を全体的に認識しようとする点で所謂総合的社会的な特徴を有していた……

藤平武雄著『近代哲学史』〔改訂増補版〕（二見書房、昭和二十一年十一月）の「第二篇 カント及びカント以後の哲学 第六章 コントと実証論」に、フランス革命後の実証主義の代表者としてコントが取りあげられている。サン・シモンとコントのこと、人間の知識の三段階の発達、社会学の創唱者コントなどについてのべられている。

コントの本来的目的は 人間社会全体の改革であつた。そして、此の目的達成のために 彼は一切の生活活動を支配する普遍妥当の原理を要求した。社会学Sociologieと云ふ言葉は コントの自製にかゝるものであつた。その意味からすれば、所謂社会学の創唱者はコントである。

田辺壽利著『コントの実証哲学』（野村書店、昭和二十二年七月）は、岩波書店の「大思想文庫」の一冊として刊行された旧版『コント実証哲学』（昭和十年九月）の改訂増補版である。旧版における行文および字句に相当修正をくわえ、固有名詞の誤読を正したという（「はしがき」）。

佐藤慶二著『文化社会学』（霞書房、昭和二十二年七月）の「一 文化社会学と知識社会学 一 イデオの態度とイデオロギイの態度」に、コ

ントの社会学の特徴にふれた文章がある。

コントの社会学の本来の領域は知識社会学であったと後に書かれた。けれどもそれと同時にコントの社会学は単に知識にばかりではなく、社会の一切の現象に指向する実証的科学であった。

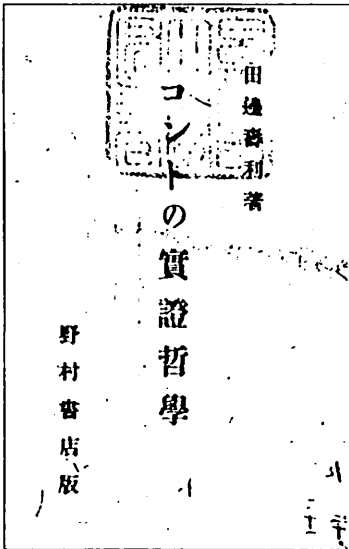
豊川昇著『哲学者覚書』（鳳文書林、昭和二十二年七月）に「オーギュスト・コント秘話——カロリーヌとクロティールド」の一章があり、このなかで著者は、コントの学問的偉業のうらにあった不幸な結婚と痛ましい恋愛について語っている。

彼（コント）は、遂に神の代りに人類を崇拜し 人類の表現として女人を礼拝するに至ったのである（中略）。「人道教」の祭壇に祀られる「男性の守護神・人道の布教者」としての女人は、聖クロティールドその人のアイデアにはかならなかったのである。

日本社会学会編『社会学研究（第二輯）』（高山書店、昭和二十二年十二月）の「論説 社会学と社会学主義」（尾高邦雄）に、コントの名が散見する。

学史は我々の科学に すぐなくとも三つの繁榮の時期があったことを教えている。
（中略）社会学が社会改造の理論として華々しく登場したコントやスペンサーの時代はその第一の場合であり……

松本潤一郎著『全訂 現代社会学説研究』（乾元社、昭和二十三年四月）は、昭和三年（一九二八）刊行の全訂新版である。同書の「第二部 傾向 三 仏蘭西社会学の現況」に、コントのことが出てくる。



田邊壽利著『コントの実証哲学』。

「社会学は仏蘭西の科学である」とは、社会学の祖オーギュスト・コントを生んだ仏蘭西の誇りとする言葉である。

コントは社会学を樹立するに当って、「予見し行動せんがために識らんとす」といふ標語を使用したのであるが、この言葉は仏蘭西社会学の一つの特質を雄弁に表徴するものである。

戸田武雄著『マックス・ウェーバー批判』（鱗書房、昭和二十三年五月）の「二 ウェーバーを繞る社会学史」に、社会学の父コントのことがすこし出てくる。またイギリスにおけるコント哲学の継承者にもふれている。

コントのソジオロジーなる言葉は英国に渡って、其處でジョン・スチュアート・ミルとハーバート・スペンサーとによって一般化された。

赤神良護著『環境社会学』（竹井出版株式会社、昭和二十三年六月）の「第一章 環境社会学の概念」に、「環境」という語の生みの親としてコントのことが出てくる。

「環境」(Milieu, Environment)とは、「周囲の全影響」を意味するものであり、オーギュスト・コムトによって創作された術語である。

平井新著『近代社会思想史』（慶友社、昭和二十三年六月）の「総論 社会主義発展の論理」に、コントの三段階の法則についての短章がある。

人類精神の全般的発展を極めて明快に捉えているものは、オーギュスト・コントの「三段階の法則」である。

帆足理一郎著『哲学概論』（野口書店、昭和二十三年十一月）の「社会学 第二節 社会学的研究の発達」に、コントの名が散見する。

社会学なる名称も概念も、十九世紀の半ば、フランスの碩学コムトによって創始されたものであるが、その論件は古代から哲学者達の注意を払ってい

た処である。

斎藤道太郎編『社会科学事典 第四卷』（平凡社、昭和二十四年二月）の「シャカイ 社会」の項目に、コントの実証主義的社会概念についての説明がある。

コントの実証主義に基づく社会概念について。オウギュスト・コント 実証主義に基いて社会に関する独自の学問を建設し、之を「社会学」Sociologie と命名し、斯学の力によってフランスの相統く革命によるフランス社会の混乱と非常時局の危機を救護し、社会の再組織を念願した。

細野武男著『社会学の反省——第三の社会理論・社会学』（法律文化社、昭和二十四年三月）に、「II コントの綜合社会学」に関する評論がある（四五―七四頁）。著者はこのなかでコント略伝、進歩の理論、三段階の法則、科学分類法、コントの科学評判その他について論じている。コントは思想的にテュルゴーやコンドルセに示唆をうけたのであるが、「他の歴史上名を残せる思想家とおなじく、歴史の子である」という。

尾高邦雄著『社会学の本質と課題 上巻』（有斐閣、昭和二十四年四月）の「第二章 社会学史の三段階 第一節 社会学の起源決定の問題 三 学祖コント」において、著者はコントを社会学史の起点とする理由を三つかかけている。まず――

ところで通説に従えば、社会学はオウギュスト・コントにはじまる。そこでわれわれの社会学史もまたコントから、あるいはすくなくともコントの時代からはじめられなければならない。

といったのち、その理由をつぎの三点にみいだした。第一の理由——コントが社会学の命名者であったこと。第二の理由——コントが“社会学”と呼ばれる学問の最初の組織者であったこと。第三の理由——コントが市民社会の理論を経験科学的に、すなわち実証的に構成し、あるいはすくなくとも構成しようとした十九世紀の学者、思想家のなかで最初のひとりであったことである。

土屋文吾訳
コント著 『社会の再組織について』（創元社、昭和二十四年四月）は、コントの初期の論文二篇――

社会再組織に必要な科学的作業案

一 序論

二 概説

第一部

科学及び科学者に関する哲学的考察

を反訳したものである。第一論文の再組織論（一八三二年五月執筆）は未刊におわり、第二論文は第一の論文と類似点があるが、コントの思想の一層の発展がみられるものという（訳者序）。

本田喜代治著『コント研究——その生涯と学説』（小石川書房、昭和二十四年五月）は、おなじ書名の旧版（芝書店、昭和十年十月）の装を新にした再刊である。再刊についての山崎正一による書評が、雑誌『理論』第十号（日本評論社、昭和二十四年十月）にのっている。

南博著『社会心理学 社会行動の基礎理論』（光文社、昭和二十四年十二月）の「序論 第一章 社会心理学の成立 フランス社会学」に、コントのことが出てくる。

社会心理学の第二の源は、コムト以来のフランス社会学である。コムトは、一八三〇年—四二年にかけて発表した「実証哲学講義」を中心に、当時さかんであった内省心理学に極力反対し、その意味で心理学を諸科学の系列から排外した。しかし彼は心理過程が一部は生物学により、一部は社会学によって研究されることを強調した点で、生理的心理学と社会心理学とをおぼろげながら予想したといえる。

泉 靖一著『社会学講義資料 I 或る山村のモノグラフ』（敬文堂、昭和二十五年四月）の「まえがき」に、コントへの言及がみられる。

社会学の誕生は一般に一八五一年、Auguste Comte が彼の必生の大著「実証政治学体系」の出版を完成した時と見られている。

高田保馬著『社会科学通論』（有斐閣、昭和二十五年六月）の「第一部 社会科学の性質 第一章 社会科学の多義性」に、コントのことが出てくる。

社会科学の理論 いはば社会科学の方法論 methodology of social sciences の輪郭は、オオギュスト・コント及びジョン・スチュアート・ミルによって築き上げられた。

高山峻著『フランス実証主義哲学』（創元社、昭和二十五年九月）の「第二章 実証主義の創始者 オーギュスト・コント」は、コントの実証的、科学的態度、人知発展の三段階、人道教などについて論じている。

オーギュスト・コントは 実証主義の体系の真の創始者である。十九世紀後半以来 現今に至るまで 経験的実証主義の一大思潮の最も特徴ある局面や変遷のすべての深い源泉は 彼のうちにこそ見出される。

新明正道、大道安次郎他編『社会思想史辞典』（創元社、昭和二十五年十月）の「フランス啓蒙思想」（新村猛）に、コントの名が出てくる。

ダランベール、コンドルセ等は 実証主義的学風の創始者であり、殊に後の二者とテュルゴーはコントの社会学樹立に寄与した。

高桑純夫編『近代の思想』（毎日新聞社、昭和二十五年十二月）の「四 フランス コント」に、コントの人と実証哲学についての平易な解説がのっている。

（コントは）ソラが小説で企てたような方法で「社会学」を科学として作り上げようと努力したのです。サン・シモンのみつけた、「神学」「形而上

学」「実証」といふ人類知識の三つの段階、この道順をあとづけることからコントは出発したのです。

速水敬二編『哲学研究提要』（第一出版株式会社、昭和二十六年四月）に、コントについての短い記事がある。

コントの社会学はこの前提から生れた。社会の改革を果し、社会的混乱を救うには 一般的原理を自然科学同様の精密学によって樹てる必要がある。この社会学の建設を、目的とするものが実証哲学である。学問は神学より形而上学、さらに実証科学へ発展する。

そして実証科学のうち社会学は最も複雑な、従って高次の段階である《実証哲学》。コントのこの学説はまさに一九世紀という時代をよく表現せるものと言わねばならない。後年彼は一種の宗教、神なき宗教、人道教を説いた《実証的政治体系》。

申田係一著『フランス思想史——思想の饗宴』（春秋社、昭和二十六年六月）に、「コント」の短章がある。この中で著者はコント小伝、人智進歩の三段階、科学の分類法などについて論じている。著者はコント哲学の欠点の一端をつぎのようにのべている。

コントの哲学は、実証精神としては各方面に現われた気運の統一であるが、前に略述したやうなコント自身の実証哲学は、恐らく著作の上で文学的才能をやや欠いていたことや、用語の上で、その読者が自然科学の知識をある程度持っていないかならなければならないことなどで認められる時期は遅れた。けれどもその影響は、広く考へると実に大きいのである。

篠原助市著『哲学新講 附 東西哲学思想の発展』（宝文館、昭和二十六年六月）の「第六章 社会 第一 社会と社会意識」に、コントの名が散見する。

コントは已に社会は一種の有機体（集合的有機体）であるとした……

コントは実証論の立場から、抽象性と具体性との度に応じて科学の一元的分類を試み……

斎藤由五郎著『哲学史概説』（巖波堂書店、昭和二十六年九月）の「第四章 近世哲学 第三節 一八一—一九世紀の哲学 第三 実証主義の哲学」に、「サン・シモンとコント」と題する短章がある。

コントの師であり、且つ彼の実証哲学に多くの影響を与えた社会主義者サン・シモンこそ 革命後の混沌たるフランスに「社会」を発見し、実証的に社会改革への道を開拓し、コント実証哲学発展への契機をなした。

出隆、柳田謙十郎他編『哲学入門辞典』（岩崎書店、昭和二十七年三月）に、社会学の命名者コント、人間の共同社会の全体を包括的に研究しようとしたコントが出てくる。

かかる総合社会学の代表者としては コントとスペンサーを挙げることが出来るが、現在ではこの典型を支持するものは皆無である（大道安次郎）。

早瀬利雄の「明治初期における日本社会学前史の研究——社会学者としての西周とコントの実証主義」（『大倉山論集 第一輯』所収、昭和二十七年六月）は、ひじょうにすぐれた論文である。これは――

- 一 序論（本論の目的）
- 二 明治維新と洋学文化受容の態度
- 三 西周のオランダ留学——コント実証主義の輸入
- 四 社会学者としての西周と明治社会学史の段階

などをテーマとして論じたものだが、コント社会学の紹述者第一号としての西の位置は不変なものと思われる。西によるコント社会学の輸入紹介

は、コントの原書に依らず、ジョージ・ヘンリー・ルイスやジョン・スチュワート・ミルのコント論など、英書によっておこなったものであることは贅言を要しない。

彼の遺書目録の中には コント実証主義の英訳書及びミルのコント論や論理学体系、独訳全集、その他の文献が数多く見出される。

と、麻生義輝著『近世日本哲学史』（二二六―二二七頁）を参照している。

高田保馬著『社会学』（有斐閣、昭和二十七年九月）の「第一部 社会学 第一章 社会学の変遷」に、コントのことが出てくる。著者は、コントの社会学を評して、つぎのようにのべている。

コントの社会学は社会を一つの全体として、従って政治、法律、経済、道德などの各方面を包括的に研究する学問である。

馬場明男著『一般教養社会学』（時潮社、昭和二十七年九月）の「第一篇 社会学の成立と発展 第一章 社会学の成立 五 オーギュスト・コントの社会学」に、コントについての短章がある。フランス革命によって根底から破壊されたものは、絶対主義王制であった。それにつづく十数年は社会不安と混乱の時代でもあった。

近代社会学の鼻祖オーギュスト・コントは この不安と混乱の原因を 実証主義的科学学問と精神の欠如に俵たかしていた（「自序」）。

蔵内教太著『社会学概論』（培風館、昭和二十八年六月）の「第四章 日本における社会学の移植 第四節 社会学の移植」において、著者はたびたびコントに言及している。

コントは社会学の始祖と云われ、数学・天文学・物理学・化学・生物学につぐ実証哲学の最後の部門として社会学を樹立した。

西もその思想は極めて経験主義的で、コントの思想の日本への最初の紹介者であった。就中、西は西洋的な科学的・組織的研究を重んじ、コントの科学分類論にしばしば言及している。

鳥井博郎著『明治思想史』（河出書房、昭和二十八年十二月）の「第四章 明治哲学史の概観 第一節 官僚学者の哲学的啓蒙活動」に、西周が登場するが、著者は西とのからみでコントにふれている。

彼（西周）の哲学的思想の淵源はコント、並にミルの実証主義であった。

コントに倣^{なま}って、彼もまた、哲学をもって一切の経験的科学を統一する学であり、「百学の学」であると規定した。この見解は彼の哲学の基礎に横わるものであり、従って、彼の最も強調したところのものである。

ガストン・フートゥール著
古野清人訳『社会学史』（白水社、昭和二十九年七月）は、クセジュ文庫のうちの一冊である。同書の「第一篇 社会学の発生と先駆者 第一章 社会学的諸体系」に、社会学の創設者としてのコント、知的発展の三段階の法則、人類教、コントの弟子とその哲学についての言及がみられる。

オーギュスト・コント（一七九八—一八五七）彼は異論なしに現代社会学の建設者とみなされている。社会学という名は彼が創造した。社会学は明白な研究対象をもつ科学である。総体の中における社会的存在がこれである。コントにとっては、社会はすべての生きた人間とすべての死んだ人間とから成っている。死んだ人間はすべて子孫たちの思考の中に生きている。

串田孫一編『哲学辞典』（河出書房、昭和三十年一月）は、河出文庫のうちの一冊である。この中にコントが出てくる。

コント フランスの哲学者。数学者で社会学の創始者。モンペリエに生まれ、一八一六年以来パリに在り サン・シモンに思想的感化をうけたが、シ

モンが宗教に傾くに及び断交。

開国百年記念文化事業会編集『明治文化史 第四卷 思想・言論編』（洋々社、昭和三十年三月）の「第二章 一八七〇年より一八八〇年に至る」に、西とコントとのかかわりについての行文がみられる。

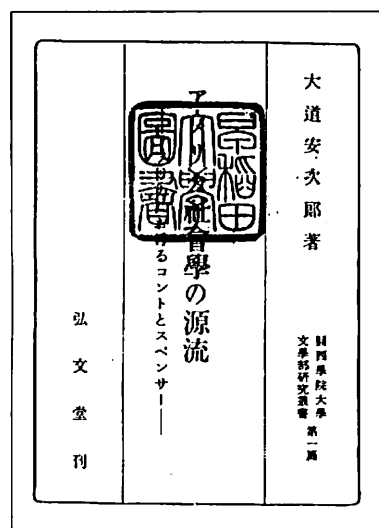
西のコントに対する関係を明瞭に示しているのは、西の最も丹念な研究と云ってよい「生性発達」^{（一八七三）}（明治六年）であるが、この論文はその第一編「源二 浜り宗ヲ開ク」に於ては西洋哲学史の大体を語り、コントの占める位置を論じ、次にその第二編「坤度氏の生体学」^{（コント）}に於ては、その名の示す如くコントの biologie を詳しく紹介し、必竟コント研究と呼ばれるべきものである（筆者は高坂正顕、一一二頁）。

菊池綾子 著『20世紀 アメリカ社会学の展望』（二古堂書店、昭和三十年十一月）の「第一章 社会学の出発（一九〇五年～一九一八年） 第二節 コント及びスペンサーの影響」に、コントがすこし出てくる。

当時の（初期の——引用者）のアメリカの社会学者のうち、少くとも、コント及びスペンサーの著作を通読しなかったものは、まずあるまいと思われる。既にコントは、アメリカ社会学の播監期前、即ち南北戦争以前に、社会学の足がかりをアメリカの土壌に与えており、またスペンサーも内戦後には、グンプロヴィッチ、ラッツェンホーファーと並んで、アメリカ社会学の歴史に強い影響を与えている。

オーギュスト・コントはアメリカのみならず、社会学の父祖として、ひろく一般に認められているが、これは彼が社会の再編に必要な科学を求めようとする企てから実証哲学を究明し、その究明の問題点に「実証主義に基づく社会学」を觀ようと試みたためであろう。

『二橋大学研究年報 社会学研究 一』（勁草書房、昭和三十一年三月）に、古賀英三郎の長編論文「コント社会学の基本構造」（一四七～三〇二頁）が掲載されている。内容は――、



大道安次郎著『アメリカ社会学の源流—アメリカにおけるコントとスペンサー—』。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

まえがき

第一章 社会再組織の企図と社会学の必要、社会学に対する四つの要請。

第二章 コントにおける認識の実証性。法則概念。

第三章 コントの全体的社会認識と社会静態学

第四章 コントの歴史的社会認識と社会動態学

第五章 存在と当為。結論。

である。著者が、この論文を執筆するときの観点としたものは、コントの社会学が、どのような思想的、理論的な構造を有しているかということであった。

『岩波 西洋人名辞典』（岩波書店、昭和三十一年十月）に、コントの項目がある。同人については「フランスの哲学者、実証主義の祖」とあり、以下人と思想について解説をあたえている。

大道安次郎著『アメリカ社会学の源流—アメリカにおけるコントとスペンサー』（弘文堂、昭和三十二年四月）は、著者がアメリカ社会学の成立史を研究し、コントとスペンサーの影響が意外に大きいことに気づき、ひとまずこの問題を取りあげ一書としたものである。内容は左記の通りである。

第一章 主題

第二章 コントのアメリカ流入過程（その一）（その四）

第六章 コントからスペンサーへ—南北戦争以後一八八三年まで

第七章 一八八三年におけるコントとスペンサー

第八章 その後のコントとスペンサー

このように本書は、研究対象をコントとスペンサーに限定し、その影響面からアメリカ社会学の歴史を概括的にながめている。アメリカにおいては、スペンサーよりもコントの方が早く移入されたという。コントはすでに一八三〇年代にアメリカに流入し、一八四〇年代には論評の対象になったことを同書は伝えている。

南北戦争を一つの境として、コントはそれ以前に全盛を誇り、それ以後はスペンサーの時代が到来した。

九鬼周造著『現代フランス哲学講義』（岩波書店、昭和三十二年六月）の「第三章 現代のフランス哲学 諸科学の総合 先駆者 Auguste Comte」において、著者はコントの実証哲学、学問の分類、社会物理学（社会学）、コントの実証精神の意義などについて、広く欧文献を引いて客観的に論じているが、欧文まじりのこの論文はじつに読みづらい。

内田吉雄編『社会学史概論』（勁草書房、昭和三十二年十月）は、七名の執筆者が各章を分担執筆したものだが、「第七節 社会学の起源と成立」に、コントについての短章がある。コントによって命名された社会学は、近代市民社会が危機的な段階になってから、はじめて成立したものであるが、イギリスにおいてその学説をはじめて輸入したのはジョン・スチュアート・ミルであり、社会学の体系化をはかったスペンサーによって一般化したという（「序章」）。

雀部猛利著『社会調査の技法』（ミネルヴァ書房、昭和三十三年五月）の「第二節 社会調査の意義と目的」に、コントのことがすこし出てくる。

元来社会事象の研究は、コントがすでに述べたごとく、予見せんがために見んとする実践的行動に基づいて、その認識が発見したものである……

福武直編『講座 社会学 第九卷 社会学の歴史と方法』（東京大学出版会、昭和三十三年七月）の「第一章 社会学の発展とその系譜 第一節 社会学の発展」に、コント学説の祖型についての言及がみられる。

「社会学」は一八三九年、コントによって名付けられた。だがその実質は「社会物理学」として、すでに一八三二年に締められているし、またかれの三状態の法則の祖型も、すでにフランス革命の経験者であるコンドルセやサン・シモンの学説のなかに見出される。

栗田賢三編『岩波小辞典 哲学』（岩波書店、昭和三十三年十月）に、コントの項目があり、同人については「フランスの実証主義者、社会学の定礎者」とある。

西村勝彦著『現代社会学入門』（誠信書房、昭和三十四年四月）の「I 社会学論 社会学の意義」において、著者はコントやスペンサーの学説が移入されて以来——社会学理論の不整備と混迷状態にふれている。

社会学は、フランスのオーギュスト・コントが実証哲学において、その名称とともににはじめて明確な体系づけをあたえて以来、こんにちまで一世紀以上も経過しており、わが国においても、明治初年にコントやスペンサーの社会学理論が移植されてからかなりの年月を経過している。

それにもかかわらず、社会学の理論内容は必ずしも完全なものに整備されてはいないし、あるいみでいぜんとして混迷状態をつづけているといえよう。

清水幾太郎著『社会学入門』（光文社、昭和三十四年六月）の「第四章 社会学小史 三 オーギュスト・コント 五 コント略伝」に、コントに関する短章が二つみられる。同書は、まだ社会学を正式に勉強したことがない、まったくの素人のために書かれたものである。叙述は平明であり、内容的にもわかりやすい。著者が東京帝大文学部社会学科に入学したのは、昭和三年（一九二八）四月のことだった。いっしょに入学したのは、二十数名。ほとんどが地方の高等学校の出身者であった。

当時の社会学科は、威勢のよい、人気のある学科ではなかったという。それを憶れて入学したのは、著者ぐらいの者であった。入学早々、著者は戸田貞三教授の「開講の辞」によってつまずいたという。戸田の話の要は、つぎのようなものであった。——この社会学科に、ときどき社会を改革して、世の中をよくしようといった考えをもって入ってくる馬鹿な学生がいるが、社会学は社会改革とか世の中の改善などとは何の関係もないから、そんな考えをもつ人間がいたら、サッサと他の学部が学科へ行ってもらいたい、というものであった（「わが人生の断片」）。

講義の方はどうであったのか。講義にも失望した。どの教室の講義もまったく新鮮味がなかったという。西洋の学者の名や学説の解説がおこな

われたが、それも大概知っているものだった。教師がじぶんで身につけた技術（研究方法）を伝えてくれるなら、それは書物からは学べないものだから、かなり事情はちがってくる。そのうちに著者の興味は、正規の授業とは別の方向にむいていった。

「開講の辞」のつまづきから立ちなおれたのは、コントを発見してからである。そのころ、まわりを見渡しても、だれもコントなど勉強していなかった。研究室のコント文献には、厚いちりが積っていた。総合的歴史哲学的社会学の元祖コントをまなぶために、著者はコントの名著『実証哲学講義』六巻を神田の古書街でもとめ、フランス語の勉強もまじめにやるようになった。

著者は、同書において、コント社会学の中心にある三段階の法則、人類の観念、コントの履歴などについて語っている。著者はコントの生涯をや、くわしく知るにつれて大きなショックをうけたという。コントは、人間というものの強さ、人間というものの弱さ、それを真正直に生きた。一方、コントがはじめた社会学の継承者である東大の教師たちは、学者や研究者であるまえに、天皇の権威と結びついた「官僚」であった（一二八頁）。

原佑著『西洋^{近代}哲学史』（勁草書房、昭和三十五年三月）の「V 現代哲学の展望 I 実証主義の系譜」に、コントのことが出てくる。

ところで、実証主義 positivisme の語を私たちにはじめてあたえたのは フランスのコントであった。

コントの実証主義は 学派と言われうるものを形成するにはいかなかったが、それはテーヌやルナンの思想のうちにとりいれられ、またデュルケームやレヴィ・ブルジョールの社会学となつて受けつがれ、とりわけてイギリスの思想界に大きな影響をあたえた。

斎藤正二著『社会学史通論 増補版』（照林堂出版部、昭和三十五年四月）の「第二章 総合社会学 二 オーギュスト・コント」は、かなりくわしいコント論である（二一―四四頁）。著者はコント社会学を生みだした時代的背景、コント略伝、三状態の法則、社会学の区分（社会静学と社会動学）、人類教などにふれている。コントやスペンサーの総合社会学について、著者はつぎのようにのべている。

総合社会学は第一に、社会の総合的認識において、社会を有機的全体として把握したことである。第二には、社会を発展的に把握し、その中に法則的な原理を樹立したことである。

『世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇 9 コント スペンサー』（河出書房、昭和三十五年六月）は、コントの「社会再組織に必要な科学的作業案」（土屋文吾訳）、「科学および科学者に関する哲学的考察」（土屋文吾訳）、「実証精神論―秩序と進歩」（飛沢謙二訳）など、初期の論文の反訳を収録している。巻尾に、訳者らによる「コント解説」がついている。

銅直勇の「コムト社会学における文明の社会構造論的考察」（『社会学論叢』第二十一号所収、昭和三十六年三月）は、コントの「文明観念の由来を明らかにしようとしたものである。

川崎恵璋編『社会学』（法律文化社、昭和三十八年九月）に、すこしコントへの言及がみられる。

コントをはじめとする初期社会学は、社会を有機体と見做して、包括的な認識を行う社会実体論の立場を示している。

富野敬邦著『社会の探求』（風間書房、昭和三十九年二月）に、総合社会学者としてのコントとスペンサーの名がみられる。

社会学はコントに発し、スペンサーにまず体系づけられ、十九世紀末から二十世紀にかけて、しだいに初期の^{（ミネルヴァ）}茫漠たる百科全書的・総合的な学問体系を止揚し、専門科学としての社会学の独自の立場をかためてきた（「はしがき」）。

野田又夫著『西洋哲学史 ルネサンスから現代まで』（ミネルヴァ書房、昭和四十年三月）の「X 十九世紀の哲学（その一）」に、コントの実証哲学やその矛盾点、コントに反対のたちばをとった人々のことが出てくる。

コントの前期の仕事 すなわち実証科学の哲学的総合と後期の実証政治学（人類教）との間には一種の矛盾があり、かれの前期の実証主義に同感した人々ルナンやテーヌやジョン・ミルらも、後期の人類教には帰依しなかった。そしてこのことは、コントが社会を全体主義的に考え 個人性を否定する

傾向を示したこと、またかれの歴史観（三段階の理論）が独断的であるということ、に対する反対でもあった。

田辺壽利著『フランス社会学成立史』（有隣堂出版、昭和四十年三月）の「緒論 フランス社会学の黎明——十六・十七世紀の社会学思想 第一節 社会学の淵源の問題」に、コントのことが出てくる。

サン＝シモンをして社会学のプログラムを作らしめ、コントをして社会学を成立せしめたのである。

北川隆吉編『講座 現代社会学 1 社会学方法論』（青木書店、昭和四十年四月）の「第一章 社会学の方法 第一節 社会学における二つの立場」に、コントが出てくる。

しかし一般的な「通説」「定説」としては、A・コントの「実証哲学」に記された社会学の提唱と規定によって、社会学の誕生がみられるとされている（北川隆吉）。

林福苗
四方寿雄 編著『現代人と社会』（ミネルヴァ書房、昭和四十年五月）の「序章 社会学とは何か——その学問的位置づけ」において、著者は社会学誕生の歴史、コントの社会学、社会静学と社会動学などにふれている。コント社会学については、つぎのように語っている。

コントの社会学は 彼の学問系統論とつながっている。彼は学問を数学・天文学・物理学・化学・生物学・社会学の順序にならべた。この順序のうち後の学問はどれも前の学問の基礎の上にたつというのである。

馬場明男著『社会学小史』（エルガ、昭和四十一年六月）の母胎となったものは、「東京教学社」の大学講座に書いた原稿を若干修正したものである（まえがき）。社会学史を専攻した著者は、日本大学文学部社会学科の中興の祖であり、少なからず好書を世に問うている。本書もその

うちの一冊である。

同書の「第七章 日本社会学の歴史 五 わが国社会学とコント」(一七七―二〇〇頁)は、平易な筆で書かれた日本における「コント紹介のあと」であり、参考とする点も多い。著者は、オーギュスト・コントをわが国に紹介した西周から筆をおこし、ついで明治・大正・昭和期(戦前あたりまで)のコント紹介の流れを見渡している。

玉井茂編『西洋思想史の人びと』(理想社、昭和四十二年三月)の「14 コント」は、コントの伝統主義、実証主義、三状態の法則、社会学の成立、社会の再組織、人間教などにふれている。

コントは、サン・シモンら空想的社会主義者たちのように 政治的経済的変革を直接訴えるのではなく、人間知性の改革によって 新しい社会秩序の再形成を考えました(堀場正治)。

『コント研究——生涯と学説 本田喜代治フランス社会思想研究 第二巻』(法政大学出版局、昭和四十三年三月)は、旧著を三たび世に出したものである。

杉之原寿一編『現代批判の社会学』(汐文社、昭和四十三年五月)の「第一章 社会学研究の歴史と課題 社会学の歴史と現状」に、コントの名がみえる。

「予見せんがために見る」というコントの有名な言葉も、実践的かつ科学的な社会理論への志向を示すものにほかならない(杉之原寿一)。

佐々木交賢編『社会学の基礎』(杉山書店、昭和四十四年五月)の「序章 1 社会学の対象」に、社会学の創始者コント、帝王科学(社会の全体的、総合的認識の科学として構築した)としての社会学を提唱したコント、社会静学や社会動学のことが出てくる。

コントは社会学を宇宙現象を取扱う諸科学の一環として位置づけ……

社会は不可分の全一体であるから 従来の社会諸科学のように 部分的な特殊現象のみを考察するのではなく、社会全体を総合的、統一的に把握しなければならぬとして、社会学を以て社会科学であると断言し……

清水幾太郎編『世界の名著 46 コント スペンサー』（中央公論、昭和四十五年二月）は、コントやスペンサーの人と思想についての知識を得るには、まことによき好書である。兩人についての解説を執筆したのは編者の清水であり、他に二人の代表的な論文の翻訳を収めている。とくにコント関係では、霧生和夫訳「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」「実証精神論」「社会静学と社会動学」が収録されている。

宮田礪治著『哲学』（理想社、昭和四十五年四月）の「第五章 認識問題 四 実証論」に、コントのことが出てくる。

実証論はわれわれの認識の起源を経験にのみ限定し、認識の限界を経験される事物にのみ限るのである。

かかる思想を哲学説として樹立したのはコントである。コントによれば哲学は経験的事実に基づく知識の全体系にはかならぬ。

松浪信三郎編『西洋思想史辞典』（東京堂出版、昭和四十八年三月）に、「実証主義」の項目があり、コントが出てくる。

実証主義はフランスのコントが唱えた説である。実証主義とは、一般に、超経験的な形而上学を避けて、哲学ないしは科学の対象を経験的に与えられたものに限ろうとする立場であるといつてよいであろう（谷口龍男）

こんにちの社会学徒の中には、コントの社会学理論を過去の遺物とみ、もはや一顧の価値もない古びた生物有機体説と考える者がいるかもしれないが、著者によるとこの考えは誤っているという。

コントの社会学体系の中には、「現代社会学」が問題とし、その射程におさめている諸領域が、その方法論自体として基底的におさめられているという。

稲上毅著『現代社会学と歴史意識』（木鐸社、昭和四十八年十一月）の「第四章 社会学実証主義の構想力——サン・シモンとコント」は、いわゆる実証主義をめぐる係争に関して、サン・シモンとコントを素材として私見をのべたものという。同書においては、コントにおける実証主義の定義づけ（「実証的」といったことばの意味内容）を検討したり、じっさいのコントの知的営為（いとなみ）との間のずれなどを論究している。

レイモン・アロン著『社会学的思考の流れ Ⅰ』（法政大学出版局、昭和四十九年六月）は、北川隆吉、平野秀秋他の共訳になるものだが、この中に「オーギュスト・コント」の一章が収録されている。「序文」と「オーギュスト・コント」は、平野秀秋が反訳している。社会学者の研究の出発点とは、じぶんが属する時代を分析することのようである。

コントが自分の生きた社会の分析から引き出した結論は、社会変革の基礎条件は 知的変革だということである。危機のなかにある社会が再組織されるのは、革命の災厄によっても暴力によってもなく、諸科学の総合と実証政治学の創造によってなのである（平野秀秋訳）。

組谷昂・田原音和 共編『講座 社会学史 Ⅰ 社会学の成立』（人間の科学社、昭和五十一年十月）の「Ⅱ 政策「科学」としての『社会学』の体系 オーギュスト・コント」（布施鉄治、岩城完之）において、コントの社会学体系検討の現代的意義、コントの問題意識と人間把握の論理、コントの文明史観と三状態の法則、コントにおける実証主義の科学方法論、資本主義社会分析の論理と産業体制維持の諸政策などが論じられている。清水幾太郎著『オーギュスト・コント 社会学とは何か』（岩波書店、昭和五十三年九月）は、岩波新書（黄版）評伝選ちゅうの一冊である。内容は――、

- I この天才との縁
- II フランス革命の廃墟に立って
- III 王政復古のバリエーションに学ぶ
- IV 啓蒙思想よ、さらば
- V 幼く美しい処女作——三段階の法則

VI 社会学の完成と狂気と

VII 女神と人類教への道

などである。同書は、平成七年（一九九五）九月再刊された。

『哲学大辞典』『覆刻版』（名著普及会、昭和五十三年十一月）に、コントの項目があり、伝記と学説についての解説がのっている。

（コムト・イシドール、オーギュスト、マリイ、フランソア、ザゼエ）仏国の哲学者にして且つ数学家なり。実証哲学を唱へ又社会学の鼻祖として知らる。……

新睦人、大村英昭他著『社会学のあゆみ』（有斐閣、昭和五十四年四月）に「序章 コントとマルクス」の短章があり、この中で社会学の命名者コント、実証的ということ、「予見するために見る」などについて論じられている。

中公バックス『世界の名著 46』（中央公論新社、昭和五十五年七月）は、「コントとスペンサー」を収録している。旧版は箱入り本であり、昭和四十五年（一九七〇）二月に刊行された。訳者および解説者は、清水幾太郎である。これは好書であり、コントやスペンサーについて知識を得るために恰好の入門書である。解説において、――

コントとの巡り合い

（コントの）愛と思索の生涯

『実証哲学講義』

歴史哲学（進歩の観念、三段階の法則）

フランス革命と産業革命

諸科学の分類

などが叙述されている。収録されているコントの訳稿（霧生和夫訳）は、

「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」

「実証精神論」

「社会静学と社会動学」（『実証哲学講義』第四卷より）

などである。

『コンドルセとコント 田辺壽利著作集 第二卷』（未来社、昭和五十七年七月）の第二部には、旧版『コントの実証哲学』（野村書店、昭和二十二年七月）が再録されている。

隈元忠敬
西川亮 編『哲学名著解題』（協同出版、昭和六十一年四月）、見田宗介、栗原彬、田中義久編『社会学事典』（弘文堂、昭和六十三年二月）、森岡

清美、塩原勉、本間康平編『新社会学辞典』（有斐閣、平成五年二月）などに、それぞれ「コント」の項目がみられる。

『清水幾太郎著作集 15』（講談社、平成五年八月）に、「コントの暦」（二種の万年暦）が収められている。

丸山哲史^{（とうし）}監訳『新しい世紀の社会学中辞典』（ミネルヴァ書房、平成八年三月）に、「A・コント」の項目がある。

コントは、「社会学」といふ言葉を作りだし、一八三八年『実証哲学講義』の第四卷ではじめて公にこれを使った。……

その他、浜嶋朗編『社会学小辞典（新版）』（有斐閣、平成九年一月）、見田宗介、佐藤健二他編『社会学文献事典』（弘文堂、平成十年二月）、広松涉、子安宣邦他編『岩波哲学・思想事典』（岩波書店、平成十年三月）、小林道夫、小林康夫他編『フランス哲学・思想事典』（弘文堂、平成十一年一月）にも、それぞれ「コント」の項目がみられる。

高坂正顕著『明治思想史』（燈影舎、平成十一年十一月）は、京都哲学撰書の第一巻にあたる。同書の「第二章 一八七〇年より一八八〇年に

至る 第二節 明六社の人々」において、コントの名が散見する。この記事は、開国百年記念文化事業会編集『明治文化史 第四巻 思想・言論編』（洋々社、昭和三十年三月）に掲載されたものとおなじである。

村井久二著『コントとマルクス「コント＝マルクス型発展モデル」の意義と限界』（日本評論社、平成十三年十二月）は、十九世紀のヨーロッパにおける二人の代表的思想家コントとマルクスを取りあつたものである。とくに両者の人間史に関する理解を比較し、そこに共通して見いだされる特定の“発展構成”を抽出しつつ、あわせて両者の相違点にふれたものという（「あとがき」）。

*

四 本稿で取りあげた文献資料名一覧表

西周の左記の記事は、大久保利謙編『西周全集 第一巻』（宇高書房、昭和三十五年三月）に収録されている。

「開題門」

「百学連環」 第一 総論 稿 永見の饒香

「百学連環」 第二編第二号 第二稿中なかみの饒香

「百学連環覚書」（第一冊）、「五原新範」（明治四、五年ごろの稿本）、「生性発蘊」（明治四年前後の稿本）、「尚白節記」（明治十五年三ごろの稿本）

「人世三宝説 一」 （『明六雜誌』（第三十八号所収、明治8・6）。

ジョン・スチュアート・ミル著 『利学』（上下二冊）（翔翠樓蔵版、明治10・5）
西周訳

『東京大学法理文学部 図書館英書目録』（本部図書館印行、明治10・9）

トンプソン氏著 加藤政之助訳 『交際論 附 経済 初編 一』（明治11・10）

チャンパー原著 塚本周辺訳 『論理学 全』（文部省印行、明治11・11）

土居光華批評 荳生奉三編次 評 西先生論集 全』（明治13・4）

蒲生仙訳 『支那文明論』（明治14・11）

乗竹孝太郎訳述 外山正一関 『社会学之原理 甲乙』（経済雑誌社、明治15・4）

井上哲次郎著 『倫理新説』（文盛堂、明治16・3）

井上哲次郎講述

『西洋哲学講義』(坂上平七、明治16・4)

『東京学士会院雑誌 第五編 自明治十六年一月至全 上二冊』(明治16・11)

『社会学之原理』(明治18・4)

スベンセル氏著
乗竹孝太郎訳
ハルバート・スピア原著
佐竹時之助訳

『哲学ノ定義』(『中央學術雑誌』第四十一号所収、明治19・11)

加藤弘之

『発刊の辞』(『哲学会雑誌』创刊号所収、明治20・2)

徳永満之

『哲学定義集』(『哲学会雑誌』第二号所収、明治20・3)

三宅雄二郎講述
伊達周碩筆記

『社会学 一』(文海堂、井湧堂、明治21・3)

有賀長雄

『社会学史略(第一回)』(『哲学会雑誌』第十九号所収、明治21・8)

『社会学史略(第二回)』(『哲学会雑誌』第二十一号所収、明治21・10)

辰巳小次郎

『社会学』(『学校経済学講義筆記 第三年級 第五号』所収、明治21・10)

加藤弘之

『政事を以て任する者は社会学を修めざる可からざる』(『日本大家論集』第二十一編所収、博文館、明治22・2)

蘆津実全著

『日本宗教未来記』(船井弘文堂、明治22・3)

ウィリヤム・ノックス

『倫理上日本ノ要スルモノ』(『哲学会雑誌』第二十七号所収、明治22・5)

菊池熊太郎

『理学宗ノ説明』(井上毅氏の席話)、『大日本大家論集』第二十五編所収、明治22・6)

三宅雄二郎著

『哲学消滴』(発行者 吉川半七、明治22・11)

井上門了著

『増補 哲学要領 前編』(哲学書院、明治24・11)

茨木宗之

『欧州史を講ず』(『中央學術雑誌』第五号所収、明治25・9)

渋江保著

『社会学 全』(博文館、明治27・1)

垣田純朗著

『哲学変遷史』(民友社、明治27・3)

片山潜

『米国に於ける社会学の進歩』(『六合雑誌』第一八五号所収、明治29・5)

高柳松一郎

『コントの所謂人類教』(同右)

片山潜

『社会学の綱領』(『六合雑誌』第一八八号所収、明治29・8)

〃

『初期の仏国社会主義 第一サン、シモン』(『六合雑誌』第二九三号所収、明治30・1)

文化人オギュスト・コントの
思想を伝える
文学士

『哲学要領 全』(南江堂書店、明治30・6)

建部遯吾著

加藤弘之

岡百世

井上門了講述

布川静淵

フェリアバンクス原著
十時弥沢述

村井勇太郎

岸本能武太著

岡百世訳

久松義典著

井上哲次郎著

中島力造著

建部遯吾著

村井知至

浮田和民著

波多野精一著

高木正義

樋口秀雄

中島徳蔵

久松義典著

元良勇次郎

遠藤隆吉著

建部遯吾著

『哲学大観』（金港堂書籍株式会社、明治31・4）

『社会学研究会の発会式に於て』（『社会』第一号所収、明治32・1）

『オーギュスト、コント』（同右所収）

『通俗講義 哲学早わかり』（開発社、明治32・2）

『通俗 社会学漫録』（『社会』第二卷第一一所収、明治33・2）

『社会学』（博文館、明治33・6）

『コムトの人類教を論ず』（『六合雜誌』第三四号、第三五号所収、明治33・6）

AN OUTLINE
OF SOCIOLOGY
社会学』（大日本図書株式会社、明治33・11）

『社会学史（其一）』（『社会』第二卷第二二号所収、明治33・12）

『社会研究新論』（文学同志会、明治34・2）

『異軒論文二集』（富山房、明治34・4）

『現今の哲学問題 全』（普及社、明治34・4）

『社会学原理』（東京専門学校蔵版、明治34・7）

『コムトの人類教を評して我が信仰の立場を明かにす』（『六合雜誌』第二五〇号所収、明治34・10）

『社会学講義』（開発社、明治34・11）

『西 哲学史要』（大日本図書株式会社、明治34・11）

『社会概念論』（『社会学雑誌』第四卷第二号所収、明治35・2）

『社会学上の書籍について』（『学燈』第六二号所収、明治35・7）

『実業的文化と文芸的修養』（『東洋哲学』第九編第一一号所収、明治35・11）

『社会学と哲学』（文学同志会、明治36・1）

『秋尊降誕会における講演筆記』（『東洋哲学』第一〇編第五号所収、明治36・5）

『社会学及研究法』（同文館、明治36・10）

『普通社会学 第三卷 社会静学』（金港堂書籍株式会社、明治37・1）

”

遠藤隆吉

建部遯吾著

朝永三十郎編

小林照朗著

遠藤隆吉著

小林郁著

”

江部淳夫著

河田嗣郎著

樋口秀雄著

”

川合貞一

三宅雄二郎

安倍能成訳

久保良英著

桑本敏翼著

稲田周之助著

寛克彦著

ロージャース原著
藤井健治郎 合訳

北吟吉

宮地猛男著

フランク・シルリー原著
若守義孝訳述

安部能成著

『社会学序説』（金港堂書籍株式会社、明治37・1）

「スペンサー氏の社会学系統」（『哲学雑誌』第一九卷第二〇六号所収、明治37・4）

『社会学綱領』（金港堂書籍株式会社、明治37・9）

『哲学辞典 全』（宝文館、明治38・1）

『日本之社会』（金港堂書籍株式会社、明治40・1）

『近世社会学』（成美堂書店、明治40・3）

『社会心理学』（博文館、明治42・8）

『コムト 全』（富山房、明治42・10）

『文明論』（金港堂書籍株式会社、明治42・11）

『社会主義論』（宝文館、明治43・10）

『社会学小史 全』（二松堂書店、明治44・8）

『社会学十回講義』（二松堂書店、明治45・5）

『哲学の運命』（『慶応義塾 学報』第一七九号所収、明治45・6）

『現代の哲学攻究法』（『哲学雑誌』第二七卷第三〇六号所収、大正元・8）

『オクトン大思想家之人生観』（東亜堂、大正元・10）

『哲学概論』（弘道館、大正2・1）

『現代思潮十講』（弘道館、大正2・6）

『日本憲政提要』（有斐閣、大正2・9）

『法理学 第二巻 西洋哲理 上』（清水書院、大正2・12）

『西洋哲学史』（富山房、大正3・2）

『哲学とは何ぞや』（應来社、大正3・12）

『古代より 西洋哲学史』（目黒書店、大正5・9）

『哲学概論 第十編 西洋近世哲学史』（岩波書店、大正6・4）

- ヘフディング著
北吟吉訳
『近世哲学史 下巻』(早稲田大学出版部、大正7・4)
- 田島錦治著
『近世社会主義論』(法曹閣書院、大正8・5)
- 川合貞一
『恩の思想』(『三田評論』第二七一号所収、大正9・2)
- アーサー・レウキス著
高畠素之訳
『社会主義社会学』(三田書房、大正9・6)
- マツケンヂー原著
納武津訳
『社会哲学原論』(日本評論社出版部、大正9・6)
- 金子筑水著
『思想 欧州思想大観』(東京堂書店、大正9・10)
- 帆足理一郎著
『哲学概論』(洛陽堂、大正10・3)
- 納武津著
『最新 社会学講話』(日本評論社、大正10・10)
- 村田豊秋著
『戦 哲学大集成』(中央出版社、大正10・11)
- 伊達保美著
『哲学概論 上巻』(泰文社、大正11・5)
- 遠藤隆吉著
『社会学原論』(叢松堂書店、大正11・7)
- 宮本和吉、高橋穰他編
『告 哲学辞典』(岩波書店、大正11・10)
- 金子馬治著
『現代哲学概論』(東京堂、大正11・12)
- キユルペ原著
神谷元訳
『哲学概論』(南風堂書店、大正12・1)
- ハーバート・スペンサー著
鈴木栄太郎訳
『個人対国家』(社会学研究会、大正12・3)
- パウ・バルト著
波多野鼎訳
『社会学体系論』(大鐘閣、大正12・3)
- エミール・デュルケム著
松永栄訳
『社会学的方法の規準』(社会学研究会、大正12・4)
- ジョン・スタートミル著
波多野鼎、河野密訳
『コント実証哲学 附 功利主義論』(而立社、大正12・7)
- 本田喜代治訳
『オーギュスト・コント、其時代及其思想(二)』(『社会学雑誌』創刊号所収、大正13・5)
- 川辺喜三郎著
『社会学原論』(早稲田大学出版部、大正13・6)
- フリードッヒム・クル原著
高橋正男訳編
『サン・シモンの生涯と其思想体系』(モナス、大正13・9)
- 西宮藤朝著
『現代哲学思潮大系』(新光社、大正13・10)
- ウエルネル・ゾンバルト著
景山哲雄訳
『社会学』(而立社、大正13・11)
- 村田豊秋著
『近 代哲学大系』(成光館出版部、大正14・1)

- 高木八太郎著 『東西思潮講話』（共益社出版部、大正14・2）
- アーサー・レウキス著 高島素之訳 『社会学講話』（アテネ書院、大正14・4）
- スモール著 高島素之訳述 『社会学思想の人生的価値』（新潮社出版、大正14・9）
- ドミニック・パロディ著 三宅茂訳 『現代仏蘭西学派の哲学』（春陽堂、大正14・12）
- 野崎泰秀著 『小さい社会学』（広文堂、大正15・4）
- 齊藤要著 『世界哲学史年表』（聖山閣、大正15・11）
- 高島素之著 『社会主義と進化論』（改造社、昭和2・1）
- 井森陸平著 『形式社会学研究』（甲子社書房、昭和2・3）
- ルドヴィヒ・シュタン著 共訳会訳 『社会思想史』（協調会、昭和2・9）
- 加田哲二著 『近世社会学成立史』（岩波書店、昭和3・2）
- 戸田貞三著 『社会学講義案 第一部』（弘文堂、昭和3・4）
- フォン・ウイーゼ著 黒川純一訳註 『社会学（歴史及
主義問題）』（刀江書院、昭和3・4）
- 松本潤一郎著 『現代社会学説研究』（刀江書院、昭和3・5）
- オーギュスト・コント著 石川三四郎訳 『大思想エンサイクロペディア 13 社会学』（春秋社、昭和3・5）
- 木下一雄著 『実証哲学（上巻）』（春秋社、昭和3・11）
- 銅直勇著 『現代哲学要論』（培風館、昭和4・3）
- 新明正道著 『純正社会学概論』（玉川学園出版部、昭和4・3）
- 下地寛令著 校哲学叢書 第五編 『社会学』（岩波書店、昭和4・6）
- 関榮吉著 『社会学概論』（良書普及会、昭和4・7）
- 川辺喜三郎著 『文化社会学概論』（広文堂、昭和4・10）
- フランソワ学会編 『社会学概論』（弘文堂、昭和4・11）
- 貫伝松著 『フラスの社会科学—現代に於ける諸傾向』（刀江書院、昭和5・2）
- 伊藤吉之助編輯 『社会学要論』（法曹閣書院、昭和5・2）
- 『岩波哲学小辞典 増訂版』（岩波書店、昭和5・3）

- 赤神良讓著 『社会学入門』(丁酉出版社、昭和5・3)
- 帆足理一郎著 『西洋哲学史』(早稲田大学出版部、昭和5・10)
- 大島正徳著 『現代哲学概観』(至文堂、昭和6・1)
- マルセル・デア著 『社会学概論』(白鳳社、昭和6・4)
- 浅野研真訳 『社会学史研究』(刀江書院、昭和6・10)
- 田辺壽利著 『季刊 社会学 第二輯 社会動態の研究』(天地書房、昭和6・10)
- 日本社会学会編輯 『得能文、高階順治共著 高等教育 哲学概論』(東洋図書株式合資会社、昭和7・2)
- 松本潤一郎編 『社会学と歴史』(浅野書店、昭和7・3)
- 田辺壽利、古野清人共編 『社会学 第一号』(森山書店、昭和7・4)
- 社会思想社編 『改訂 社会科学大辞典』(改造社、昭和7・4)
- 清水幾太郎 『コントに於ける三段階の法則』(社会学研究会編『文化社会学研究叢書 Ⅲ』所収、同文館、昭和7・6)
- 守田貞記著 『社会学ト音楽トノ交渉 全』(皇道館川崎政治学院、昭和7・10)
- 大島豊著 『現代哲学史』(第一書房、昭和8・4)
- 大島操 『実証主義と弁証法的唯物論——コントの認識論或ひは知識社会学について』(『唯物論研究』第八号所収、昭和8・6)
- 桑本敬翼著 『現代哲学思潮』(改造社出版、昭和8・8)
- 貫伝松著 『社会学より経済学へ』(新星堂、昭和8・9)
- 川辺喜三郎著 『社会学序論 教材 第一篇』(敬文堂書店、昭和8・10)
- 松本潤一郎著 『社会学要綱』(時潮社、昭和9・5)
- 佐久間一雄 『心理学史上に於けるコントの地位——骨相学から社会学へ』(『唯物論研究』第二十九号所収、昭和9・5)
- 小山文太郎著 『社会学座談』(章華社、昭和9・6)
- 難波紋吉著 『社会学要義』(弘文堂書房、昭和9・6)
- 本多喜代治 『コントの『人間数』——フウルデヨワ宗教の一典型としての人間学』(『唯物論研究』第三二号所収、昭和9・8)
- 円谷弘著 『集団社会学原理』(同文館、昭和9・9)
- 新明正道著 『オーギュスト・コント』(三省堂、昭和10・5)

- 清水幾太郎著 『社会と個人——社会学成立史〔上巻〕』(刀江書院、昭和10・5)
 レヴィ・ブリュール著 『未開社会の思维』(小山書店、昭和10・7)
 山田吉彦訳
 阿閑吉男、那須宗一共訳『ハンス・フライヤア社会学』(雄風館書房、昭和10・8)
 本田喜代治著 『コント研究 その生涯と学説』(芝書店、昭和10・10)
 川辺喜三郎著 『社会学綱要』(敬文堂書店、昭和11・5)
 『思想 特輯 フランス哲学』(岩波書店、昭和11・12)
 「コントに於ける歴史的方法に就いて」『歴史』二月号所収、白揚社、昭和12・2)
 セレスタン・ブーグレ著 『価値社会学』(三笠書房、昭和12・6)
 河合正道、河合弘道共訳
 時野谷常三郎著 『日本新文化史 明治時代 12』(内外書籍株式会社、昭和17・2)
 宮島真一著 『西洋哲学史綱要』(文進堂、昭和17・6)
 松本潤一郎著 『社会理論』(日光書院、昭和17・12)
 河合弘道著 『日本社会学原理』(昭森社、昭和18・1)
 桑木敏翼著 『明治哲学界』(中央公論社、昭和18・3)
 佐藤慶二著 『西洋近世哲学史——カントより現代まで』(実業之日本社、昭和18・7)
 新明正道編 『社会学辞典』(河出書房、昭和19・8)
 藤平武雄著 『近代哲学史』(改訂増補版)(二見書房、昭和21・11)
 田辺壽利著 『コントの実証哲学』(野村書店、昭和22・7)
 佐藤慶二著 『文化社会学』(霞書房、昭和22・7)
 豊川昇著 『哲学書覧書』(鳳文書林、昭和22・7)
 日本社会学会編 『社会学研究』(第一巻)(高山書店、昭和22・12)
 松本潤一郎著 『全訂 現代社会学説研究』(乾元社、昭和23・4)
 戸田武雄著 『マックス・ウェーバー批判』(鱗書房、昭和23・5)
 赤松良讓著 『環境社会学』(竹井出版株式会社、昭和23・6)
 平井新著 『近代社会思想史』(慶友社、昭和23・6)

帆足理一郎著

『哲学概論』（野口書店、昭和23・11）

斎藤道太郎編

『社会科事典 第四卷』（平凡社、昭和24・2）

細野武雄著

『社会学の反省―第三の社会理論・社会学』（法律文化社、昭和24・3）

尾高邦雄著

『社会学の本質と課題 上巻』（有斐閣、昭和24・4）

土屋文吾訳
コント著

『社会の再組織について』（創元社、昭和24・4）

本田喜代治著

『コント研究―その生涯と学説』（新装版）（小石川書房、昭和24・5）

南博著

『社会心理学 社会行動の基礎理論』（光文社、昭和24・12）

泉靖一著

『社会学講義資料 1 或る山村のモノグラフ』（敬文堂、昭和25・4）

高田保馬著

『社会科学通論』（有斐閣、昭和25・6）

高山峻著

『フランス実証主義哲学』（創元社、昭和25・9）

新明正道、大道安次郎他編

『社会思想史辞典』（創元社、昭和25・10）

高桑純夫編

『近代の思想』（毎日新聞社、昭和25・12）

速水敬二編

『哲学研究提要』（第一出版株式会社、昭和26・4）

串田孫一著

『フランス思想史―思想の饗宴』（春秋社、昭和26・6）

篠原助一著

『哲学新講 附 東西哲学思想の発展』（宝文館、昭和26・6）

斎藤由五郎著

『哲学史概説』（敎翠堂書店、昭和26・9）

出隆、柳田謙十郎他編

『哲学入門辞典』（岩崎書店、昭和27・3）

早瀬利雄

『明治初期における日本社会学前史の研究―社会学者としての西周とコントの実証主義』（『大倉山論集 第一輯』所収、昭和27・6）

高田保馬著

『社会学』（有斐閣、昭和27・9）

馬場明男著

『一般社会学』（時潮社、昭和27・9）

藏内数太著

『社会学概論』（培風館、昭和28・6）

鳥井博郎著

『明治思想史』（河出書房、昭和28・12）

ガストン・ブートゥール著
古野清人訳

『社会学史』（白水社、昭和29・7）

串田孫一編

『哲学辞典』（河出書房、昭和30・1）

開国百年記念文化事業
会編纂
菊池綾子 著
村川隆 著

『明治文化史 第四巻 思想・言論編』(洋々社、昭和30・3)

『20世紀 アメリカ社会学の展望』(二古堂書店、昭和30・11)

『二橋大学研究年報 社会学研究 1』(勁草書房、昭和31・3)

『岩波 西洋人名辞典』(岩波書店、昭和31・10)

大道安次郎 著

『アメリカ社会学の源流—アメリカにおけるコントとスペンサー』(弘文堂、昭和32・4)

九鬼周造 著

『現代フランス哲学講義』(岩波書店、昭和32・6)

阿閑吉雄
内藤莞爾 編

『社会学史概論』(勁草書房、昭和32・10)

雀部猛利 著

『社会調査の技法』(ミネルヴァ書房、昭和33・5)

福武直編

『講座 社会学 第九巻 社会学の歴史と方法』(東京大学出版会、昭和33・7)

栗田賢三編
古在由重 編

『岩波小辞典 哲学』(岩波書店、昭和33・10)

西村勝彦 著

『現代社会学入門』(誠信書房、昭和34・4)

清水幾太郎 著

『社会学入門』(光文社、昭和34・6)

原佑 著

『西洋^{現代}哲学史』(勁草書房、昭和35・3)

斎藤正二 著

『社会学史通論 増補版』(照林堂出版部、昭和35・4)

銅直勇

『世界大思想全集 社会・宗教・科学思想篇 9 コント スペンサー』(河出書房、昭和35・6)

川崎忠璋 編

『社会学』(法律文化社、昭和38・9)

富野敬邦 著

『社会の探求』(風間書房、昭和39・2)

野田又夫 著

『西洋哲学史 ルネサンスから現代まで』(ミネルヴァ書房、昭和40・3)

田辺壽利 著

『フランス社会学成立史』(有隣堂出版、昭和40・3)

北川隆吉 編

『講座 現代社会学 1 社会学方法論』(青木書店、昭和40・4)

林福苗 編
四方寿雄 編 著

『現代人と社会』(ミネルヴァ書房、昭和40・5)

馬場明男 著

『社会学小史』(エルガ、昭和41・6)

玉井茂 編

『西洋思想史の人びと』(理想社、昭和42・3)

杉之原寿一編

『コント研究―生涯と学説 本田喜代治フランス社会思想研究 第二卷』(法政大学出版局、昭和43・3)

佐々木交賢編

『現代批判の社会学』(汐文社、昭和43・5)

清水幾太郎編

『社会学の基礎』(杉山書店、昭和44・5)

宮田礒治著

『世界の名著 36 コント スペンサー』(中央公論社、昭和45・2)

松浪信三郎編

『哲学』(理想社、昭和45・4)

稲上毅著

『西洋思想史辞典』(東京堂出版、昭和48・3)

レイモン・アロン著

『現代社会学と歴史意識』(木鐸社、昭和48・11)

北川隆吉、平野秀休他訳

『社会学的思考の流れ 1』(法政大学出版局、昭和49・6)

細谷昂、田原晋和共編

『講座 社会学史 Ⅰ 社会学の成立』(人間の科学社、昭和51・10)

清水幾太郎著

『オーギュスト・コント 社会学とは何か』(岩波書店、昭和53・9)

新睦人、大村英昭他著

『哲学大辞典』〔覆刻版〕(名著普及会、昭和53・11)

中公バックス

『社会学のあゆみ』(有斐閣、昭和54・4)

隈元忠敬編

『世界の名著 46』(中央公論新社、昭和55・7)

西川亮編

『コンドルセとコント 田辺壽利著作集 第二卷』(未来社、昭和57・7)

見田宗介、栗原彰

『哲学名著解題』(協同出版、昭和61・4)

田中義久編

『社会学辞典』(弘文堂、昭和63・2)

森田清美、塩原勉

『新社会学辞典』(有斐閣、平成5・2)

本間康平編

『清水幾太郎著作集 15』(講談社、平成5・8)

丸山哲央監訳

『新しい世紀の社会学中辞典』(ミネルヴァ書房、平成8・3)

浜嶋朗編

『社会学小辞典〔新版〕』(有斐閣、平成9・1)

見田宗介、佐藤健二他編

『社会学文献事典』(弘文堂、平成10・2)

広松渉、子安宣邦他編

『岩波哲学・思想事典』(岩波書店、平成10・3)

小林道夫、小林康夫他編

『フランス哲学・思想事典』(弘文堂、平成11・1)

高坂正顕著

『明治思想史』(燈影社、平成11・11)

村井久二著

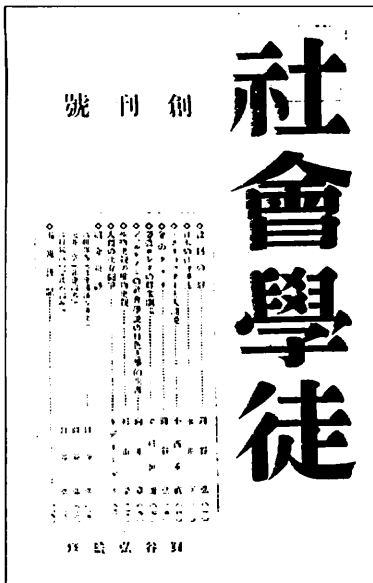
『コントとマルクス「コント＝マルクス型発展モデル」の意義と限界』（日本評論社、平成13・12）

*

五 月刊雑誌『社会学徒』とA・コント

『社会学徒』は、日本大学社会学科の機関誌である。同誌の系譜につらなる雑誌は『社会学論叢』である。これはいまも続いている。戦前、『社会学徒』はわが国におけるコントの名声の伝播に少なからず貢献をした。その最大の貢献者は、浅野研真（一八九八～一九三九、仏教社会学者）と本田喜代治（一八九六～一九七二、フランス社会思想史家）である。浅野は、コントその他のフランス社会学の学説の紹介や翻訳に努め、本田は、『オーギュスト・コント 生涯と思想』を連載し、のち『コント研究 その生涯と学説』（芝書店、昭和十年十月）を公刊したことで、その名は知られている。

いまでこそ浅野研真は過去のひとであり、こんにちその名を知る人の数は多いとはいえない。が、かれは独創的な仏教社会学の研究で後世にその名を残した。浅野は明治三十一年（一八九八）愛知県祖父江町に生まれ、真宗尾張中学校を卒業後、京都の紫野大徳寺で修業した。その後、南館の刑務所の教誨師をつとめていたが、勉学を志し、上京すると、日本大学社会科（当時、専門部）に第一回生として入学し、岡谷弘、高田保馬



日本大学社会学科の機関紙
『社会学徒 創刊号』の表紙。



浅野研真『社会学徒』3巻8号所収。

といった一流の教師の薫陶をうけた。

大学卒業後、その才知を買われたものか、母校の社会学研究室の助手となった。昭和三年（一九二八）七月文部省留学生として渡仏。パリにおいては、ブーグレ教授に師事し、フランス社会学を研究した。かたわらヨーロッパ各地を訪れ、昭和五年（一九三〇）シベリア経由で帰国した。

馬場明男（浅野の三年後輩）によると、浅野がなぜコント研究にむかったのか、その動機が明らかでないという。しかし、大学在学中、高田保馬や小林郁^{かほ}（本邦初のコントの単行本『コムト 全』富山房、明治四十二年十月刊の著者）の講義を聴いているから、そのあたりから研究意欲をそそられたものか。四十日余の船旅をおえ、ついにパリにたどり着いた浅野は、長途の旅のつかれもいとわず、まっ先に訪れたのは、ソルボンヌ広場にある「コントの記念像」であった。そして大理石の胸像の台石に見たものは、――

A

AVGVSTE COMTE

（オーギュスト・コントに）



ソルボンヌ広場にあるコントの胸像（パリ）
〔筆者撮影〕



パリの六区にある「オーギュスト・コント街」の表示板。〔筆者撮影〕

の文字であった。やがて浅野はパンテノンからさほど遠くない街区に下宿をみつけると、留学生活を開始するのである。パリ時代、浅野は講義に出たり、人と逢って会話をたのしんだり、古書店に立寄ってコント文献をあさったことであろう。また閑暇をえると、机にむかって故国に手紙を出したり、コントについて小論を書くことに努めた。浅野がパリ滞在中に『社会学徒』に寄稿した論文は、左記のとおりである。

- 「コムトの記念像」 (同誌第二卷第十一号、昭和3・11)
- 「コムトの家の事ども」 (同誌第四卷第一号、昭和5・1)
- 「コムトの戸籍調べ」 (同誌第四卷第二号、昭和5・2)
- 「コントの少年時代」 (同誌第四卷第三号、昭和5・3)

帰国後、浅野は、青山アパートの一の一に新居を定めると、引きつづき左記のようなコントに関する論文を逐次発表した。

- 「コントの工芸大学校学生時代」 (同誌第四卷第四号、昭和5・4)
- 「コントに於ける社会生活への第一歩」 (同誌第四卷第六号、昭和5・5)
- 「オーギュスト・コント著作目録」 (同誌第四卷第七号、昭和5・7)
- 「サン・シモンとコントとの関係」 (同誌第四卷第十号、昭和5・10)
- 「コント略年譜」 (同誌第五卷第二号、昭和6・2)
- 「コントの結婚生活」 (同誌第五卷第三号、昭和6・3)
- 「コントの実証暦」 (同誌第五卷第十二号、昭和6・12)
- 「コントの実証文庫」 (同誌第六卷第七号、昭和7・7)
- 「フランス社会学徒の墓碑」 (同誌第九卷第五号、昭和10・5)

注・この中にサン・シモンの墓についての言及がある。

〔翻訳〕

(コント)「社会改造に必要な科学工作案」(三回にわたって連載)

(同誌第八卷第九号、昭和9・9)

(同誌第八卷第十号、昭和9・10)

(同誌第九卷第四号、昭和10・4)

浅野がコントについて小論を発表しつづけた時期は、昭和三年(一九二八)から同七年(一九三二)までの四年ほどのあいだである。が、「コントの実証文庫」(昭和7・7)を書いてから、コントに関して何も書いていない。

そのころ浅野の関心は、仏教研究のほうにあり、当時友松^{ともまつ}円諦^{えんたい}(一八九五—一九七三、大正・昭和期の宗教家、慶大・大正大学教授)が中心に

なって創立した「仏教法政経済研究所」(銀座西五の五、菊地ビル内)に関係し、多忙であったようである(馬場明男「オーギュスト・コントと

浅野研真」『社会学論叢』^{No.8}所収、昭和31・6)

またかれがコント研究を成しとげず、未完成のまま亡くなったのは惜みてあまりあるが、コント研究の筆を折ったのは、別なところに理由があったものか。昭和八年(一九三三)には、反軍国主義的な言動で職場を追われたもと大阪高等学校教授・本田喜代治が、六月から精緻な研究「オーギュスト・コント——生涯と思想」を、毎月『社会学徒』に連載するようになったからである。

生前の浅野と交遊があった馬場明男によると、浅野はじつにまめであり、凝り性であったという。だからいったん研究をはじめると、じつに熱心であったし、資料蒐集などにすぐれた手腕を発揮した。その学風は、評論家風なところと、コツコツと考証を重ねていく歴史家的ふうな点とにあったという。

当時フランス本国において、コントの人と思想について、かなりのところまで研究が進んでおり、浅野のような東洋の一学徒が、新しい発見なり新説を提供する余地はなかったが、かれはできるかぎり原資料(モンペリエ市役所戸籍原簿の抄本——国際実証学会所蔵)に近づき、本国の研究者に伍して研究をおこなおうとしている(「コントの戸籍調べ」)。この研究態度は見習うべきである。

浅野はけっして裕福でなくらしに堪えた。文筆業のかたわら、東京労働学校、仏教(浄土真宗)の教化事業にたずさわる一方で、うまずたゆ

まず興味をひくものの研究をつづけ、四十二年のみじかい生涯をおえた。

浅野研真蒐集のコント文献。

浅野は愛書家であった。その蔵書数は、財力にめぐまれぬ民間の一学徒としては、かなり多い方であった、と蔵書を整理した桜井庄太郎^{しょうへい じょうたろう}（一九〇〇～一九七〇、日本大学法文学部卒、同大学大学院社会学専攻退学、のち中央労働学園大学、奈良女子大、中央大学、日本大学の各教授を歴任した）はのべている。浅野の蔵書のうち、フランス滞在ちゅうに熱心にあつめたコント文献は、円谷弘教授が一括して購入し、のちこのコレクションは日本大学社会学研究室に寄贈された。いまこのコント文献は、日本大学文学部図書館の地下に架蔵されている。

浅野の全蔵書の中からコント文献を選びだした桜井の調査によると、そのあらましは左記のとおりである。

コント自身の著述……………	一八
コントの書簡……………	一〇
同遺言書……………	一
コントに関する研究文献……………	六三
その他、雑誌やパンフレットが約二〇〇冊あるが、浅野のつくった目録によると、つぎの通りである。	
著述……………	三五
書簡……………	一三
遺言書……………	一
研究文献……………	一二〇

注・桜井庄太郎「故浅野研真氏蒐集のコント研究文献について」『社会学徒』第十三卷第十号所収、昭和14・10。

浅野の蒐集した文献は、玉石混淆の感がないでもないという。しかしながら、社会学関係の和書やコントに関して、これだけの文献をまとめてもっている大学はなく、その意味で日本大学文学部図書館は日本有数のものである。

こんにち日本大学文学部図書館の地下に架蔵されているコント文献は、各国語（英、独、仏、ポルトガル、スペイン語）にわたっており、約

一八〇冊以上もある。

浅野の書込みについて。

浅野研真がパリ滞在中に購入したコント文献には、所々に赤や黒色エンピツ、黒インキなどを用いて、下線を引いたり、単語の訳語や寸評のようなものを書き入れたものがみられる。洋書を丸ごと、さいごまで通読するには力と根気は不可欠である。浅野は浩瀚なコント伝や巻数の多い著作をよまなかったが、厚みのない文献はわりとよく読んでいた。書込みがみられるコント文献を挙げると、左記のようになる。いま刊行年の古い順にならべてみよう。

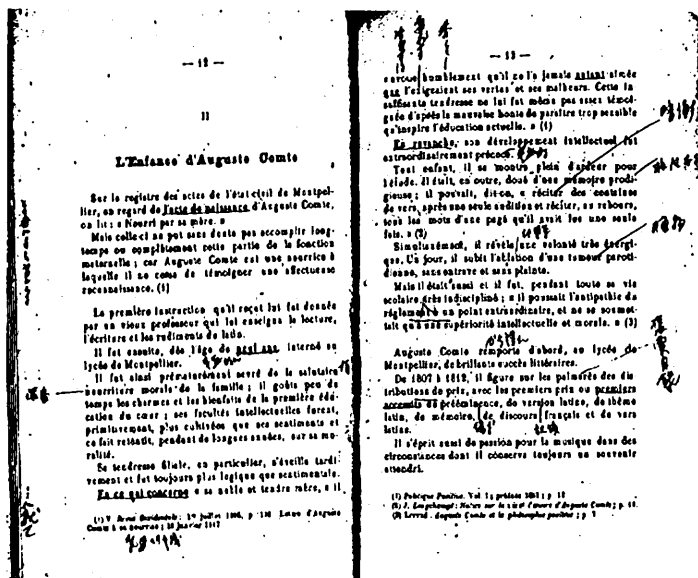
(一) Auguste Comte: *Opuscules de Philosophie Sociale* 1819-1928, Ernest Leroux, Paris, 1883

同書は全三〇六頁。浅野はp. VIまでよんでいる。赤エンピツによる下線がp. VIに六行ほど引いてある。

(二) J. Longchamps: *Notice sur la vie et l'Œuvre d'Auguste Comte*, fonds typographique de l'exécution testamentaire d'Auguste Comte, Paris, 1900

同書は全二一八頁。浅野は二〇四頁までよんでいる。本の扉に浅野は「本書は一年前に現はれたる時の論文を刊行したもの」と万年筆で書き入れている。青インキや赤エンピツを用いて下線を引いている。

(三) Émile Corra: *La naissance du génie d'Auguste Comte sa vie jusqu'en 1819*, Revue Positiviste Internationale, Paris, 1919.



Émile Corra 著 *La Naissance du Génie d'Auguste Comte, sa vie jusqu'en 1819*, Revue Positiviste Internationale, 1919 にみられる浅野研真の書き入れ。

同書は全四四頁。浅野はさいこの頁まで読んでいる。赤エンピツによる下線や黒インクによる訳語の書き入れがみられる。

- (四) Auguste Comte: *Cours de philosophie positive*, extrait a l'usage des candidats aux baccalauréats, librairie Delagrave, Paris, 1920

同書は全一八〇頁。p. XVIまで黒インクや赤エンピツによる書入れがある。

- (五) Émile Corra: *La naissance du génie d'Auguste Comte II, sa vie, son oeuvre en 1820*, Revue Positiviste Internationale, Paris, 1920

同書は全二九頁。青インクや赤エンピツによる書入れが六頁まである。

- (六) F. J. Gould: *Auguste Comte*, Watts & Co. London, 1920

これは英書である。全一一九頁。浅野は全巻通読せず、所々ひろい読みしたものである。黒や赤エンピツによる書入れが所々にみられる。

- (七) Émile Corra: *Centenaire de l'écllosion du génie d'Auguste Comte*, Société Positiviste Internationale, Paris, 1926

同書は全六八頁。赤エンピツによる下線、黒インクによる単語の訳語の書入れがみられる。

- (八) Émile Corra: *Centenaire de l'essor du génie d'Auguste Comte*, Société Positiviste Internationale, Paris, 1926

同書は全五三頁。赤エンピツによる下線、青インクによる単語の訳語の書入れがみられる。

(b) René Hubert: *Auguste Comte*, Vald. Rasmussen, Paris, 1927

同書は全三二頁。二五頁まで、赤エンピツにより下線、黒インクによる書入れなどがみられる。

(c) Ch. Lalo: *Auguste Comte Cours de Philosophie Positive*, librairie Hachette, Paris, 1928

同書は全一一六頁。浅野は本書をさいごの頁までよんでいた。青インク、黒、赤、青エンピツなどを用いて、単語や熟語の下に線をひいたり、訳語を書入れている。

浅野はパリ時代に親交があった国際実証学会々長エミール・コラの小著を愛読していたようである。

昭和六年（一九三二）一月十九日夜六時から、コントの生誕日を記念するため、またかれの主著『実証哲学講義』第一巻の百年祭をかねて、「コントの夕べ」が、内幸町の「レストラン・パリ」で開催された。同夜、左記の三名が講演をおこなった。

コントの結婚生活……………浅野研真

「実証哲学」訳出の苦心……………石川三四郎

日本におけるコント研究史……………小林郁

最初に浅野研真によるあいさつがあり、夕食後講演に移った。浅野はコントの結婚生活をくわしく語り、聴衆の興味をそそった。つぎに石川が翻訳の苦心や社会思想のたちばから見たコントの学説等を語った。さいごに小林は、帰朝後コント思想を学生に伝えた建部逯吾の回顧談をかたった。

同年三月、『社会学徒』（第五卷第三号）は、「コント研究会」の創設を呼びかけている。じっさい同研究会は、設立に成功したかどうか不明で

ある。曰く――

社会学の父オーギュスト・コントに関する研究は、極めて重要なにも拘らず、特に日本には、甚だしく閑却され兼ちである。吾々は、時流のみ棹さず社会学界の弊風に抗し、根本的なコント研究を達成せんことを望む。

発起人は、浅野や桜井であったものと思われる。会長には円谷弘の名がかかげてある。「コント研究会」の事業は、コント文献の蒐集、翻訳、出版である。コントの生涯や学説の研究をおこない、定期的に研究会を開催するものであった。コント研究に従うものは、誰でも入会できるとしている。会費は、月額一口――一円である。

同誌にはまた、浅野研真編『コント文献及年譜』（社会学徒社）の『近刊予告』が載っている。その内容は――

口絵数葉

コント著作目録

コント研究文献

コント略年譜

である。同書は『幻』におわったものか、未見。

六 歴史的概観——日本におけるA・コントの運命

これは数奇な運命を背負いながら、東漸^{とうしん}の航路をつたって極東の小国日本にたどりついた、フランスの思想家オーギュスト・コントの日本における受容史を綴ったものである。これは過去に目をむけた歴史的な研究である。コントの哲学は、狂乱の哲学と紙ひとえであるかもしれないが、これは社会学の名づけ親として、世界中で研究の対象とされこんにちに至っている。いふなれば、コントは世界市民なのである。

明治初年に洋書取っぎ店を通じて、アメリカやイギリスから取りよせたコントに関する英書が、西周（一八二九～九七）という啓蒙学者によって読まれ、解され、メモにとられ、さいごにその内容は弟子につたえられた。西が興味をひかれたのは、コント哲学の実質的な中味であった。語学の発達がじゅうぶんでない、明治のはじめに、一介の篤学の士が舶載された書物をたよりない語学力でよみ進み、理解せねばならなかったかを思うと、そのしごと及ばずながら一臂^{いちひ}の力をかしたい気持ちにかられる。

「日本におけるオーギュスト・コント」のテーマは、これまで手がけてきた『社会学伝来』の研究（『社会志林』に連載中）の余得として生まれたものである。多年日にふれた彪大な日本文献のなかから、他日利用するつもりでコントが登場する写真複写^{フツペ}をすてずに取っておいたが、今回それを余すところなく利用することができた。

コントの学説はいつごろどのようにわが国に伝わったのか。その仲介者はだれであったのか。コントの名とその哲学がどのようにわが国の学界に浸透し、広まっていったのか。コントの学説のもつ広さ、深さ、多様性などを編年史的に記したのが本稿である。

引証のために本稿に掲げた文献は、もとより完べきなものではない。取りあげるべくして、取りあげなかったもの、きつと脱漏もたくさんあるはずである。そういった不完全な参考文献でも、日本におけるコント受容の鳥瞰図をつくろうとすると、多少とも役立つはずである、とみずからなぐさめ、ペンを執ったしだいである。

コントの日本伝来の軌跡を、各時代の活字（文章）によってつたえたら、おもしろい図ができるのではないかとおもった。文献リストを作っただけでは、単に商品目録^{カクログ}または書目におわってしまうからである。それは書き手の息づかいや特徴がまったく感じられぬ死物である。著者の用いる単語や片言雙語、長短の文章、すなわちかれが使うことばから、時代やコント理解の度合いなどがわかるはずである。



鳥取県津和野町にある西周の旧居（国指定文化財）。〔筆者撮影〕

文章資料は、あくまで客観的なものである。が、実証的研究の基礎は、確実な文献（書物や文書）のうえにおかねばならない。コントの哲学的思想の日本における伝播と波動の状況を知るには、各時代の言語——雑誌や書物にみられる表現を綿密に分析する必要がある。また研究の深奥に達するには、それぞれの書き手の心や意識のうごきを究めねばならぬであらう。

*

明治期。

いずれにせよ、西周はオランダ留学時代にコントの学説（実証哲学）のことを識った。が、講義によって識ったものか、それとも書物を通じて識ったものか明らかでない。おそらくオランダの哲学者オプゾマー（一八二一—一八九二）の著書の仲立ちによったものであらう。維新後、盛んに啓蒙活動をおこなった西は、明治三年（一八七〇）秋——私塾「育英舎」の塾生に、コントの有名な知識発展の三段階の法則について語るのである。しかし、西はコントが唱える、人間の知識は三つの階梯（第一は神学的、第二は形而上学的、第三は実証的階段）をへて展開する、といった学説を正確に理解していたかどうか疑しい。西はイギリスの哲学者・批評家ジョージ・ヘンリー・ルイス（一八一七—一七八）が著わした『列伝哲学史』（一八五七）の第十二章にみられるAuguste Comteの短章を読むことによって、三段階説や実証哲学のことを識るのである。

西の英語は、独学によって学んだものである。西は、ルイスが英訳したつぎの語を——

Theological stage (神学家)
Metaphysical stage (空理家)
Positive stage (実理家)

と和訳している。Stageは(発展)段階の意であるが、西は“舞台”や“場”と訳せるとのべている。

いずれにせよ、西はルイスの原文を正しく読解できたかどうか疑問が残る。

ともあれ、西はコント哲学の片鱗をはじめて日本人に伝えた第一号である。そしてコントの名と実証哲学(西は“実理学”と訳している)のことがはじめて活字となったのは、明治八年(一八七五)六月のことであり、「人世三宝説 一」(『明六雑誌』第三八号所収、明治8・6)においてであった。そして二年後の明治十年(一八七七)五月、西はジョン・スチュアート・ミル著『利学』(『功利主義』を訳したもの)の翻訳において、コントの名と実理哲学がふたび姿をみせるのである。

明治初年はコント哲学の渡来期とすれば、明治十年代は、その紹介につとめた時期とみなすことができる。コントの名と学説の断片は、訳書(ミル、トンプソン、チェンバース、ピエール・ラヒット、スペンサー、ウオード、フェーアバンクス、グンプロヴィッチらのもの)や諸雑誌(『東京学士会院雑誌』『中央學術雑誌』『哲学会雑誌』(のちの『哲学雑誌』)『大日本大家論集』『六合雑誌』『社会』『社会学雑誌』『学燈』『東洋哲学』や哲学、宗教、社会学、文明論、社会主義、哲学辞典などの諸書において現われる。

この時期、コントの社会学説は、こま切れるにしか紹介されず、スペンサーの著作のように単独で出版されることはなかった。スペンサーのばあい、明治十年(一八七七)から同二十九年(一八九六)までの二十年間、毎年のようにその著述が縮訳のかたちで翻訳刊行されたが、コントのばあいは単独で何ひとつ翻訳されなかった。しかし、コントは清水幾太郎がいうように「誰も問題にしなかった」わけではなく(『世界名著 36 コント スペンサー』中央公論社、昭和45・2)、世間の注目的になる機会にめぐまれなかっただけのことである。

明治十年代には、実証哲学(経験論理の意)の概念が、紙上において紹介されている(蒲生仙訳『支那文明論』。従来、「交際学」とか「生活学」と訳されていた「社会学」の訳語はこのころ定着し、やがてそれが汎用された。また「実証哲学」は、この時期、「実験学」「実界哲学」「実験哲学」「積極哲学原論」とも呼ばれていた。

明治二十年代——学者による社会学の研究の歩が、一段とすすんだ。社会学のまことの意味や性格が明らかにされ、科学的哲学の建設者としてのコント、社会発展のすじみちを講究するコント、社会学の原理定則の案出者としてのコント、生物学の法則によって社会学を研究しようとしたコント像がはっきりとしてくる。明治二十年代後半に、本邦初の社会学の単行本(渡江保『社会学 全』(博文館、明治27・1)が刊行され、社会学の祖として一家をなしたコントのことが明記された。

明治三十年代——およそ西洋哲学や社会学を口にする学徒で、あるいは専門外の人間で、スペンサーやコントのことを知らぬ者がいなくなってきた。社会学の概念が明らかになって来、コントの知名度が高まった。コントは一部の学徒から、社会の観念、社会の進化に寄与したとみられた。コントは諸雑誌(『六合雑誌』『社会』『社会学雑誌』『学燈』『東洋哲学』『哲学雑誌』)や、社会学や哲学の専門書のなかで取りあげられる。が、本格的なコント論としては、岡百世の「オーギュスト・コント」(『社会』に掲載、明治32・1)がある。

明治二十六年(一八九三)九月——東京帝国大学に講座制が設けられ、外山正一が日本ではじめて社会学の講義を担当した。同人は同三十年(二八九七)十一月総長に就任するさいに、高木正義と建部遯吾に社会学講座を分担させた。建部は大正十一年(一九二二)退官するまで、東大社会学科に君臨したことは周知のことだが、コントの社会学理論を基礎にした自説のほかは、他を拒否したことはよく知られている。

建部は学生にむかって「社会学の建設はコントに始まり、建部遯吾に至って大成せられた。諸氏は只此の大伽藍に仕上げを施し、装飾を加えることを以て任務となすべきである」と、豪語した。社会学は小生によって完成されたいま、諸君に残されたしごとは、残務整理(研究余滴)だけだというのであろう。

小林郁^{かほ}(一八八一—一九三三)は、東大の学部や大学院で、建部遯吾につき社会学を修めたひとりだが、内幸町のレストラン・パリでひらかれた日本大学社会学科主催の「コントの夕べ」(昭和6・1・19)で、「日本におけるコント研究史」について講演している。それによると、外山正一がスペンサー一点張りであったのに反して、建部はコント一点張りであったという。

明治三十四年(一九〇二)建部先生が帰朝されて、十月から東大で社会学の講義を始め、その時コントの思想を伝えられた。建部先生の思想はコント一点張りであって、帰朝当時の如きは氣焰万丈^{きえんばうじやう}(意氣軒昂^{げんきげん})——引用者、何でもコントでなくてはならなかった(『社会学徒』第五卷第二号所収)。

また小林は *philosophie positive* の訳語についてもふれている。訳語としては、「前から実証哲学が用いられていた」という。しかし、建部は「実理哲学」でなければならぬといった。

わが国の学界は、はじめはコントでなければならぬような状態(夜も日も明けない意)であったが、のちにコントを口にするものがなくなってきたという。このころ建部は、コントを世界の学問の進運の史上にかがやく存在としてとらえ、その学界における地位は、孔子やプラトン

とおなじものと考えていたようである。

明治四十年代——この時期、主として社会学の専門書のうちの一章として、コントが論じられることが多くなる。コントは社会現象の総括者、社会学の組織者、人類教の設立者としてとらえられた。日本におけるコント研究史の一頁を飾るものとして見過すことのできぬ研究が誕生する。小林郁著『コムト 全』（富山房、明治42・10）がそれである。同書はけっして読みやすい研究書ではないが、英仏のコント文献を広くあさって書きあげたものであり、当時のまれにみる労作であった（馬場明男）。

このころになると、コント哲学（実証哲学）、コントの著作のこと、知識発達の三段階説などがはっきりしてくる。

大正期。

コントはときどき雑誌（『廣應義塾 学報』『哲学雑誌』『三田評論』『社会学雑誌』）などで取りあげられることはあったが、何んといっても哲学や社会学の専門書のなかで取りあつかわれることが多かった。知識発達の三段階の法則、科学の分類法、人道教、社会静学と社会動学などについて、めいめいが独自のスタイルで書いている。皆コントの学説を總体的に吟味批判しているが、そこにみられる特徴は、共通する叙述が多いことである。

専門の訳書にもコントの名は散見するが、この時期のコント関連の翻訳のなかでひとときわ生彩を放っているのは、波多野、河野共訳によるミルの『コント実証哲学 附 功利主義論』（而立社、大正12・7）である。

昭和・平成期。

昭和二年（一九二七）から平成十三年（二〇〇一）までの約七十年間に、コントは主として社会学や哲学関連の専門書や辞典などに取りあげられることが多かった。実証哲学者としてのコント、社会生活、社会現象の研究者としてのコント、道徳家・宗教家・政治家としてのコント、知識発達三段階の法則、科学分類法など、コントの人と思想が多角的に究められてくるが、その記述の特徴は大正期のそれのように、似通った叙述が多いことである。

昭和十年（一九三五）ごろまでに、わが国の社会学は西洋思想の摂取をおえ、体系化組織化の一段階を画そうとした（馬場明男）。同年、コントの専門書が三冊相ついで刊行されていることは、わが国のコント研究史上きわめて有意義な年という。

新明正道著『オーギュスト・コント』（三省堂、昭和10・5）

田辺壽利著『コントの実証哲学』（岩波書店、昭和10・9）

本田喜代治著『コント研究 その生涯と学説』（笠書店、昭和10・10）

これらの著述は、コントについて研究するときの入門書であると同時に必読書であろう。

新明の論著の特質は、あくまでコント思想の批判者として現れているといい、田辺は自著において鋭い批判的内容でフランス思想とコントとの関係を明らかにしたものであるという。本田のコント研究の特色は、「コントの精密な考証にもとづいてその生涯を眺め、かつかれの思想を時代的関連において観察したことにあつた」（馬場明男「五 わが国社会学とコント」『社会学小史』所収）。

このうち田辺と本多の著書は、再刊された。昭和二十年代のコントに関する好論文は、早瀬利雄の「明治初期における日本社会学前史の研究——社会学者としての西周とコントの実証主義」（『大倉山論集 第二輯』所収、昭和27・6）である。また昭和三十年代の大きなコント研究といえば、大道安次郎著『アメリカ社会学の源流——アメリカにおけるコントとスペンサー』（弘文堂、昭和32・4）であり、主としてアメリカにおけるコント移入史を描いている。さらに昭和四十年代に現れたコント研究で特筆すべきは、馬場明男の長編論文「五 わが国社会学とコント」（二七七—二〇〇頁、『社会学小史』所収、エルガ、昭和41・6）である。馬場はわかりやすい筆で、明治から昭和期（戦前あたりまで）の日本におけるコント紹介の流れを叙述している。

同時期に清水幾太郎編『世界の名著 46 コント スペンサー』（中央公論、昭和45・2）が刊行されているが、同書に編者・清水によるコントとスペンサーについてのくわしい解説が付いており、コント関係では、霧生和夫によるつぎのような翻訳が掲載されている。

「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」

「実証精神論」

「社会静学と社会動学」

同書などは、コントの人と学説についての好書の一つであり、コントを理解するさいのよき手引書の役を果たすであろう。

人間の思想とは、歴史の産物であろうか。大小の論文や述作にしても、いずれも著者による入魂の作であることにかわりないが、コントにとりつかれ、その研究に一生を献げた日本人はまだわが国にいない。扱う対象がとらえにくい外国の思想家であるだけに、われわれはまた外国人の哀しさ、資料や考証面で、本国の専門家と肩をならべて研究ができないために、ややもすれば先覚の研究を祖述するだけでおわってしまう。コント伝の考証においては、本国の研究家と勝負にならない。われわれ外国人にできることといえば、批評精神を大いに發揮し、コント学説のことば遣いや、コント研究家の論著に文句をつけることだけである。

とにかくわれわれは外国人の生涯と学説について物をかくとき、欧米の文献に依拠するのが一般的であるが、それは他人の寸法で洋服をあつらえるようなものである。

コントの社会学理論は、こんにちいかなる意義をもっているのだろうか。コントがわが国に移入されて約一四〇年ほどになるが、かれの学説はいまや化石になっているのかと問うと、そうでもなさそうである。コントの産業社会に関する考え——産業が巨大化すれば、労使の対立問題が生じることをすでにコントはとうの昔に予見していたのである。コントは組織研究の先駆者であった（小関藤一郎「コント」『社会科学大事典』8『所収、鹿島研究所、昭和44・6』）。

日本に及ぼせるコントの影響。

コントはわが国の社会や学界に、何らかの変化もしくは反応をおこしたのであろうか。この点になると、答えを出すことは容易ではない。日本社会学の創成期、スペンサーやミルの紹介とあい前後して、コントの学説が紹介された。

明治十年（一八七七）前後より、コントの名が文献に散見するようになるが、日本人でコントから感化をうけ、独自の社会学論を展開したという話を聞かない。しかし、創成期後半の日本の社会学の指導的な学者であった東大の建部遯吾は、コントの社会学と儒教思想とを結合して独自の体系を構築したのである（尾高邦雄「日本の社会学」『社会科学事典 第四巻』所収、平凡社、昭和24・2）。

コントの社会学を熱心に研究し、これを儒学的思想と結合して、独特の体系をつくったのは建部であるが、同人によると、儒学はその本質において社会学なのである。儒学・漢学の思想は、政治論であり、道德論であり、また社会論である。建部は五倫の説（人の守るべき五つの道。父子の親（したしみ）君臣の義（正しいみち）夫婦の別（けじめ）長幼の序 朋友の信 などを用いる）に、儒学の社会静学を、易（経）（うらないの

書。万物の変化と論理の関係を説いたもの（や^{しゅんじゅう}春秋（中国上代の歴史書）に儒学の社会動学を見ようとしている、という（蔵内教太「第四章 日本における社会学の移植」『社会学概論』培風館、昭和28・6））。

要するにコントの社会学は、建部の儒教的社会観と一つになったということか。建部がコントの社会学理論を学ぶことによって、その類縁を東洋的な材料（儒教）のなかに見い出そうとし、みずからの社会学を構築しようとしたのは、コントに触発されたからであろう。建部の社会的な物の見方や着眼点に、コントの影がみえかくれている。

Auguste Comte in Japan.

This essay is comprised of 6 chapters. (1) The remains of Isidore Marie François Xavier Auguste Comte (1798~1857), founder of positivism, in France. (2) Nishi Amane (西周), discoverer of A. Comte. (3) A. Comte as appeared in literature in Japan. (4) The list of literature on A. Comte cited in this paper. (5) “Shakai gakuto” (社会学徒), a monthly magazine, and A. Comte. (6) The general view of the fortune of A. Comte in Japan. (7) The summary in English.

This paper considers A. Comte, French mathematician and philosopher, founder of positivism in Japan. His positive philosophy was first introduced into Japan by Nishi Amane (1829~97), a bureaucratic scholar in the Meiji era (i.e. 1870s~1890s). Apart from Dutch, he had some knowledge of both English and French. Nishi studied social sciences in Holland at government expense in the last days of the Shogunate. While in Holland, since he couldn't take things easy, he studied only the essentials of law, economics and statistics for some two years under Prof. Vissering at Leiden university. Nishi also had cherished a desire to study “*Wijsbegeerte*” (i.e. philosophy) before leaving for the West. During his stay in the country, he happened to know Cornelis Willem Opzoomer (1821~92), a famous Dutch philosopher and Comtist, through his writings. This led Nishi to know about Comtism.

After returning home, Nishi was engaged in the enlightening movement, teaching Western learning to his students at his private school in Tokyo. Nishi's knowledge about Comte's ideas became deeper reading “*The Biographical History of Philosophy, from the origin in Greece down to present day*, 1857, by George Henry Lewes (1817~78). Though I believe that Nishi lacked full understanding of the book, his lecture reveals something of Comte's philosophy. At any rate Nishi was the first Japanese who taught Comtism partially to his students in the early days of Meiji (i.e. 1870s). Nishi first referred to Comte's name and his ideas in the article of “Jinsei sanposetsu” (人生三宝説), the law of mental evolution, which appeared in the “Meirokezasshi” (明六雑誌) (No. 38, June, 1870), a magazine and two year later he published an abridged translation entitled

“Rigaku” (利学), “*Utilitarianism*” by John Stuart Mill, in May 1877, where the name of Comte and his positivism were mentioned again in the book.

In the early years of the Meiji Era (i.e. 1870s~1880s), Comte was not fully discussed or criticized either in the magazines or special purpose books. He was however mentioned in fragments of words in the various magazines, technical books, and dictionaries. In the 20 and 30 years of the Meiji Era (i.e. 1887~1906), the study of sociology in Japan advanced considerably, disclosing the true impact of positive philosophy. Shibue Tamotsu (渋江保) first published a book titled “Shakaigaku” (i.e. sociology) in Japan, referring to Comte as a forerunner of sociology. Anyone who studied Western philosophy or sociology then knew about A. Comte, while he also enjoyed popularity among the general public.

Takebe Tongo (建部 遯 吾), a famous Japanese sociologist and professor at Tokyo Imperial University, was a devoted adherent to Comte’s sociological theories, advancing his own theories based on the Comte Doctrine. Prof. Takebe, a bombastic braggart, reigned over the sociology course till he resign his post in 1922. He saw Comte as a star in the academic circles, idolizing him as Plato and Confucius. He was helpful promulgating Comtism.

In the 40 years of the Meiji Era (i.e. 1907~1912), Comte was discussed in the technical books of sociology. He was regarded as an exponent of social phenomena, an organizer of sociology, the founder of “the religion of Humanity”. About this time, Kobayashi Kaoru (小林 郁) published “*Comte*”, in October, 1909. This was the first separate volume on A. Comte ever published in Japan. Towards the end of the Meiji Era, Comte’s positivism and his writings became clear among the scholars.

In the Taisho period (i.e. 1912~1926), Comte was often alluded to in the magazines or technical books of philosophy or sociology. The common characteristics seen there are of similar description. One of the most notable events regarding A. Comte in the period was “*Positive Philosophy of Auguste Comte*” by J. S. Mill which was translated by Hatano Kanae and Kono Mitsu and published from Jiritsusha (而立社) in Tokyo in July, 1921.

From the Showa till the early Heisei period (i.e. 1926~2001), Comte has been often discussed in the technical books of philosophy and sociology or in different dictionaries. The man and his theories were pretty well known to the scholars and we notice similar descriptions.

Early in Showa (i.e. 1920s~1930s), Asano Kenshin (浅野研真), a specialist of Buddhistic sociology, was occupied with writing small papers on A. Comte and collecting literature on him while in Paris. By the 10th year of the Showa (i.e. 1935), sociology in Japan finished its assimilation and scholars started systematizing of their own theories. In the same year, three books on A. Comte were published following one another. The authors and the title of the book are as follows:

Shinmei Masamichi : *Auguste Comte*, Sanseido, Tokyo, 1935.

Tanabe Juri : *Positive Philosophy of Auguste Comte*, Iwanami shoten, Tokyo, 1935.

Honda Kiyoji : *A Study of Auguste Comte, his life and theories*, Shiba Shoten, Tokyo, 1935.

Shinmei discussed critically Comte's philosophical ideas in his book. Tanabe criticized severely the relations between French thought and A. Comte. Honda showed very distinguished skill describing Comte's total personality, based on a wide range of materials. These three books were major publications in the prewar days.

After the world War II, sociology in Japan underwent a totally new change. Though German and French sociology were two dominant schools in the prewar Japan, its trend was to follow American sociology after the war. Up to then the general tendency of sociology in Japan has been to value theories more than the reality. And yet scholars began to watch social investigation in the U.S with keen interest. This led them to change their attitude towards sociology, resulting in realistic approach to society.

Daido Yasujiro published "*The Current of American Sociology, Comte and Spencer in the States*", Kobundo, Tokyo, in 1957. Prof. Baba Akio at

Nippon University issued “*A Short History of Sociology*”, Eruga, Tokyo, in 1966. He described A. Comte in Japan from the Meiji era to up until the prewar times. I would say “*Comte, Spencer*” published by Chuokoron, Tokyo, in 1970, has contributed a great deal to popularize A. Comte, the man and his ideas, among the Japanese. In the book the sociologist and critic, Shimizu Ikutaro, (1907~88), wrote a minute introduction and Kiryu Kazuo translated Comte’s early essays into Japanese.

Though some 140 years have passed, only a small number of people were influenced by A. Comte. Prof. Takebe Tongo systematized his own sociology by combining Comte’s philosophical ideas with those of Confucius.

Thanks are due to the university libraries of Waseda, Senshu, Hosei, Nippon, Tokyo, and also to the National Diet Library, *the Comte House* in Paris.

Prof, Dr. Takashi Miyanaga